五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集

観音林遺跡

（第八次発掘調査報告書）

【縄文時代晩期大洞Ｃ１式土器】

1990．3．30

青森県五所川原市教育委員会

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書

第 1 集	1968	津軽・前田野目窯址	
第 2 集	1974	原子遺跡	
第 3 集	1975	観音林遺跡	①
第 4 集	1979	狐野遺跡	①
第 5 集	1980	狐野製鉄遺跡	②
第 6 集	1983	福泉遺跡	
第 7 集	1984	観音林遺跡	②
第 8 集	1985	観音林遺跡	③
第 9 集	1986	観音林遺跡	④
第 10 集	1987	観音林遺跡	⑤
第 11 集	1988	観音林遺跡	⑥
第 12 集	1989	観音林遺跡	⑦
第 13 集	1990	観音林遺跡	⑧

序　　文

五所川原市教育委員会
教長長　釜　萢　　裕

昭和49年に観音林遺跡を第一次試掘調査した結果、「縄文晩期の土器群」が大量に出土したことにより、五所川原に人が住みついたのは縄文時代であるという昔からの推側が証明されたことは誠に喜ばしいことでありました。

その後、地主である長尾良治氏のご厚意により、五所川原市教育委員会では国庫補助事業により発掘調査をつづけて参りましたが、平成元年度におきましては、土器56箱、石器215点、土偶7点、住居跡７棟のほかに少数の鉄などが出土し、私たち現代人に、あらためて大きな夢を与えてくれるとともに、古代へのロマンをかきたててくれました。

この観音林遺跡第八次発掘調査報告書は、縄文時代における先人の文化の実態を客観的に後世に伝えるとともに、地域文化の向上に大きく貢献できるものと信じます。

終りになりましたが、長年にわたり発掘調査にあたられた新谷雄蔵先生をはじめ諸先生方並びに関係各位に心から感謝申し上げます。

平成２年３月

例　　言

(1)　この報告書は、五所川原市教育委員会が、平成元年７月26日～８月24日の期間に実施した「観音林遺跡」発掘調査（第八次）の調査結果の記録である。

(2)　この報告書のうち、出土した「骨類」の調査は、早稲田大学、金子浩昌氏に依頼し、その調査結果を（表５）として頂いた。ここに記して感謝申し上げる次第である。

(3)　出土した石器、石製品の岩質鑑定は、調査員伊藤昭雄が、担当し、また地学に関する事項も担当した。

(4)　セクション図の作成、及び、出土した遺構の実測は、調査員永沢秀夫、伊藤昭雄が担当した。

(5)　グリットの配置図、及び測量は、五所川原市教育委員会片山浩一が担当した。

(6)　出土遺物の復元、実測、及びトレースは、調査員浅木全一、荒谷順子、葛西みつが担当した。また、土器の復元は、船水寛も一部担当した。

(7)　庶務一切は、五所川原市教育委員会社会教育課、中村　健が担当した。

(8)　本報告書のうち、遺構に関する事項は、調査員永沢秀夫・新谷雄蔵が記述した。

(9)　出土した土器、石器、その他の分類、及び他の一切は、新谷雄蔵が担当した。

(10)　出土した遺物は、すべて五所川原市教育委員会が保管し、市立歴史民俗資料館に陳列して歴史研究の資料に資する。

(11)　終わりになりましたが、発掘を承諾の上、いろいろ援助を賜わった地主、長尾良治氏に感謝申しあげる次第である。

目　　次

表　紙
序　文
例　言
目　次
写真（土偶・土器）…… 1
発掘スナップ…… 3
遺物の出土状況…… 5
グリット・トレンチの状況…… 9
第１～第12図
第１図　観音林遺跡付近地形図…… 10
第２図　航空写真…… 11
第３図　観音林遺跡基本層序図…… 12
第４図　グリット・トレンチ配置図（Ａ・Ｂ）…… 13
第５図　ＡＮ２地区，Ｍ13，Ｍ14北壁セクション図…… 15
第６図　Ｄ地区Ｄ８グリット（堀）北壁セクション図…… 17
第７図　ＡＮ２地区，Ｍ13，Ｍ14グリット，１号住居址実測図…… 19
第８図　ＡＣ～Ｆ区，２号住居址～５号住居址実測図…… 21
第９図　ＡＣ～Ｆ区，カマド址実測図（断面図を含む）…… 23
第10図　Ｄ地区，Ｄ８グリット（堀）平面図…… 25
第11図　ＡＣ～Ｆ区，グリット配置図…… 27
第12図　第８次発掘調査，グリット・トレンチ配置図（模式図）…… 28
〔Ⅰ〕調査経過（第１～第７次）…… 29
〔Ⅱ〕第８次発掘調査…… 34
（ａ）調査要項…… 34
（ｂ）発掘日誌抄…… 35
（ｃ）地形・層序…… 39
（ｄ）グリット・トレンチの設定…… 42

〔Ⅲ〕検出遺構…… 44
（a）第1～第7次発掘調査で検出した遺構…… 44
（b）第8次発掘調査で検出した遺構…… 50
1）住居址（1・2・3・4・5・6・7号）…… 51
2）カマド址（1・2・3号）…… 54
3）土　壙（1・2・3号）…… 55
4）堀（D 8 グリット）…… 55
〔表1〕　縄文時代編年表（第1～第8次出土，土器編年表を含む）…… 57
〔表2〕　各地区出土，土器一覧表…… 59
〔Ⅳ〕出土遺物…… 61
（a）出土した土器…… 61
〔表3〕　石器・石製品一覧表（自然石を含む）…… 65
〔表4〕　石器総括表（A・B）…… 73
（b）石器について（縄文）…… 74
〔表5〕　骨類調査表…… 75
（c）骨　類…… 76
（d）土師器・須恵器…… 77
〔Ⅴ〕考　察…… 79
☆参考文献…… 81
☆資　料
・A・P・L 1～59…… 87
・B・P・L 1～78…… 141
・S・P・L 0～12…… 219
・b・P・L 1 …… 232

口絵1

ＡＨⅢ（大洞Ｃ２式）　　ＡＨ１Ⅲ（大洞Ｃ２式）

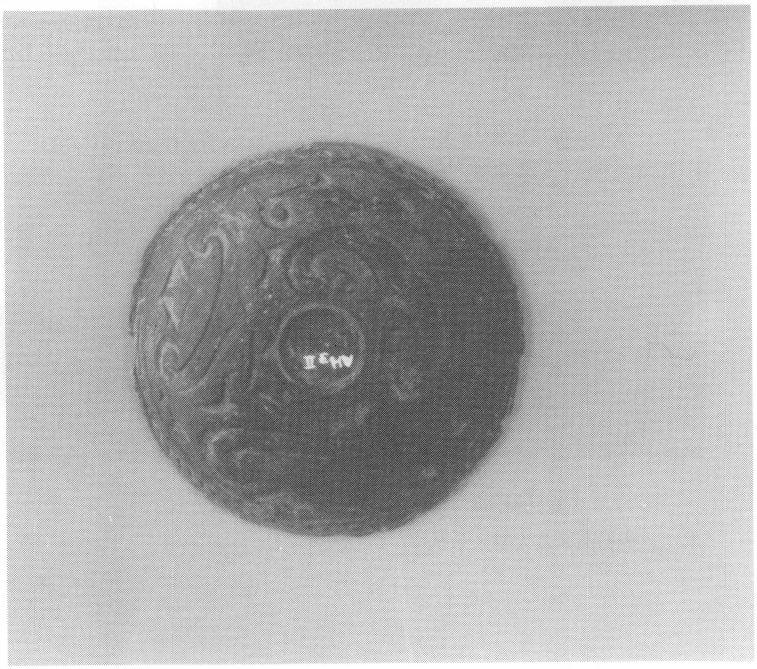
右　14.3cm×8.1cm×1.42cm

（☆器高×最大幅×最厚）

左　9.0cm×3.42cm×1.90cm

下　経 15.28cm

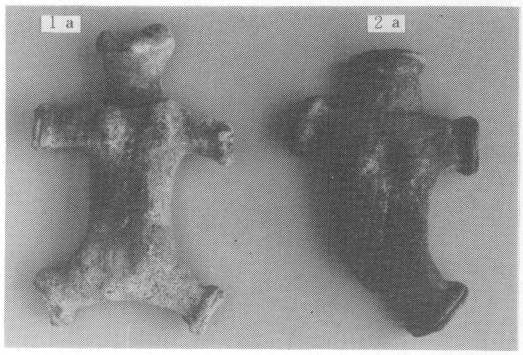
ＡＨ３Ⅱ（大洞Ｃ１式）

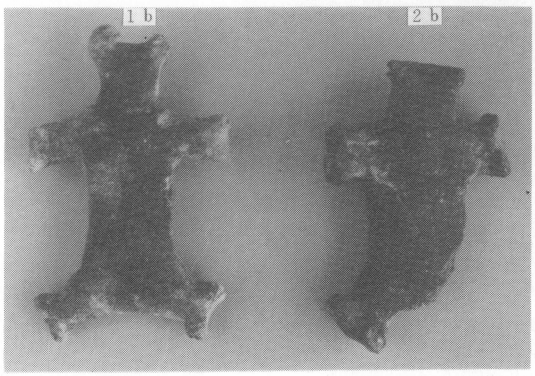


口絵2

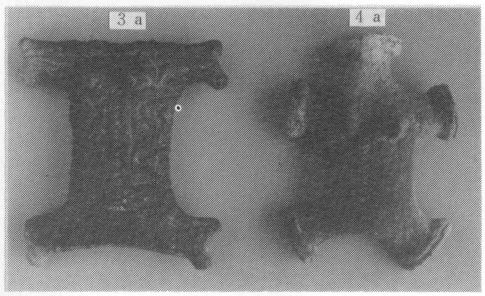
〔土偶5個体とミニチュア壺〕

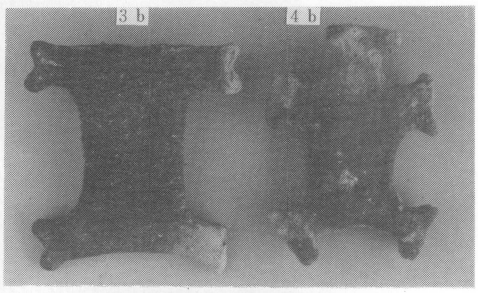
① AH2Ⅲ（大洞C2式）　② AH2Ⅲ（大洞C2式）

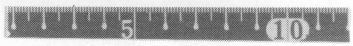




③ AH2Ⅲ（大洞C2式）　④ AH2Ⅲ（大洞C2式）

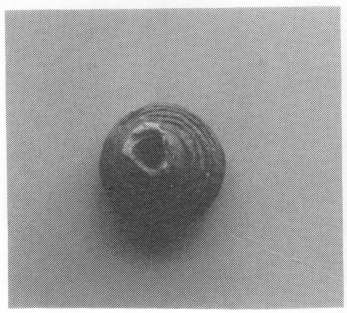






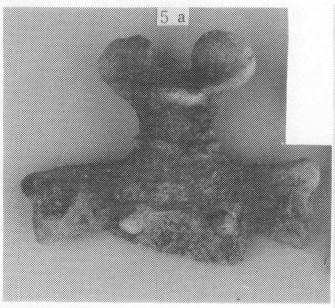
① 8.84cm×6.35cm×2.20cm
② 9.10cm×6.05cm×2.0cm　←朱ぬり痕
③ 6.60cm×6.77cm×2.40cm
④ 7.82cm×5.46cm×1.75cm　←朱ぬり痕
⑤ 14.95cm×9.52cm×2.82cm

AH2Ⅲ（大洞C2式）



ミニチュア壺（器高3.2cm）
（☆器高×最大幅×最厚）

⑤ AH2Ⅲ（大洞C2式）



〔発掘スナップ〕

写1

☆A地区H1～H3の発掘

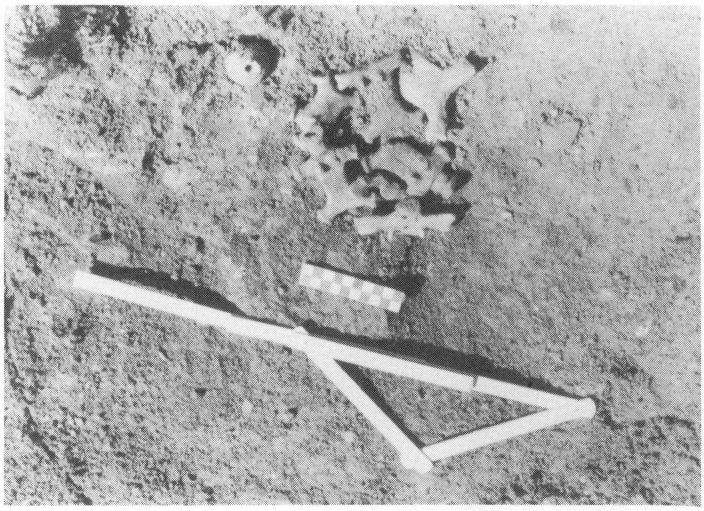
☆A地区H3の発掘

〔発掘スナップ〕

写2

（西方より写す）

☆土偶の出土状況



※H2区Ⅲ層での土偶（5箇体）の出土状況

☆ミニチュア壺形土器も伴出した。

※同上

〔第１号住居址〕－〔M13・14グリット出土〕

写３

←T.P1

☆１号住居址の
完掘状況
※右上に出入口
が見える。

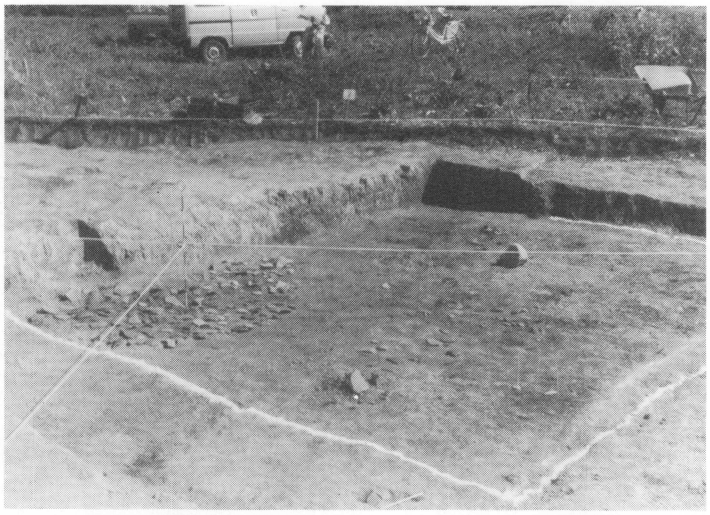
N

（北方より写す）

〔ＡＣ～Ｆ区，２号住居址の完掘状況〕

写４

☆２号住居址北西部の須恵器出土状況



（南西より写す）

☆２号住居址床面上の須恵器の出土状況

（同上のアップ）

☆同上アップ

（北西上方より写す）

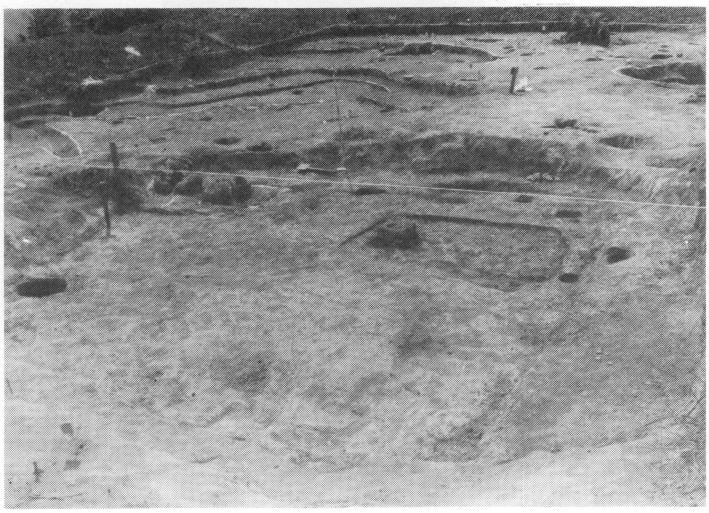
〔ＡＣ～Ｆ区，２・３号住居址の完掘状況〕

写５

↙５号住居址

２・３号住居址→

４号住居址→

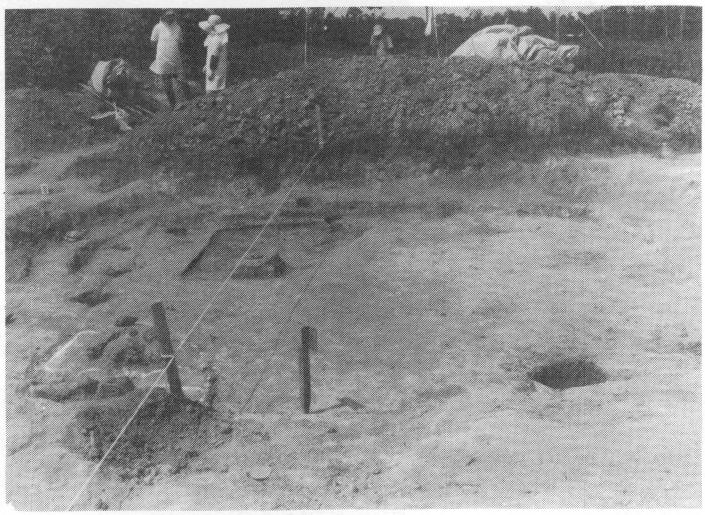


（東方より写す）

☆４号住居址の完掘状況

※４号住居址の床面下に縄文時代の遺構がある。

カマド址→



（南西より写す）

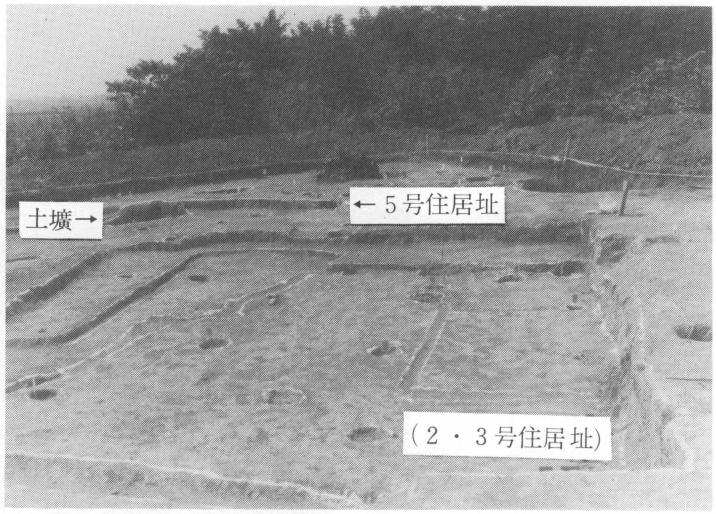
〔ＡＣ～Ｆ区完掘状況〕

写６

２号住居址→

（南西より写す）

☆５号住居址は、円形住居址である。



☆ＡＣ～Ｆ区の北西部の状況

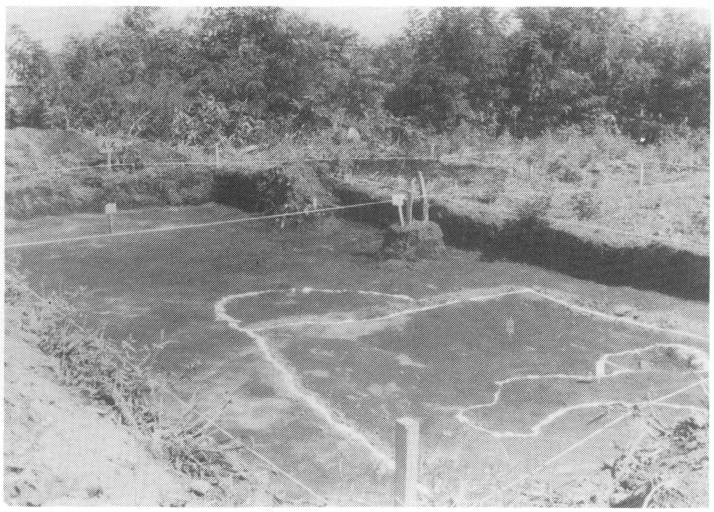
（北西より写す）

〔ＡＳＣ区９・13グリットの状況〕

写７

☆５号住居址Ⅱ層上面での確認状況

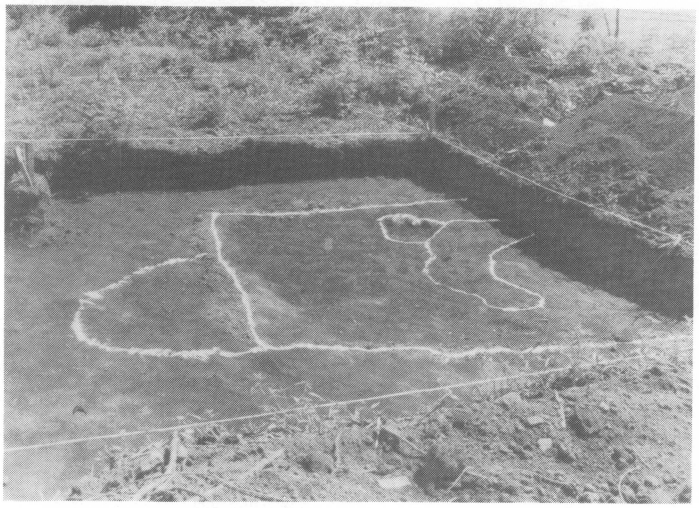
☆９グリットの遺構検出状況（完掘せず）



（南西より写す）

☆同上

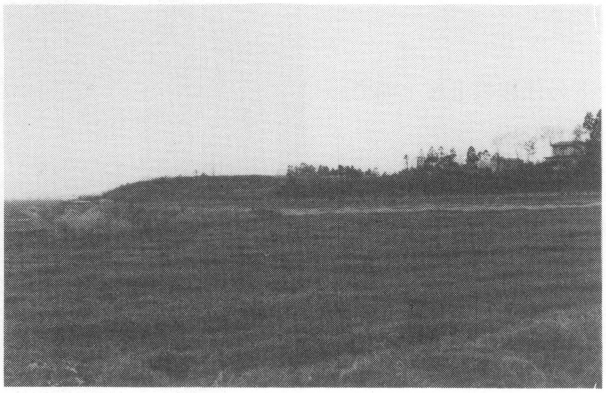
（明年度に持越す）



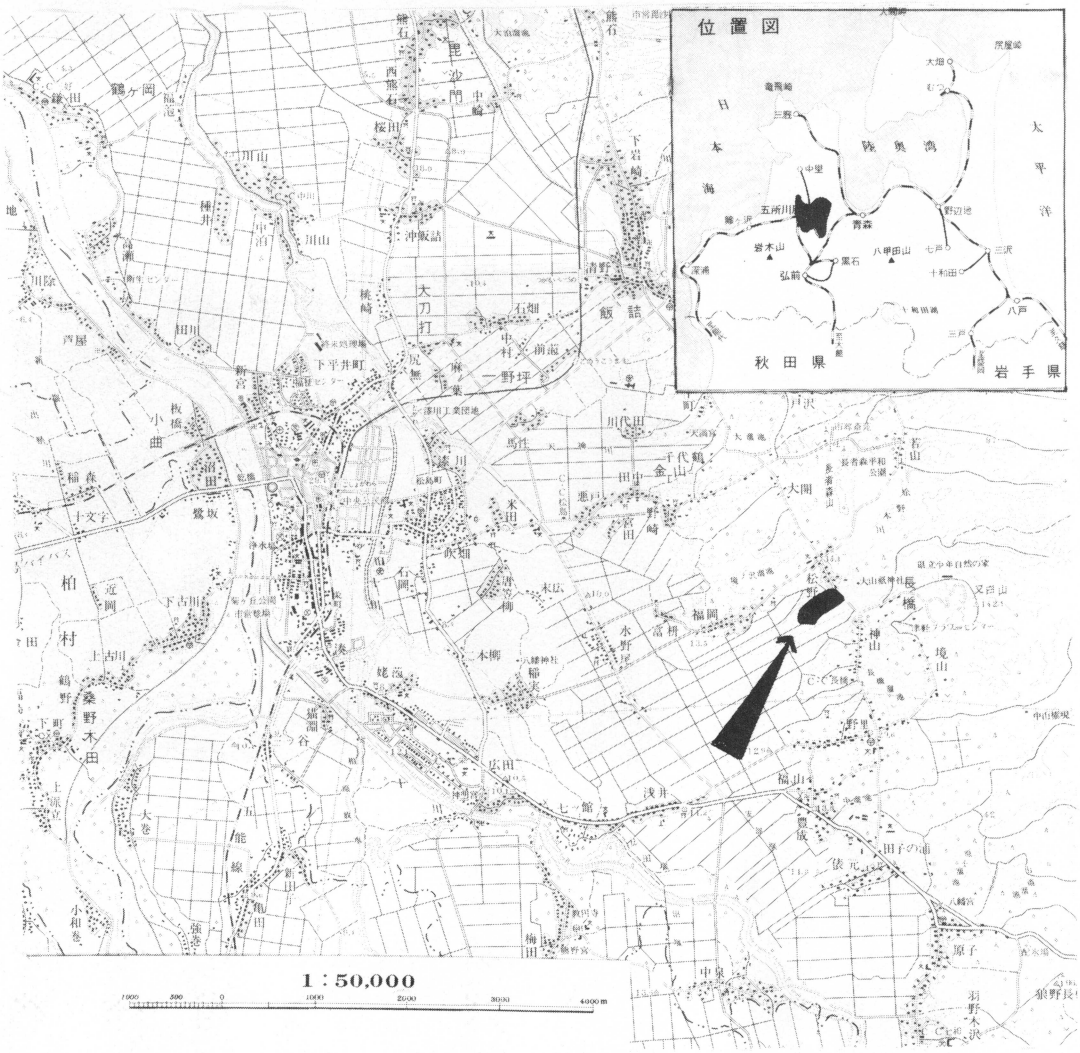
（西方より）

〔第１図〕 観音林遺跡付近地形図

〔観音林遺跡遠望〕

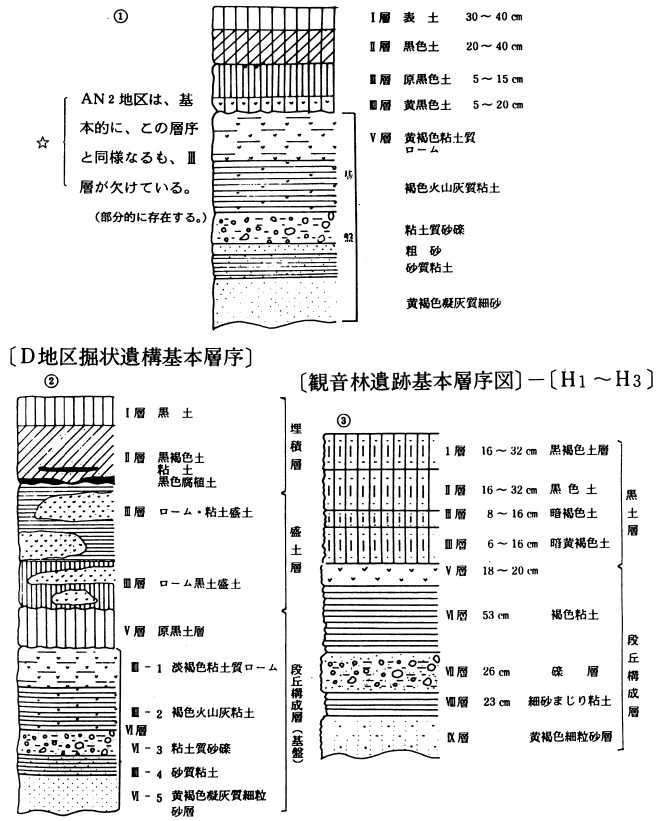


（東南より）

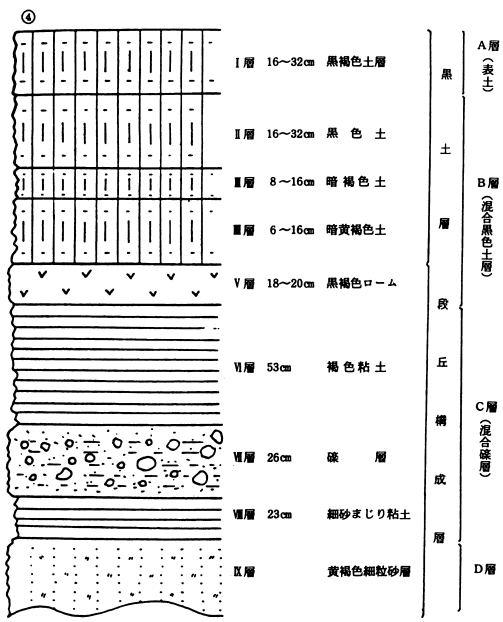


〔第２図〕観音林遺跡・付近航空写真　約 $\frac{1}{1000}$

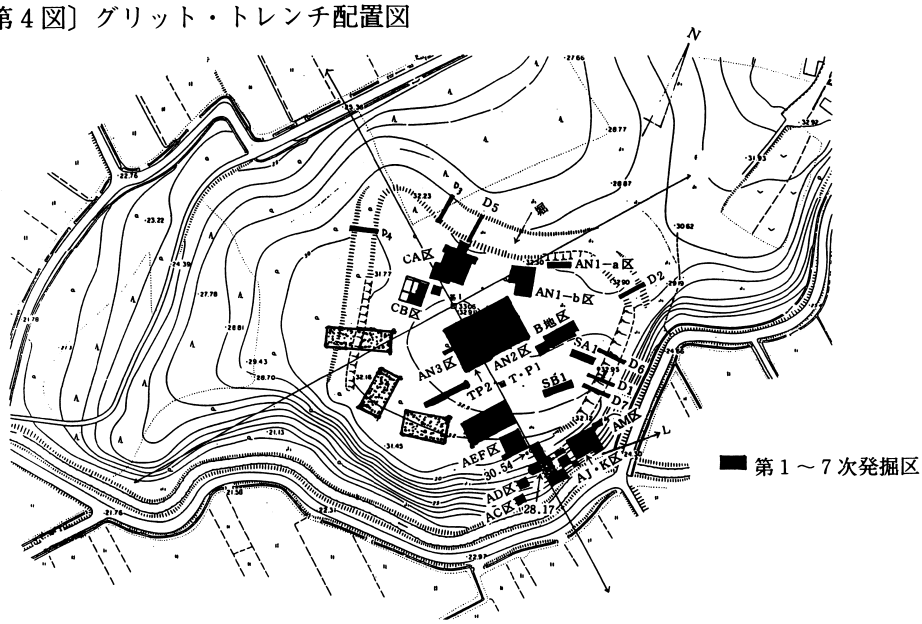
〔第３図〕観音林遺跡・基本層序図



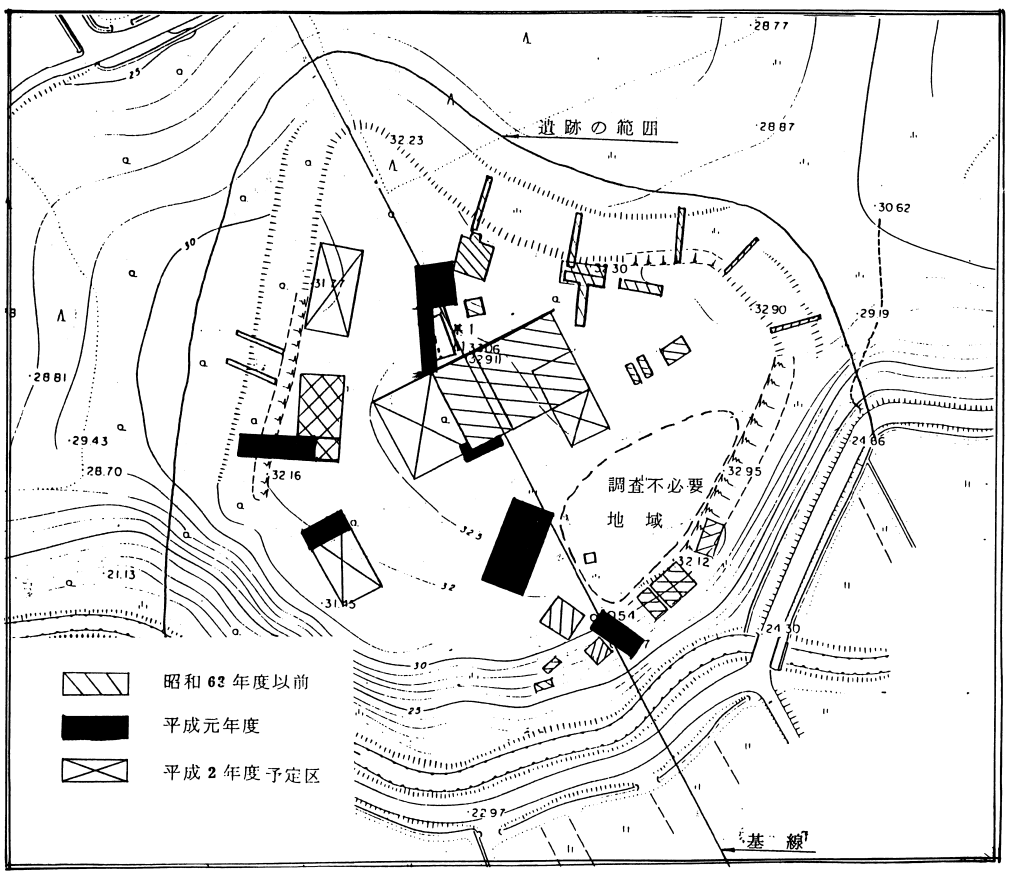
Ａ地区斜面構成層図（③の詳細図）



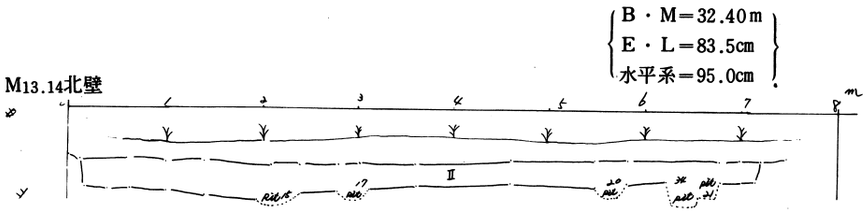
〔第４図〕グリット・トレンチ配置図



☆〔第８次発掘調査、グリット・トレンチ配置図〕

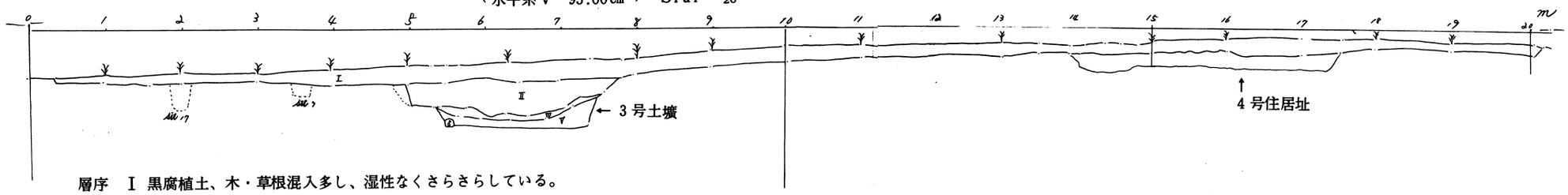


〔第５図〕 M13、14北壁セクション図



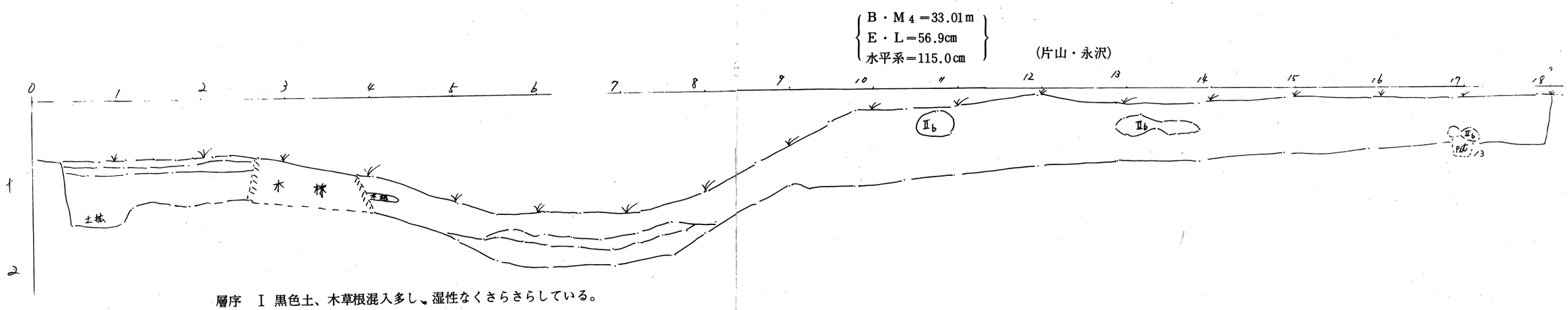
層序　II　西部掘断面図のIIと同じ草木の細根まじり、
ぱさぱさしている。

AC～F区　1.2.3.4グリット北壁セクション図　{BM＝32.40m / EL＝83.5cm / 水平系V　95.00cm}　Slal ＝1/20



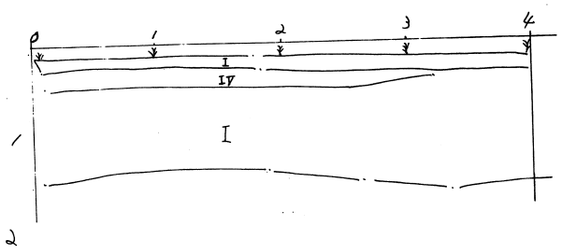
層序　I　黒腐植土、木・草根混入多し、湿性なくさらさらしている。
II　黒褐色土粒子細かくわりにさらさらしている。かすかながら木・草根の細いのがみられる。
IV　黒褐色土は黄褐色のブロック混入
V　茶褐色土で粘性少なく乾くとぼろぼろのかたまりになる。

〔第６図〕　Ｄ８西壁セクション図　　Ｓ $\frac{1}{20}$

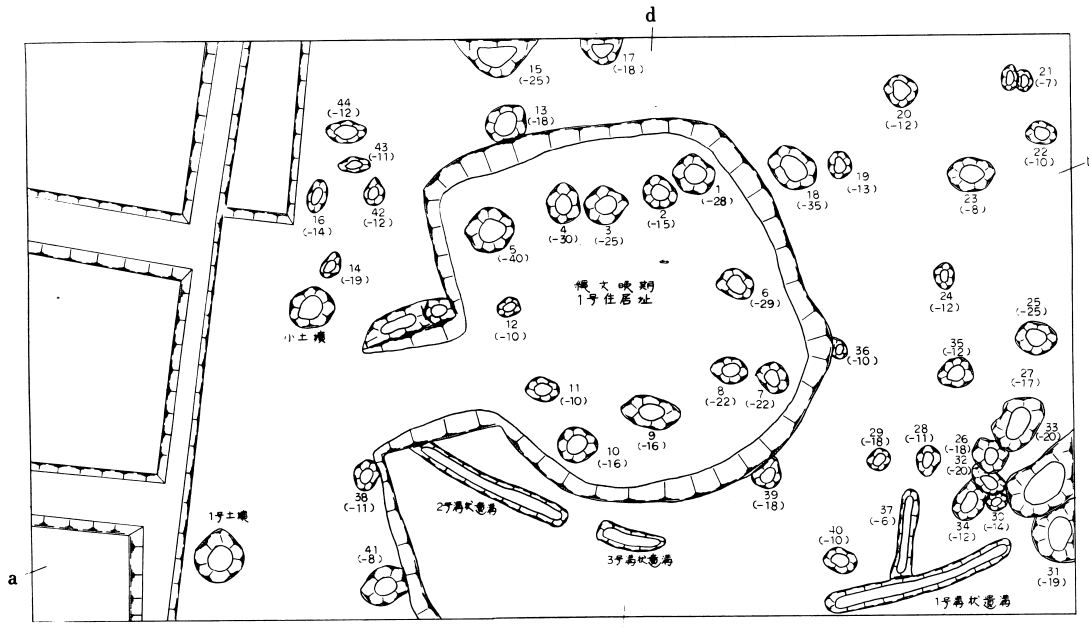


層序　Ⅰ　黒色土、木草根混入多し、湿性なくさらさらしている。
　　Ⅱ　黒褐色土、少量の黄褐土ブロック混入
　　Ⅲ　黒色腐植土（濠の埋まった際の堆積土）
　　Ⅱb黒褐色土、こぶし大の黄褐色土ブロック混入多し（かく混土）
　　Ⅳ　黄黒褐色土ロームの混入大、あげ土と認む。

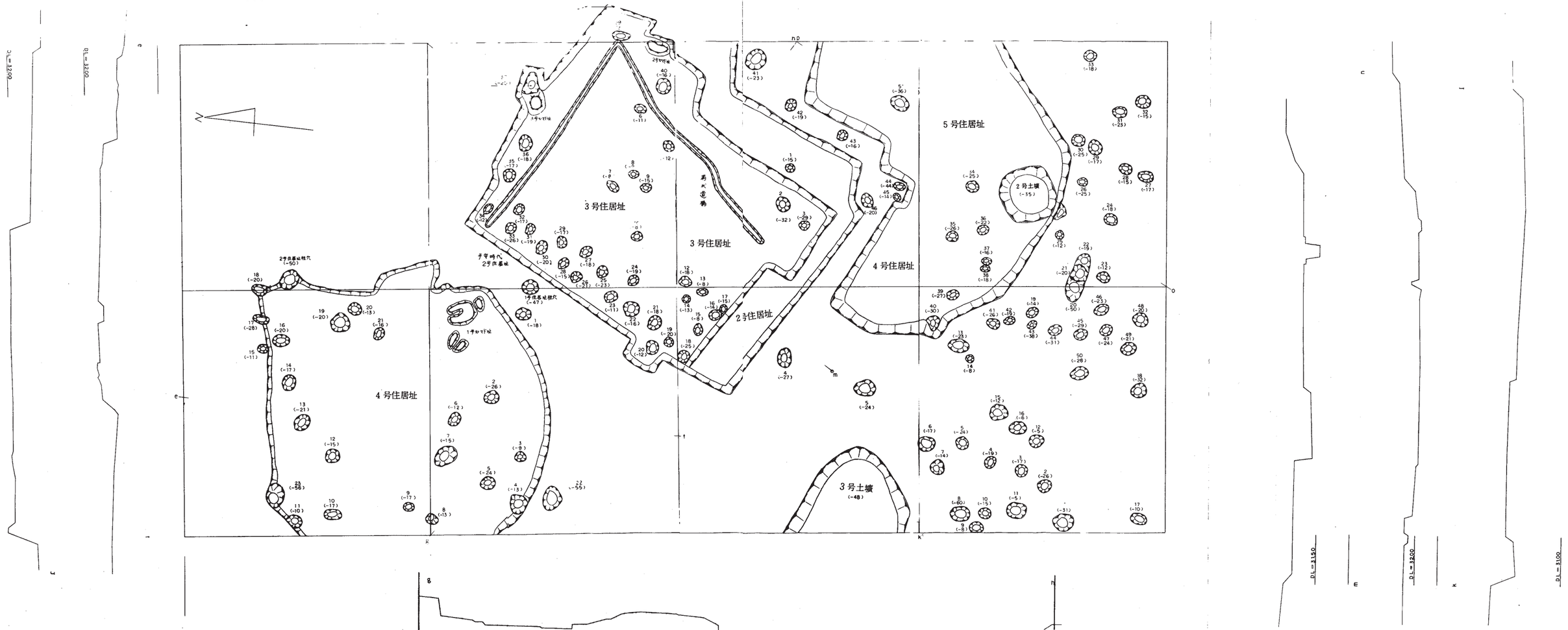
Ｄ地区Ｄ８（堀）北壁セクション図　Ｓ $\frac{1}{20}$



〔第７図〕 M13・14.１号住居址平面図　　S＝$\frac{1}{20}$

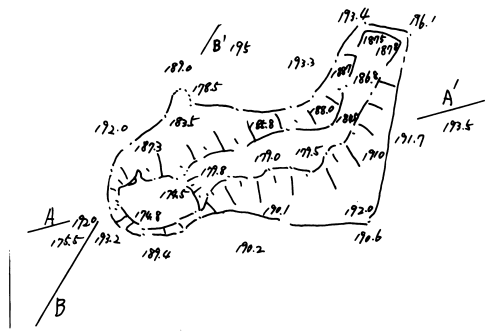


〔第８図〕ＡＣ～Ｆ区検出遺構平面図（断面図）　Ｓ＝ $\frac{1}{200}$

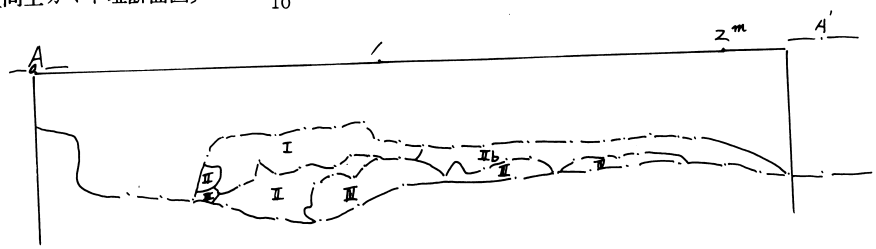


〔第９図〕 ３号カマド址平面図（断面図）

① 平面図 S＝$\frac{1}{20}$



② 〔同上カマド址断面図〕 S＝$\frac{1}{10}$



〈層　序〉

Ⅰ　粘土まじりの黒褐色土

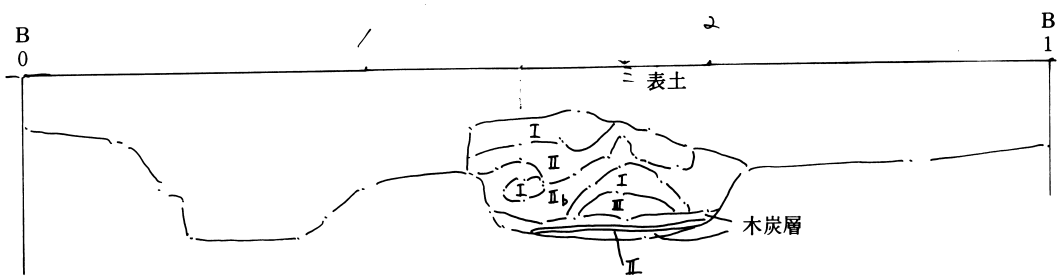
Ⅱ　焼土赤褐色ややかたくしまっている。

Ⅱb 焼土にレンガ状ブロック混入多し。

Ⅲ　黒褐色土、木炭の破片が混入、湿性少ない。

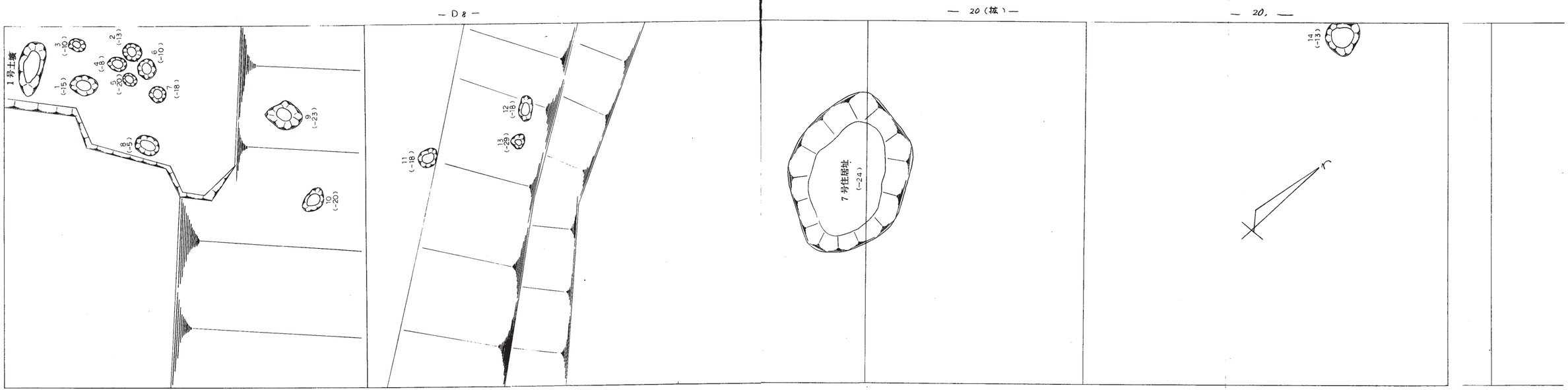
Ⅳ　焼失木炭層

③ 〔同上断面図〕

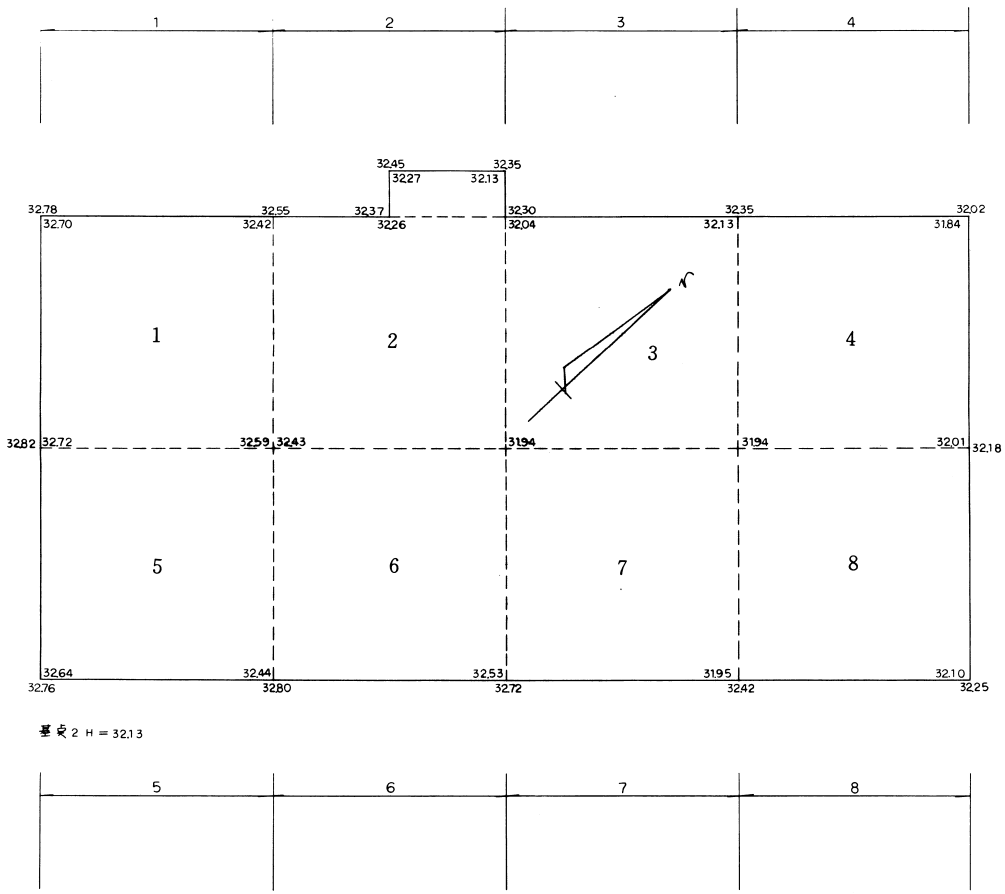


層序はＡ～Ａ　の例に同じ

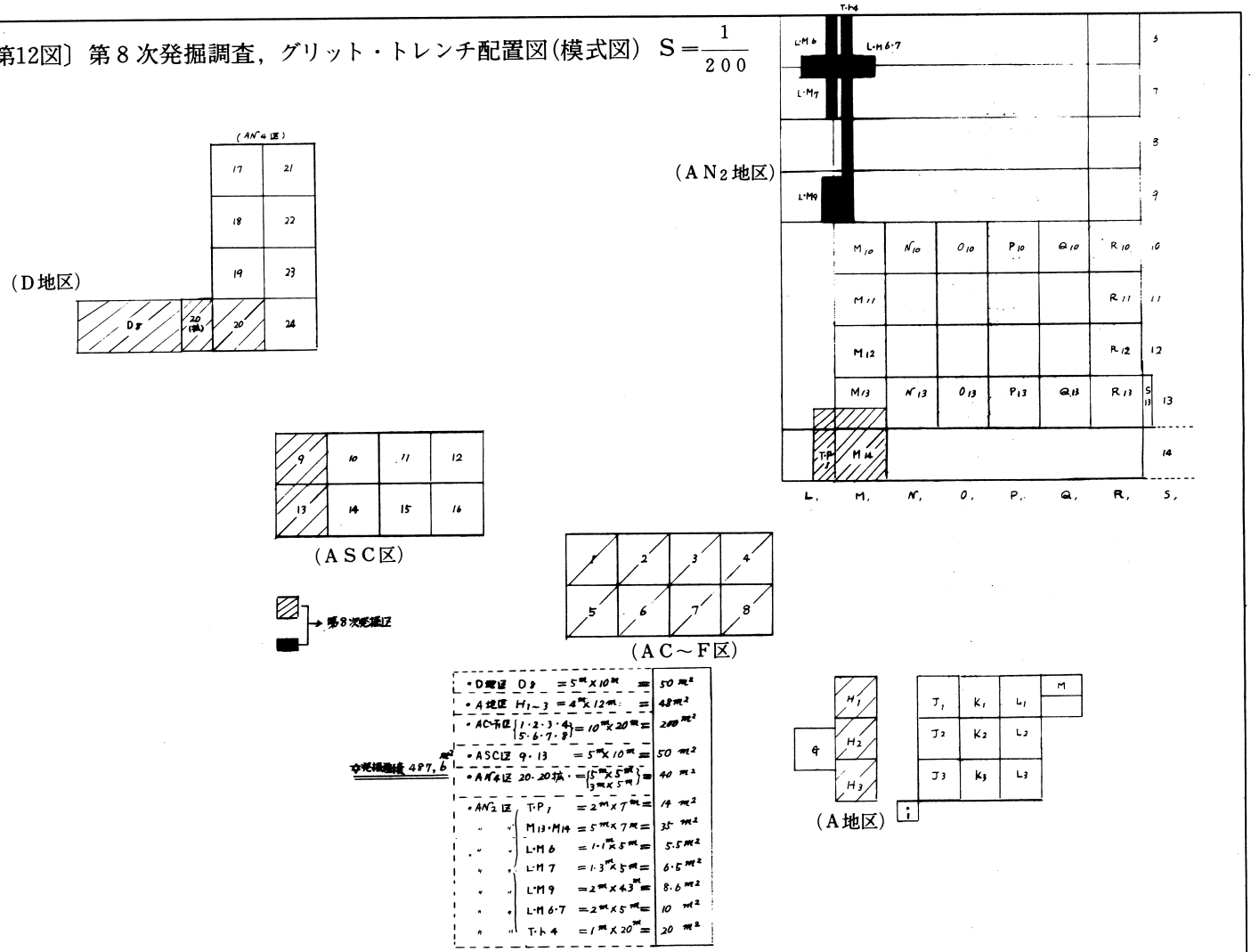
〔第10図〕 D 8 区（堀）平面図　S＝$\frac{1}{20}$



〔第11図〕 ＡＣ～Ｆ区グリット配置図　　Ｓ＝１：50



〔第12図〕 第８次発掘調査，グリット・トレンチ配置図(模式図)　$S=\frac{1}{200}$



〔Ⅰ〕　調査経過

（1）第七次発掘調査に至るまでの経過

◉観音林遺跡は、昭和49年度に第一次試掘調査が行なわれ、わずか４ｍ×４ｍの試掘区（Ａ地区）から、縄文時代晩期の土器群が大量に出土した。（1.5㎡拡張区あり）

これらの土器は、大洞Ｃ２式土器が主体で当遺跡が縄文時代晩期の一大遺跡であることが判明した。

・その後、昭和58年度になって、地主である長尾良治氏の御好意により、近い将来において開発計画があるとの連絡があったため、五所川原市教育委員会では、発掘調査の計画を策定し、第二次発掘調査を実施した。

・第二次発掘調査では、遺跡の所在する舌状台地を、Ａ地区（南斜面）、Ｂ地区（遺跡の東部）、Ｃ地区（遺跡の北部）、Ｄ地区（掘状遺構）、中央区（台地の中央部）の各区に分け、Ａ地区、Ｂ地区、Ｃ地区およびＤ地区の側辺を調査区として選定し発掘調査した。

すなわち、遺跡の中央部を残し、東・南・北の三側辺を調査することにした。

◉第二次発掘調査では延べ163.8㎡を発掘したのであるが、第二次調査における各地区の状況を簡略に述べる。

〔Ａ地区〕→この地区は、縄文時代晩期の遺物が出土する地区である。出土土器は大洞Ｃ２式土器を中心に、晩期Ｂ・Ｃ，Ｃ１，Ｃ２，Ａ式土器が出土した。

〔Ｂ地区〕→この地区では、土壙群が出土した。土壙群のうち１基は縄文時代晩期のもので、他の８基は縄文時代後期のものである。

これらの土壙内外から獣骨片（ニホンシカ・イノシシ等）や鳥骨（ガンカモ）が出土し、いずれも焼骨であることが注目される。

〔Ｃ地区〕→この地区からは、カマド址が検出され、さらに住居址壁面の一部を検出した。すなわち、この地区では、「東北北部の土師器型式」第二型式の土師器を伴う歴史時代（平安期）の遺構が出土した地区である。

〔Ｄ地区〕→この地区は、既述したように、空掘の状態を調査するための地区である。

Ｄ地区では、Ｄ１トレンチを一本（１ｍ×12ｍ）掘を切って東西に掘る、その結果堀の形態が特異なため、明年度さらにトレンチを入れ確認することにする。

以上が第二次調査の概要である。

◉第三次調査は、昭和59年度に252㎡を発掘調査した。その概要を述べるとつぎのとおりである。

〔A地区〕→この地区は、第一次・第二次・第三次調査をとおして縄文時代晩期の遺物が多量に出土する。第三次調査においても同様であるが包含層が約3ｍもあって、これだけの厚さを持つ包含層がある以上、台地上の平地に縄文時代晩期の住居址が存在する可能性が予測される。

〔B地区〕→ここでは、小土墨に囲まれた5角形に近い遺構が出土した。この土墨は、第二次調査の項で述べた土壙群を囲んで出土した。また土師器が出土する小土壙1基を検出する。

〔C地区〕→この地区では、第二次調査で検出した、カマドを備えた一号住居址（平安時代後葉）の西半分を発掘するも、Ⅰ・Ⅱ層が深く、東半分は明年度に発掘することにする。

D地区〕→さきに述べたとおり、D1トレンチによる堀の形態が特異であったため、D2～D5のトレンチを4本南北、東西に堀を横切ってトレンチを設定（1ｍ×12）して掘る。

その結果を検討すると観音林遺跡に所在する空堀は、「箱型堀」であると結論づけた。

◉第四次発掘調査は、昭和60年度に実施、発掘面積は212㎡である。

第一次～第四次調査は予備調査としての最終段階である。

〔A地区〕→さきに述べたとおり、この地区は南斜面で遺跡の中央部南端に位置する。包含層は深く、第四次調査では、約1ｍの深さまで発掘した。（Ⅰ・Ⅱ層→表土、黒土の上半）

このⅡ層の黒土は、二次堆積層であるが、縄文時代前期・中期・後期・晩期、土師器、須恵器が混在する。

すなわち、晩期のものが層序の下位に、後期のものが上位に多く、さらに土師器・須恵器、前、中期の土器が混入する状態である。

しかしながら、主体を占めるものは、縄文時代晩期大洞C2式土器である。（正常な地層では、古いものが下位に、新しいものは上層に包含するのが普通である。）

このことから、台地の中央部は平担地をなしており、台地中央部を削平して、その黒土を南斜面・北斜面に二次的に移動させたこと、および遺跡の南端は急斜面をなしていたことによるものと考えられる。このことは、C地区の層序からも推定でき、中央部に黒土層が殆んどなく、V層に30～40cmの深さで達することからも裏付けられる。

〔C地区〕→この地区では、歴史時代の井戸を1基、3号住居址のカマドと壁面の一部、および、2号住居址の柱穴と溝状遺構を検出したが完掘せず。

〔中央区〕→予備調査の最終年度として中央区の一部を発掘した。すなわち、AN1トレンチ、SA1，SB1トレンチである。（2m×10m）

また、舌状台地の中央部に南から北へ、T・P1，TP2，TP3（2m×2m）を設定発掘した。

その結果、SA1，SB1は遺物の出土はなく、AN1トレンチは、縄文時代後期の遺物が多量に出土することが確認された。

また、T・P3において遺構が存在することが確認できたのである。

◉第五次発掘調査は、以上第一次～第四次調査の予備調査を受けて、本格的な調査の第一年次である。五所川原市教育委員会では、この本調査を昭和63年まで続ける計画であるが、3ケ年では全面調査は無理であろう。第五次～第六次発掘調査の推移を検討しながら、第2期発掘計画を策定する必要があろう。

以下、昭和61年度に実施した第五次発掘調査の状況を簡略に述べる。

第五次発掘調査（本格的調査第一年次）では、計406㎡を発掘調査した。

本格的発掘調査3ケ年計画の第一年目であるため、第一～第四次調査にわたる試掘調査と予備調査の結果について再検討を加え、あわせて疑問として残った問題点を解明する必要があったのである。

いま一つは、予備調査においては意識的に台地中央部をさけ、遺跡の北・東・南の三方向より遺跡の周辺地区を調査対象として発掘を進めて来たのであるが、本年度からは遺跡の中心部に発掘区を設定する手がかりを把握する必要があった。

すなわち、第一～第四次調査の総括と本格的調査への第一年度としての発掘区を選定する必要があったのである。

そのため、第四次で発掘した、A地区のE5・F5 J・Kグリット。C地区ではAグリ

ット、X1グリット、Bグリット。遺跡の中央では、AN1・AN3・SA1・SB1のトレンチ、およびT・P1・T・P2・T・P3の各区を対象とし、これらの発掘区において検出した遺構の完掘とその究明が必要であった。

なお、このうち、SA1・SB1・T・P1・TP2には、遺構・遺物等の出土はなく第五次調査では除外した。

他の各区では、遺物・遺構の存在を認めたので、このうち、C地区A・Bグリット、T・P3を含めたAN2グリット、A地区のJ・Kグリット、E5・F5の各グリットを設定して発掘した。

その結果、C地区では、住居址1・2号・1号井戸、およびAN2地区では柱穴群と土壙、A地区では、大量の後期・晩期の土器群が混合層に含まれて出土した。

以上の結果を得たのであるが、A地区のJ・Kグリットの包含層は厚く、さらに掘り下げが必要であった。また、A地区のE5・F5グリットには柱穴群が検出され遺構の存在が予測できた。さらにAN2地区では柱穴、土壙が認められたので拡張して調査する必要があったのである。

◉第六次発掘調査は、昭和62年度に実施した。第六次発掘は、第一期発掘調査の2年目である。発掘面積は481㎡で、遺跡の中心部に主力を置くことにした。

すなわち、〔A地区〕→E5・M1・M2，J1，J2，K2。〔AN2地区〕→O・P・Q・R～10～13、および、〔AN1b地区〕→X1，X2，Y1，Y2の各区である。

既述のように、この調査では、遺跡の中央部である〔AN2地区〕に主力をおき、他の各区は、補強的な意図を持って発掘を進めた。

この第6次発掘調査で検出した遺構は下記のとおりである。

① 土 壙 群－AN2地区→32基

② 住 居 址－AN2地区→3・4号住居址

③ カマド址－AN2地区→5基

④ 柱 穴 群－AN2地区→240箇所（但し土壙と重複するものあり。）

また、出土した遺物の主なものを列挙すると下記のとおりである。

① 土製品→土偶・三角形土製品、異形土器。

② 土器類→円筒下層，上層、十腰内Ⅰ・Ⅱ、大洞B・C，C1，C2，C2－A（仮称）A、

土師器・須恵器。

③　その他→鉄器、骨類等。

④　石製品・石器→278点

これらの遺構・出土品等については、第１～第６次発掘調査報告書に述べてあるので詳細は省略する。

◉第七次発掘調査は、昭和63年度に実施した。発掘面積は、444㎡である。その内訳は下記のとおりである。

- A地区→K１，K２（４ｍ×８ｍ＝32㎡）
  L１，L２（４ｍ×８ｍ＝32㎡）
- A地区→C～F　（２ｍ×３ｍ，２ｍ×２ｍ，２ｍ×２ｍ，２ｍ×３ｍ）＝20㎡
- ＡＮ２地区→M10,11,12,13……（５ｍ×５ｍ，５ｍ×５ｍ，５ｍ×５ｍ）＝75㎡
- ＡＮ２地区→N10,11,12,13……（５ｍ×５ｍ，５ｍ×５ｍ，２ｍ×３ｍ，５ｍ×５ｍ）＝81㎡
- ＡＮ２地区→Q11……（５ｍ×５ｍ）＝25㎡
- ＡＮ２地区→O12,13,P12,13……（５ｍ×５ｍ，５ｍ×５ｍ，５ｍ×５ｍ，５ｍ×５ｍ）＝100㎡
- ＡＮ２地区→R12,13，S13……（５ｍ×５ｍ，５ｍ×５ｍ，１ｍ×５ｍ）＝55㎡
- ＡＮ１ｂ地区→A・B……（２ｍ×４ｍ，２ｍ×４ｍ）＝16㎡
- 発掘区外→ＹＺ（２ｍ×４ｍ）＝８㎡

第六次発掘調査以来、遺跡の中央部であるＡＮ２地区に主力をおき、あわせて、遺跡の西半分を明年度より発掘する計画のため、その手がかりを把握する意図で、グリット・トレンチを設定した。

- この第七次発掘調査で検出した遺構については、〔Ⅲ〕に述べてあるので省略する。

この第七次発掘調査で、遺跡の東半分の調査は、補強調査を残して終了した。第八次発掘調査からは、遺跡の西半分へ主力をおいて発掘する予定である。（但し、Ａ地区の南斜面、ＡＨ１～３，Ａ地区ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｌグリットの南端は継続する。）

〔Ⅱ〕　第八次発掘調査

（a）調査要項

＊調査目的―個人の私有地内に所在する観音林遺跡が立ち木の伐採や土取り、及び、開畑計画によって消滅する恐れがあるため事前に発掘調査を実施し、記録の保存と、遺物の保存を計るための緊急発掘調査である。

※調査期間―平成元年７月26日～８月24日

＊整理期間―平成元年８月25日～平成２年３月31日

＊遺跡名―「観音林遺跡」

＊所在地―青森県五所川原市大字松野木字花笠81番地

＊調査面積―(487.6㎡)

＊調査方法―グリット法・トレンチ法による。

＊発掘主体者　五所川原市教育委員会
　代表　教育長　釜萢　裕

＊主管課　五所川原市教育委員会　社会教育課
　課長　寺田　勇
　課長補佐　小野　哲弘
　係長　中村　健
　〃　斎藤　誠
　主査　片山　浩一
　〃　小田桐由美子

＊発掘担当者　日本考古学協会会員　新谷　雄蔵

＊調査員　北奥文化研究会副会長　永沢　秀夫

＊調査員　北奥文化研究会会員　小山　英治

＊調査員　同　上　伊藤　昭雄

＊調査員　青森県埋蔵文化財パトロール指導員　浅木　全一
　五所川原市税務課主事　船水　寛

＊五所川原市歴史、民族資料館　館長　鰐田　茂雄
　主任　佐藤　文孝

（b）発掘日誌抄

＊７月26日～28日

Ａ地区Ｈ１、Ｈ２、Ｈ３グリットの草刈りと、杭打ち、縄張りを行なう。また、Ａ地区Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆグリットの草刈りと、杭打ち、縄張りも合わせて実施する。

午後は、ＡＮ２地区Ｍ14（Ｌ区）拡張区、ＡＮ２Ｒ15グリットの草刈りとＡＳＣ区の草刈り、縄張りも実施する。

さらに、Ｄ地区（堀）Ｄ８グリットを設定し、草刈り縄張りを実施する。

(第４図参照)

＊ベルトコンベアをＡ地区Ｈ１～３に運びＨ１～３の荒掘りを実施する。それと平行して、ＡＮ１ｂ区に４×８ｍのグリットを設定し、草刈りと縄張りを行なう。

＊さらに、ＡＮ２地区に、１ｍ×20ｍのトレンチを東西１ｍ、南北20ｍとして設定し、草刈りと縄張りを行なう。（Ｔ・ｒ４）

＊また、ＴＰ１、ＴＰ２を設定し、（第４図参照）発掘を先行することにする。

＊発掘第３日－本日より、ＴＰ１、ＴＰ２、Ｈ１～３の掘り下げを実施する。

一部に攪乱を認めるが、ベースに遺構が残っているようである。

＊７月29～８月１日

発掘第４～６日Ａ地区、ＴＰ１において遺構を検出、精査にかかる。ＴＰ２、ＴＰ３は、遺構その他望みなし、Ｔｒ４を東西１ｍ、南北20ｍを設定し荒掘りにかかる。１層、２層を掘り、５層上面に進む、このＡＮ２地区には、３、４層は無い。

＊午後よりＨ１～Ｈ３の荒掘りにかかる。それと一諸に、Ｂ、Ｍの移動を行なう。（TP2・ＴＰ３は放棄する。)

ＢＭ１＝28、96
ＢＭ２＝32、13
ＢＭ３＝32、40
ＢＭ４＝33、01

＊ＴＰ４において、大洞Ａ式台付鉢形土器が出土する。また、Ｈ１～３グリットでは、土器の出土が続く、

＊また、ＴＰ１に接するM14では、円形住居跡を検出する。この住居跡の床面上で焼け土と、出入り口を認める。

＊Ｄ地区のＤ８荒掘り開始、即ち、空堀に南北５ｍ×東西10ｍのグリットを設定し荒堀りを始める。

また、M13、M14の精査を行なう。

＊Ａ地区Ｃ～Ｆ区の荒掘り開始、本日一日かかるように思われる。Ｄ８へ，ベルトコンベアをうつし荒掘りを続行する。木根のため作業が困難、

＊M14で検出した住居跡を１号住居跡とする。

＊Ｄ８荒掘り続行、AC～Ｆ区は、西より東へ、１～４、及び５～８とグリット番号をつける。

＊８月２日～８月４日

Ｄ８の荒掘り続行、ＡＣ～Ｆ区荒掘りと、住居跡の一部を確認する。そのため、住居跡の壁面を追求する。（２号住居址）

Ｈ１～３は、荒掘りを終わり、本日午後より２層から掘り下げを行なう。このＨ１～３は出土遺物が豊富である。

＊Ｄ８、ＡＣ～Ｆ区の作業を一時中止、全員をＨ１～Ｈ３に投入する。この区は、包含層が厚く約３ｍ程あるようである。

ＡＣ～Ｆ区２、６区の住居跡の追及を続ける。Ｈ１～３区は、３層へ掘り進む、２号住居跡の範囲を確認する。

＊出土遺物は、小型鉢、石鏃、スクレーパー、後期の土器、であるが、晩期の土器がＡＨ１～３区に多い。

＊８月５～９、10日

発掘第10、11、12日である。ＡＣ～Ｆ区は、整理と、精査にかかる。また、ＡＨ１～３区は、引き続き掘り下げ実施、Ｄ区のＤ８は、ベルトコンベアによる掘り下げを続行する。なお１号住居跡は、精査を終了する。

＊ＡＣ～Ｆ区のうち、グリット番号（１、５、４、８）の荒掘りを実施する。

＊Ｄ８は、精査の段階に入る。遺物の出土は少ない。

＊ＡＨ１～３区は、斜面のため一度整理が必要である。

＊ＡＳＣ区の９グリットは、荒掘り終了の見込みである。また、ＡＳＣ区のグリット番号13の荒掘りにかかる。

＊ＡＣ～Ｆ区のグリット６、７において、２号住居跡を検出する。この住居跡は、焼失したものと認められ、住居跡全体が黒い灰に覆われている。また、焼けた木材が、南北に倒れている。この木材は、板材と観察される。

＊Ｄ区のＤ８は、整理の段階に入る。

＊ＡＣ～Ｆ区の４、８グリットの荒掘りにかかる。また、グリット１～３、５～７は、整理の段階を終わり、精査の段階に入る。

＊ＡＣ～Ｆ区の１・５、グリットは、荒掘り終了の段階で、円形住居跡を検出する。また、グリット５の西壁近くで、さらに一棟の円形住居跡があると思われる。

＊Ｌ６、Ｌ７、Ｎ６、Ｎ７（１×１、１×４、１×１、１×４ｍ）の荒掘りを実施する。このグリットは、調査を補強するため設定したものである。即ち、昨年発掘したＡＮ２区の層序を確認するためである。（このＡＮ２区では、３、４層は、なかった。）

＊出土遺物、一須恵器、土師器、大洞Ａ式台付鉢形土器、線刻石。

この日、教育長、次長、寺田課長、現地視察のため発掘地に来る。

＊８月11日～17、18日

発掘14～16日目である。ＡＣ～Ｆ区の精査にかかる。また、ＡＳＣ区の13、９グリットの荒掘りが終了する。

＊ＡＨ１～３は、掘り下げ続行、それと平行してＡＨ１～３区の東壁セクション図を伊藤調査員が作図する。また、２・３号住居跡のカマドを斬ってセクション図を作成する。

＊発掘面積は、つずのとおりである。

- Ｄ地区，Ｄ８区　＝５ｍ×10ｍ＝＝50㎡
- Ａ地区，Ｈ１～３　＝４ｍ×12ｍ＝48㎡
- ＡＣ～Ｆ区｛１・２・３・４／５・６・７・８｝10ｍ×20ｍ＝200㎡
- ＡＳＣ区，９・13　＝５ｍ×10ｍ＝50㎡
- ＡＮ４区,20.20拡＝｛５ｍ×５ｍ／３ｍ×５ｍ｝＝40㎡
- ＡＮ２区，Ｔ・Ｐ１　＝２ｍ×７ｍ＝14㎡
- 〃　〃　Ｍ13・Ｍ14　＝５ｍ×７ｍ＝35㎡
- 〃　〃　Ｌ・Ｍ６　＝1.1ｍ×５ｍ＝5.5㎡
- 〃　〃　Ｌ・Ｍ７　＝1.3ｍ×５ｍ＝6.5㎡
- 〃　〃　Ｌ・Ｍ９　＝２ｍ×4.3ｍ＝8.6㎡
- 〃　〃　Ｌ・Ｍ６・７＝２ｍ×５ｍ＝10㎡
- 〃　〃　Ｔ・ｒ４　＝１ｍ×20ｍ＝20㎡

Σ＝487.6㎡

＊８月19日～８月22日

発掘第16～18日目である。本日の作業は次の通りである。

１）５号住居跡精査続行、ＡＣ～Ｆ区掘り下げ続行

２）４号住居跡精査と、グリット２の落ち込み掘り下げ続行、なお、グリット９、13は、来年のための参考とする意図である。そのため、荒掘りの後、整理にかかる。このグリットの南半（13）で方形住居跡を認めるも掘り下げず来年に残す。(ＡＳＣ区)

＊ＡＣ～Ｆ区の５号住居跡の整理にかかる。また、３号土壙内の炭化材を石膏で固め取り上げる。さらに、M14、１号住居跡の入り口部を掘り下げる。

＊１号土壙、５号住居跡、および、４号住居跡の整理を実施

＊ＡＨ１～３は、掘り下げ続行、Ｄ８、グリット13、９の整理

＊ＡＨ１～３掘り下げ続行、ＡＣ～Ｆ区精査完了、石灰を張る。また、１号住居跡へも石灰を張り写真を写す。

＊グリット９、13を整理する。また、Ｄ８、グリット20の整理、および、柱穴を掘る。

＊出土遺物－土偶、タタキ石、壺形土器、Scraper、石鏃、皿形土器、石槍、石皿

＊８月23日～24日

発掘第19～20日、本日の作業は次の通りである。

（１）Ａ地区Ｈ１～３の掘り下げ続行、(２)、Ｄ８、グリット20精査と柱穴掘りを実施、５号住居跡（円形住居跡）の精査

（３）ＡＣ～Ｆ区２号、３号、５号住居跡、および、柱穴の石灰張りを実施、出土遺物を取り上げる。

（４）エレベーション、および、セクションポジションを設定する。

＊各グリットの所見を記録する。

＊特記すべきは、Ａ地区Ｈ２グリットにおいて、土偶５個体とミニチュア壺形土器が出土したこと、さらに、５号住居跡の床面を斬ってトレンチを入れたとこの、住居跡の床面（五層）の下に縄文時代の遺構が所在することが確認されたことである。

＊しかし、空堀の年代を摑む目的で実施したＤ８グリットの調査においても、年代把握は、できなかったのが残された問題である。

＊発掘最終日、午前で発掘を終わり、午後より清掃、用具の運搬をする。標高33mのこの

遺跡から眺める岩木山は、美くしく、眼下の津軽平野も美しい。来年もまた此の遺跡に来るだろう。ご苦労さんでしたの合い言葉で山を降りる。

（c）地形・層序（第1・2・3図）

（1）地　　形

本遺跡は、五所川原市の東方約5㎞、松野木部落の南端にあって、五所川原駅前より弘南バスにて約20分、南松野木バス停留所下車、約10分の西方舌状台地上に位置する。

この台地は、最も高い地点で標高約33,283m であって西南方向に突出する台地である。

この地域には、松野木川が県道福山・五所川原線を横切っており、この周辺には、長者森山・境山・鶉野等の遺跡が梵珠山系の山麓に点在している。

松野木地区の地形を大きく分けると、東方から西方へ向って、中山山脈の南端を占める梵珠山地（標高500～300m）、それに続く大釈迦丘陵（標高200～100m）、前田野目台地（標高70～30m）および津軽平野の四つに区分することができる。

この松野木台地は、既述の前田野目台地上に位置しており、北は天神川、南は松野木川によって挾まれた部分を占めている。

前田野目台地は、海成段丘で津軽平野の東縁に原子・野里・松野木・飯詰と連続して分布しており、この台地を梵珠山地に源をもつ小河川が浸食によって谷をつくり寸断している。この開析谷には境ノ沢溜池・長橋溜池がつくられている。

前田野目台地は面高度によって3面に細区分ができる。すなわち、標高50～70m のⅠ面、30～40m のⅡ面、20～30m のⅢ面に分けられる。松野木地区は、このⅡ面上にある。

観音林遺跡は、この松野木台地の南西端部にある。この台地は、その北側を流れる松野木川の浸食によって舌状台地となっており、標高は25～30m を示しⅡ面に連続している。

遺跡の南方一帯は小規模ながら松野木川および、その支流の形成した扇状地となっている。

なお、遺跡の北側約0.3㎞付近を西流する松野木川は、津軽平野を北流して十川と合流するが、一部は境ノ沢溜池に注いでいる。

（2）地質および層序

本遺跡の基本層序は第3図に示すとおりである。

遺跡のベースをなすのは、Ⅴ層のローム層で、遺物の包含層はⅡ～Ⅳ層である。

Ⅴ～Ⅸ層までは段丘の構成層で遺物の出土とは直接的には関係ないが、遺跡内で発見された歴史時代のものと考えられる空掘の構造との関係から特に記載することにした。なお、この段丘の基盤をなすのはⅨ層の凝灰質細粒砂層である。以下に各層の特徴を述べる。

☆層序（第３図）

Ⅰ層・黒褐色を呈しており、草木根が多数混入する腐植土で表土を形成する。

Ⅱ層・黒色土で粒子が細かく、さらさらしており直径１㎜程度の粗砂を混入する。

Ⅲ層・黒色土に粘土が混入したもので、細砂を含み粘性がある。暗黄褐色を呈する。

Ⅳ層・ローム層から黒土への漸移層で粘性が強く、暗黄褐色を呈する。

Ⅴ層・粘性の強い黒褐色均質ロームで、まれに石英粒がみられる。

Ⅵ層・黄褐色で粘性の強い粘土である。

Ⅶ層・粘土・砂および直径数㎝程度の主に亜角礫層で段丘礫である。

Ⅷ層・凝灰質細砂まじりの粘土で下層数㎝はオレンジ色を呈する。

Ⅸ層・遺跡をのせる段丘の基盤をなす層で黄褐色凝灰質細粒砂層である。

以上が、当観音林遺跡における基本層序であるが、前々回の調査（第四次）では、Ｃ地区Ｃ２グリットの発掘調査において得た観察の結果、基本的に既述の層序と同様なるも、Ｃ地区における基本層序図を掲げることにする。

☆Ｃ地区基本層序①

Ⅰ層・表土で草木根が多数混入する腐植土である。

Ⅱ層・黒色土で粒子が細かく、さらさらしており、直径１㎜程度の粗砂を混入しており、前記のⅡ層と同様である。

Ⅲ層・原黒色土である。粒子が細かく、粗砂も混入することは、Ⅱ層と同質であるが、しまりがあり、粘質もややある。

Ⅳ層・黄黒色土で、Ⅴ層の粘土質ロームも混入しており、Ⅲ層からⅤ層へうつる漸移層である。

Ⅴ層・黄褐色粘土質ロームである。均質ロームで粘性も大である。

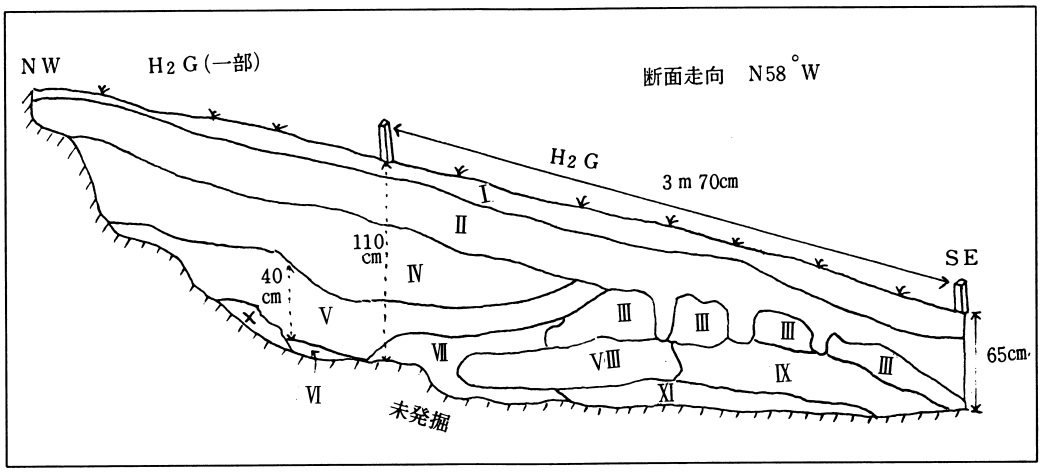
以深は、本台地の基盤をなす層で、第３図③④に同じである。当遺跡は、この層序のⅠ～Ⅲ層に遺物が包含されているが、特にⅡ・Ⅲ層が濃密である。また、検出された遺構は、

いずれもV層を掘りこんでいるものであった。このV層以深は、本舌状台地の基盤をなす層（V～Ⅸ層）であって、既述したとおり堀状遺構との関係からV～Ⅸ層を基本層序として示した。（川村　真一による。）

また、以下には、最も多量に遺物が出土した。A地区H１・H２・H３・グリットの北北東壁セクション図を示し、その層序について述べる。

H１G～H２G（一部）北北東壁セクション図　　記録：伊藤　昭雄

'89.8.17



Ⅰ　表土・黒色土・空隙多い・草の根・木の根多い・以前の発掘で一部盛られた土も含む。

Ⅱ　黒色土・Ⅰよりは緻密・木の根多い・土器片まれに含む。落ち込み３箇所見られる。
H２Gグリッド側では木炭片まれに含む。

Ⅲ　黄褐色ローム。木の根まれに含む。土器片，木炭片まれに含む。盛り土と考えられる。

Ⅳ　黄褐色ローム。木の根まれに含む。木炭片まばらに散在する。粘性あり。下位ほど黄色がかる。土器片まれに含む。盛り土と考えられる。

Ⅴ黄褐色ロームと黒色土の混合層。黒色土優勢。全体として褐色を呈する。
H２Gグリッド側でのⅣとⅤの境界面では木炭の薄層が見られる。
直径２cmの木の根横断している。上記の薄層を除けば、木炭片は均等に散在。
H２Gグリッド側では長径５～10cmの土器片と細かい木炭が密集しているところがある。長径10cmほどの自然石１個あり。

木の根まれに含む。泥岩の扁平な数cmの円礫をまれに含む。

盛り土と考えられる。

Ⅵ　黒褐色土。黄褐色ロームもわずかながら含む。木炭均等に散在。水分の含有比較的多い。柔らかく細い根まれに含む。珪質頁岩の石器一片あり。

Ⅶ　黄褐色ローム。下位は水分を帯びて少し黒ずむ。比較的緻密。木炭均等に散在。木の根まれに含む。灰白色泥岩の小円礫数個含む。

Ⅷ　黄褐色ロームと黒色土の混合層。黒色土優勢。全体として褐色を呈する。木の根、土器片まれに含む。灰白色泥岩の小円礫（大きいものは長径４cmぐらい）数個含む。木炭片散在。盛り土と考られる。

Ⅸ　黒褐色土。黄褐色ローム所々に混入するも黒色土との境界は漸移。土器片まれに含む。灰白色泥岩の小円礫まれに含む。木炭片散在。盛り土と考えられる。

Ⅹ　茶褐色土。ロームと黒色土の均一な混合土。木炭片比較的多く散在。流紋岩の小円礫（長径２cmぐらい）数個含む。比較的破壊の少ない土器の包含層となっている。

Ⅺ　黒色土。土器片含む。比較的破壊の少ない土器多い。木炭片散在。白い骨片含む。中は空洞。大きさは数mm。

堆積の順序および対比

（新）　Ⅰ
↑
Ⅱ
↑
（旧）

Ⅲ＝Ⅳ＝Ⅶ
Ⅴ＝Ⅷ＝Ⅸ　　新旧不明，Ⅺ以外は盛り土と考えられる。
Ⅹ＝Ⅺ＝Ⅵ

（ｄ）グリット・トレンチの設定、（第４・11・12図）

既述したとおり、第８次発掘調査では、遺跡の東半分が発掘を終了するため、その補強調査をすること。および、遺跡の西半分を発掘する計画（第８・９・10次発掘計画）によって、グリット・トレンチの設定をした。

１）補強調査のため設定したもの。

◉ＡＮ２地区→｛Ｔ・Ｐ1・Ｍ13・Ｌ・Ｍ６・Ｌ・Ｍ７・Ｌ・Ｍ9・Ｌ・Ｍ６・７・Ｔｒ４・Ｍ14｝

2）西半分の発掘調査のため設定したもの。

◉D地区→D 8 ・20・20拡

◉AC～F区→｛1・2・3・4・5・6・7・8｝

◉ASC区→9・13

3）継続して発掘するもの

◉A地区→H 1 ・H 2 ・H 3

• 以上の各グリット・トレンチであるが、1）は、AN 2 区の未発掘部の層序や遺物の埋蔵状況を把握したい目的で設定したものである。

• 2）は、遺跡の西半分の調査を目的としたものである。

すなわち、AC～F区、ASC区は、南端部の調査、D地区は、堀の西南端部（開口部）の調査、AN 4 区、20・20拡は、堀の状況を確認する目的である。なお、AN 4 区は、第12図に示すとおり、東西10m ×南北20m のグリットの一部である。

3)、は、急斜面であるが、遺物の出土が多く、後・晩期の土器群が出土する地区（A地区）で、さらに継続して発掘したい地区である。

なお、T・P 2 ・T・P 3 は、破壊が烈しく発掘せず放棄した。

〔Ⅲ〕　検出遺構　（第１～第10図）

（ａ）第１～第７次発掘調査で検出した遺構

◉この項では、第１次～第６次に至る発掘調査で検出した遺構について述べる。

• 第一次→小土壙（土偶、ミニチュア土器を埋蔵していた。）－Ａ地区

• 第二次→焼土遺構、土壙群（７基、うち１基は晩期、６基は後期)、他に不明２基－Ｂ地区

• 第三次→小土墨、１号住居址（西側半分）－Ｂ・Ｃ地区

• 第四次→１号住居址、１号井戸、２号住居址－Ｃ地区

• 第五次→溝状遺構、２号住居址（地床炉付)、土壙群（５基）－Ｃ地区、ＡＮ２地区

• 第六次→土壙群23基（ＡＮ２地区)、柱穴群252、2号井戸－ＡＮ２地区

以上、第一～第六次発掘調査において検出した。これらの個々については、報告書にゆずり、この項では検出した遺構についてだけ記しておく。

• 以上、述べた各遺構は、縄文時代後期、同晩期、土師器使用の時代に分けられるが、住居址、井戸等は、土師器使用の年代、すなわち、平安時代後葉のものと考えられる。

• また、土壙については、晩期のもの、後期のもの、土師器使用時代のものに分けられる。

• 柱穴についても同様であるが、Ⅱ層で確認できたもの、Ⅴ層上面で確認したものがあり、時差がある。（カマド）についても同様であるが、破壊された住居址も認められるので、三時期に分けられる可能性も残る。

• 堀については、形態そのものは、ほぼ「箱型」と断定できるが、年代を知る決め手は目下ない状況である。わずかに「カマド」を備えた住居址を切って堀り下げていることから、土師器を伴う住居址より新しいという事実だけである。

◉第７次→第７次発掘調査において検出した遺構は、次のとおりである。

ⓐ住居址

住居址は、（４・５・６・７・８号）の８棟を検出した。（１～３号は、Ｃ地区で第三～六次で検出)

• ４号住居址は縄文時代のもので、円形～楕円形プランのものである。出土地点、層位は、Ｎ11Ⅴ層上である。年代を知る手がかりはなかった。

• ５号住居址は、方形プランのもので、カマドを備え、出入口は、南東隅にあるもので、

カマドの北東、南西には、わずかに溝状遺構が認められた。出土地点・層位は、ＡＮ２地区－M_{11}，12，N_{11}，12にわたるもので、Ⅴ層を堀り込んでおり、４号住居址を切っている。１辺４ｍ75cmの正方形である。なお、この５号住居址のカマド右袖には、坏形土師器が密着して出土したので年代を知る好資料と考える。このものは、器形から「桜井第二型式」の土師器坏で、平安時代後期のものと考えられる。

• ６号住居址→このものは、R_{12}Ⅴ層上面で検出したもので、住居址の壁面は、北東部、北西部は検出されなかった。この住居址は、出入口に近く、２号地床炉をもつものである。

なお、東側・北側は、R_{12}グリットの限界で発掘しなかったので不明である。

この６号住居址は、方形プランのもので、土師器使用の時期、すなわち平安時代後葉のものであろう。

• ７号住居址→７号住居址は、M_{10}，N_{10}の両グリットにわたるもので、Ⅴ層上面で検出したものである。

この７号住居址は、壁面が注意しなければ見落す程浅いもので、柱穴の配列を追求して把握できたもので、地床炉または、炉址は無かった。このものは、長径3.7ｍ、短径3.2ｍの不整円形プランであるが、住居址内に柱穴が多くあるため、かなり破壊されているものである。

なお、この７号住居址は、第７次報告書の第７図に示すとおり、21号土壙によって切られている。

このことから、７号住居址は古く、21号土壙は新しいのであるが、年代決定は、きめ手がなく、多分縄文時代後期～晩期の住居址と考えられる。

• ８号住居址→８号住居址としたものは、M_{13}グリットの西南壁に切られている状態で検出したもので、Ⅴ層を約25cm程堀り込んでいるものである。未だ完掘していないので、時期等は不明である。

ⓑ土壙

土壙は、全部で23基検出した。それを出土グリットごとに示すと下記のようになる。

☆検出した土壙

• $R_{13・12}$→４・５・７号土壙＝３基

• $Q_{12・11}$→１・２・３・８号土壙＝４基

• $N_{12 \cdot 11 \cdot 10}$→ 10・16・17・18 / 19・20・25 ｝号土壙＝７基

• $M_{12 \cdot 11 \cdot 10}$→ ９・12・13・14 / 15・21・22・23 / 24 ｝号土壙＝９基

｝計23基（６・11欠）

以上23基である。他に柱穴状の小土壙が認められるが省略する。

検出した確認面は、第Ⅴ層 としたベースの上面である。

本遺跡は、Ⅴ層上面に縄文後期、晩期、および土師器使用時代の遺構があり、柱穴等も同レベルで検出されるため、年代的把握が困難である。

以下、土壙についての発掘所見を述べる。

◉１・２・３・４・５・７号土壙について

これらの土壙は、Q_{12}，$R_{13 \cdot 12}$のⅤ層上面で確認したものである。

このうち、３・４・５・７号は、ベルトまたは壁面に接するものもあり未完掘である。

なお、１号土壙は、半分は破壊されているものである。

これらの土壙からは、縄文時代後期・晩期の土器、土師器等の出土があり年代は不明である。但し、未完掘ではあるが、３・４・７号土壙のうち、７号は新しく、４号は、Ⅴ層下に黒土層があって、土師器を埋納した土壙である。このグリットのⅤ層としたローム層は貼り床の可能性がある。なお８号土壙（Q_{11} Ⅴ層）は、貯蔵穴かも知れない。

◉９・16号土壙について、この両土壙は、５号住居址に近接しており、特に９号土壙は、この住居址に属するもののようである。但し16号土壙は、壁面に接しているため形態は不明である。これらの土壙は、Ⅱ層とした黒土が覆土となっており、その覆土中から、土師器・縄文土器（後・晩期）片の出土がある。

なお、９号土壙の底面に密着して土師器坏形破片の出土がある。

◉10・12・13・14・15号土壙について

• 10号土壙（N_{11}，M_{11}）は、これも５号住居址に切られているものである。したがって、住居址より古いものと考えられる。この土壙の底面に密着して、第４群土器とした縄文後期「十腰内Ⅰ・Ⅱ式」の中間型式の土器片が４片出土した。この10号土壙は縄文後期のもののようである。

• 12号土壙（M_{11} Ⅴ）は、M_{11}グリットの北壁に接しているもので、７号住居址、21号土

壙と切り合いになるものらしい。ベルトのためその切り合いの状況は不明である。この土壙内の覆土からは、土師器片・縄文晩期大洞C 2 式土器が出土したが、年代決定のきめ手とすることはできない。時期不明としておく。

• 13・14・15号土壙（M11 V)、この3つの土壙は、相互に接しているもので、発掘所見では、切り合い関係は無いように観察される。

このうち、13号土壙は、M11の西壁に接しており、その形態は不明である。

この3つの土壙は、土壙内に柱穴状ピットをもつ点が、1号土壙と共通するところである。この柱穴状ピットが、13・14・15号土壙それぞれに付属するものか、別個のものかは発掘所見では、付属するものと捉えた。

その根拠は、どのピットも土壙を破壊していないからである。

出土した遺物は、須恵器甕形破片、土師器片であるが土壙を埋める黒土（Ⅱ層）中からである。このⅡ層とした黒土は、うごいているので、土壙の時期を判定する資料にはならない。

• 17・18・19号土壙（N10 V)、この17～19号とした土壙は、それぞれ、N11の東壁、北壁に接しているもので、そのプランは不明である。

このうち、18号土壙は、その南側に、5号カマド址に接しており、土壙の南側、すなわちカマドに接する部位は、焼土であった。一応土壙としたが、カマドを備えた住居址の可能性もある。出土した遺物は、土師器（坏・甕形破片）で、18号土壙は、土師器（第二型式）の年代を与えることができる。

• ・19号は、両土壙とも、壙内にピットをもつもので、土壙内からは出土遺物はない。

• 20・23・24・25・26号土壙（N10・M10 V）のうち、20号は、小土壙、25号土壙は、プランが変形したものであろう。

両者とも、15～18cmと浅いものである。また、両者とも遺物の埋納はなく、その周辺から土師器片（甕形）が出土した。

23・24・26号土壙のうち、24号土壙は、26号土壙によって一部切られている。したがって、26号土壙は新しく、24号土壙は古い。

この26号土壙は、深さが75cmと深く柱穴とは考え難い。23・24号とも柱穴状ピットをもつ点は、他の土壙とも共通する。

これらの20・23～26号土壙の覆土内から、須恵器片・土師器片・縄文土器片（後期・晩

期）の出土はあったが、土壙の年代を決定する資料にはならない。

• 22・21号土壙（M10・N10 V）この両土壙は、7号住居址を切っており、21号土壙は、12号土壙とも切り合うことは既に述べた。

したがって、7号住居址は古く、21・22号は新しいものである。残念ながら、両者とも年代を決定する遺物は無い。22号土壙内のⅡ層とした黒土、21号土壙内のⅡ層には、後期「十腰内Ⅰ式」晩期「大洞C 2 式」および土師器片（甕形）破片が出土したが年代決定の資料とはならない。

以上、1号～26号の23基の土壙について述べたが、時期を決定する遺物が少ないのが残念である。

ⓒ 2号井戸

この2号井戸は、P13・12，Q13にわたって出土したものである。確認面は、V層上面であった。（1号井戸は、C地区X 1 グリットV層上面で、第四次～第五次調査で完掘した。）

この2号井戸は、不整な四角形を二段に造り、その後垂直に掘り下げたものである。

第7次の（第7図）は、井戸の周囲にあった盛土を除去した後の実測図である。

外側の1辺が約2.25m ～1.50m 、二段目の不整四角形は、長辺約1.5m 、短辺1.1m で、円形の垂直面上端は、径1.2m ～1.5m のものである。また、深さは、危険防止のため1.2mで掘り下げを中止し、ボーリング棒で底面の深さを調べたのであるが、約50cm下で礫群があることがわかったが、それ以深は、約30cm程度で井戸底に達するもののようである。

すなわち、確認面であるV層上面から井戸底まで、約2 m の深さのものである。

井戸内の覆土中からは、獣骨・焼けた小骨片、土師器（甕形片）、須恵器片（甕形）、縄文土器（大洞C 2 式）等の出土があったが、井戸底の遺物は不明である。

以上、2号井戸の使用期を決定する手がかりは無いが、館址であること、空堀がめぐっている点を考慮すると、館址との関連で考えることが可能であろう。

ⓓ地床炉

地床炉は、1～5号の5基を検出した。この5基の出土グリット、出土層を示すと、つぎのとおりである。

1号地床炉 ― R13 V

2号地床炉 ― R12 V（6号住居址に伴う）

3号地床炉 — M13 V

4号地床炉 — N13 V

5号地床炉 — N10 V

以上、すべて第V層上面で検出したものであるが、2号地床炉を除き、他は、何に付属する遺構かは不明である。

しかし、3号地床炉は、8号住居址、5号地床炉は、7号住居址の屋外炉の可能性も否定できない。特に7号住居址は、炉址が見当らないものである。また、8号住居址としたものは、未完掘なので、3号地床炉との関係については、不明である。

ⓔカマド址

1号カマド址 — Q11 V

2号カマド址 — N12 V　（5号住居址）

3号カマド址 — N10 V　（18号土壙）

4号カマド址 —（AN1 b－A2 Ⅲ）

カマド址は、以上の4基を検出した。

このうち、1号としたものは、カマド址のみ残っていたもので、南方を向くものである。

このカマド址は焚口部が北側にあって、焼土が焚口部周辺に広がっていたが、住居址の壁面、床面とも無く起伏があって破壊されていた。

• 2号カマド址は、5号住居址のカマド址でやはり南向きである。

既述したように、この2号カマド址の右側に、底面に「糸切り痕」のある坏形土師器が密着しており、5号住居址の時期判定に役立つものである。

• 3号カマド址は、18号土壙に付属するもので、既に述べたとおり、18号土壙としたものは、住居址の可能性がある。

この3号カマド址も形状は崩れているが、南向きのものである。

• 4号カマド址は、未だ完掘せず、カマド址と見られる。このものも南向きと考えられる。

ⓕ溝状遺構

この溝状遺構は、全部で7本検出したものである。それを例記すると、つぎのとおりである。

1号溝状遺構 — M13 V

2号　〃　— M12・13 V

3号溝状遺構 — M_{13} V

4号　〃　— $Q_{12 \cdot 13}$ V

5号　〃　— Q_{11} V

6号　〃　— $P_{13 \cdot 12}$ V

7号　〃　— N_{13} V

以上の7本であるが、このうち、5号としたものは、曲っているもので、また、3号としたものも曲線をなすものである。

これらのものは、幅20～30cm、深さ10～30cmの浅いものであるが、6号溝状遺構は、幅約30cm、深さ30～40cmと深く、2号井戸に、4号溝状遺構とともに接続している。

また、5号としたものは、その西端に柱穴状ピットがある。

- 1号としたものは、浅く3号地床炉と、焼土堆に接する。
- 2号溝状遺構は、5号住居址の付属施設の可能性がある。
- 3号としたものは、12号土壙につながるもので、7号としたものは、深浅があって短い。

以上、1～7号溝状遺構は、その性格・機能等は、残念ながら不明であるが、すべてV層を掘り込んでいるもので時期的には同一時期のものと考えられる。

ⓖ柱穴群

柱穴状ピットは、約280個検出した。これらの柱穴群を、遺構に付属するもの、縄文期（後期・晩期のもの）、土師器・須恵器時代のもの等々、識別する力が不足であることが残念である。今後さらに学習をつづけ、力をつけていきたいと願うところである。

これらの柱穴群、その他の遺構を含めて、すべてV層上面で検出される。

すなわち、縄文時代後期、同晩期、土師器使用期の各期の遺構が、V層上面に所在したことだけは明らかである。

そして最も顕著なものは、土師器時代の遺構であると言うことができる。それは、遺跡全体から考えて間違いないところと考えている。（以上、第1～第7次発掘調査報告書）

（b）第8次発掘調査で検出した遺構（第7・8・9・10図，写3～7）

第1～7次発掘調査で検出した遺構については、aにおいて既述したとおりであるが、つぎに、第8次発掘調査で検出した遺構を加え一覧表にまとめてみると次のようになる。

〔第１～第８次発掘調査検出遺構〕（表Ⅹ）

遺構名	1975 1	1984 2	1985 3	1986 4	1987 5	1988 6	1989 7	1990 第８次	合計
① 住居址			1	1	1.1 2.	3.	5.	7.	17
② 土壙	1.	9			5.	23		3.	41
③ 小土墨			1.						1
④ 井戸				1.		1			2
⑤ 溝					3.	1	7		11
⑥ カマド址			1	1 1.	1.		4.		6
⑦ 地床炉	2.	2.	4.				5.		13
⑧ 堀	1							1.	1
⑨柱穴	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（☆）　0＝多数有りの意である。

第８次発掘調査を含めて、検出した遺構は表Ⅹのようになるが、
ここでは、第８次発掘調査で検出した遺構に限定して述べる。

1）住居址（第７・８図，写３～７）

第８次発掘調査では、検出順に、１号・２号・３号・４号・５号・６号・７号とした住居址を検出した。

これらの住居址は、いずれもベースであるⅤ層を掘りこんだ状況で検出されたものであるが、このうち、6号・7号は、完掘せず明年度に残したもので、6号は、ＡＳＣ区，グリット⑨⑬で検出、7号は、Ｄ8区（掘）で、堀の中から検出されたものである。この6・7号については、省略する。

☆（1号住居址）　（第7図・写3）

この住居址は、ＡＮ2区，M13・M14グリットのⅤ層上面で検出した。（Ⅲで述べた8号住居址はその北半分である。）

なお、M13は、第7次に発掘してあるので第8次でM14を発掘して検出したものである。

この住居址は、第7図に示すとおり、プランが円形で、西側に出入口を備えた住居址である。

この住居址の年代を決定する資料の出土が無いのであるが、覆土中から出土した土器片は、土師器片・縄文土器片であるが、縄文土器は「大洞Ｃ1式」鉢形土器、Ｔ・Ｐ1からは、「多頭石斧」の出土等があった。

すなわち、断定は控えるが、プランと出土土器・石器から、縄文時代晩期のものと思われる。

☆（2号・3号住居址）　（第8図・写4～6）

この2号・3号とした住居址は、上下に重復して検出されたものである。

すなわち、ＡＣ～Ｆ区，②③⑥⑦グリットのⅤ層上面で検出した。

プランは、長方形のもので、カマド址は、2号・3号住居址とも、南東壁下に上・下に重複して出土した。

最初に3号住居址を検出し、これを精査する過程で検討した結果、2・3号としたものである。

すなわち、3号住居址が古く、2号住居址が新しいものと判断した。

2・3号とも、北側の壁面は共通であり、床面は、約10～15cmの厚さで上下に重複するもので、判断は、きわめて困難であったが、「カマド」も上・下に2基検出されたので判断が可能であった。

• 2号住居址は、焼失家屋とみられるもので床面全体に木灰が観察され、炭化材（板材）

が倒れた姿で認められた。

この２号住居址の床面上、および覆土からは、須恵器が多量に出土した。

• 特に、２号住居址の床面、北西部からは、須恵器がまとまって出土したが、「甕」「長頸（細口）壺に器形によって分類できた。

このことから、「３号住居址」は、須恵器を生活用品としていたものであろう。

「甕」や長頸（細口）壺は、いずれも家屋の焼失による火熱をうけたものらしく、二次的に火を浴びた痕跡が認められる。

出土した須恵器は、大形のものが多く、坏形が１片もないので、床面上出土の遺物を検討すると、「土師器坏形」が、小片で出土している。

すなわち、土師器坏形を加え、生活用具としていたように思われる。

• ３号住居址は、床面が前者より下層にあり、出土遺物は、須恵器片と土師器片であったが、「カマド」址が、やはり下層となっており、年代差を知ることができたが、「２・３号住居址」は、年代的には、あまり違いがないと考えられる。すなわち、10～11世紀の幅で捉えることが可能であろう。

☆（４号住居址）　（第８図，写５）

この住居址は、ＡＣ～Ｆ区、③④⑧グリットのⅤ層上面で検出した。

これらのグリットは、（２・３号住居址）のあるグリットより約30～20cm高く、南に向って、ゆるい斜面をなす地形である。

このＡＣ～Ｆ区は、Ⅲ・Ⅳ層を欠き、Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ層となる層序である。

４号住居址は、やはり南西壁隅にカマドを備えた住居址で、そのプランは、長方形である。床面は、２・３号住居址より約30～40cm高くなっているが既述したように地形が傾斜を持っているためと思われる。

第８図に示すとおり、２・３号住居址の東北に接して４号住居址が所在するが、両者の切り合い関係はない。

そのため、両者の新・旧関係については不明であるが、２・３号住居址はⅤ層を深く掘り込んでおり、４号住居址は、前者に比して浅い。

深さによって考えると、２・３号住居址が古いように考えられるが、出土した土師器・須恵器等の遺物は、同時期であり、地形を考慮に入れると、ほぼ同時期の住居址と考えて

もよいのであろう。すなわち、土師器は、「東北、北部の土師器型式」第二型式、須恵器は、「前田野目」「持子沢」窯址出土のものと類似する。したがって、平安時代後葉の住居址と考えてよいのではないかと思われる。

☆（5号住居址）　（第8図，写6）

第8図に示すとおり、5号住居址としたものは、AC～F区、①⑤グリットV層上面で検出したものである。

この①・⑤グリットも、①が高く、⑤が低い地形である。

5号住居址は、グリット⑤を中心に検出したものであるが、プランは、円形のものらしいが、住居址の東側は、2・3号住居址の西壁によって切られており、南側は、⑤グリットの南側にのびるものらしい。

そのため、完掘していないものである。

第8図に示すとおり、主柱穴と思われる柱穴も認められるが、炉址も未検出であって、明年度に期待したいと思う。

床面上に時期を決定する遺物の出土はないが、覆土中からは、土師器・須恵器片、および縄文時代後期「十腰内Ⅰ式」土器が出土している。

• プランが円形であること。「十腰内Ⅰ式」土器が覆土中から出土していること等から、縄文時代後期の住居址ではないかと疑っているが結論は、明年度にしたいと思う。

2）カマド址　（第8・9図）

第8次発掘調査において検出した「カマド址」は、2号住居址に伴うもの、3号住居址に伴うもの、および、4号住居址に伴うものの3基である。

既述したとおり、3号住居址のカマドと、2号住居址のカマドは、上・下に重複しており、2・3号住居址の決定要素になったことは、既に述べた。4号住居址のカマドは、かなり破壊されており、煙道部の一部が残っている程度であった。

• この、三つのカマドは、いずれも南向きになっており、方向が一定している。

また、カマドの位置は、3号住居址では、南・東壁隅、2号住居址でも3号住居址のカマドと同様である。4号住居址では、南・西壁隅に位置する。このように、AC～F区で検出した「カマド」の位置は、住居址壁面の角に位置するという共通性が認められる。

・（表Ⅹ）に示したように、当遺跡で検出した住居址は、全部で17棟検出しているが、カマドを備えたものは、6棟であったが、壁面の角にカマドを備えたものは出土していないのである。

したがって、2・3・4号住居址のカマド址の位置は特異である。このことについては今後さらに追求していきたいと思う。

3）土壙　（第8図）

土壙は、全部で3基検出した。このうち、1号土壙は、D8（堀）のⅤ層上、2号土壙は、AC～F区、②グリットⅤ層上、3号土壙は、AC～F区⑤グリットⅤ層上で検出したものである。

・1号土壙は、D地区D8グリットにおいて検出したもので、堀は、この土壙を破壊して造られていた。したがって、そのプランや時期等は不明である。

・3号土壙としたものは、AC～F区、②グリットの北壁に接して、約半分程検出したもので、平面プランは、円形と思われる。この土壙内には、炭化材が埋まっていた。出土した遺物は、土師器片。縄文土器片が覆土（Ⅱ層）内にあったが年代等の決定資料には不適である。

・2号土壙は、⑤グリットの5号住居址の西側壁面下で検出したが、5号住居址に付属するもののようである。

しかし、5号住居址そのものが未完掘であるため結論は、明年度にしたいと思う。

第8次発掘調査で検出した土壙は、わずか3基で、いずれも性格、年代等は不明であるが、縄文時代の可能性があることを付記しておくことにする。

（表Ⅹ）に示したとおり、土壙は全部で41基を検出したが、年代的には、縄文時代後期のもの、同晩期のもの、および、土師器・須恵器の使用時代のもの等に分けられるが、縄文時代後期のものが多く、つぎに晩期のものが多いが、土師器・須恵器使用時代のものが少数である。

4）堀について　（第4・6・10図）

第8次発掘調査に至るまで。堀は、D地区として、調査対象としてきた。

第7次までに、D1～D7トレンチとして、堀の東・北・西に、1m×12mトレンチを

設定し、第4図上段に示すように調査を進めてきた。

その結果は、結論的に「箱型」堀であることがわかってきた。（詳細は、2～7次報告書）第8次では、コの字型の堀の西南端に、南北5m×東西10mのグリットを設定、さらに、第4図に示すAN4区として東西10m×南北20mを設定、また、AN4区の20グリットの拡張区3m×5mを設けて、堀を検討することにした。

第6図は、そのセクション図であり、第10図は、堀の平面図であるが、やはり堀は「箱型」堀であることがわかる。

• しかし、堀の構築年代を決定するきめ手がなく、第8次調査では、縄文時代の遺構を切っていることが理解された程度である。

• 第3次発掘調査では、1号井戸を埋めた土師器を主体とする住居址を、堀が切って造られている事実を知ったが、それ以上は未だ不明である。

いまのところ、土師器を伴う住居址より新しいという事実だけで、堀の年代を知る手がかりに乏しいのが現状である。

観音林遺跡（第８次）出土、土器編年表（縄文時代編年表を含む）　（表１）

推定年代	区　分	土器型式	観音林第一次 S49．試掘	観音林第二次 S58．予備	観音林第三次 S59．予備	観音林第四次 第１期 S60．本調査
12000 〜	縄文時代 草創期 早　期	/	/	/	/	/
6000 〜 5000	前　期	円筒下層式 a式 b〃 c〃 d_1〃 d_2〃	/	/	円筒下層式 a　式 / d_2式	円筒下層式 a　式 d_1式
〜 4000	中　期	円筒上層式 a式 b〃 c〃 d_1〃 d_2〃 e〃	/	円筒上層式 b　式 /	円筒上層式 b　式 /	円筒上層式 b　式 /
〜 3000	後　期	十腰内式 Ⅰ式 (+)〃 Ⅱ〃 Ⅲ〃 Ⅳ〃 Ⅴ〃 Ⅵ〃	十腰内Ⅰ式 〃　〃Ⅱ式 /	十腰内Ⅰ式 〃　〃Ⅱ式 / 〃　〃Ⅴ式	十腰内Ⅰ式 〃　〃Ⅱ式 /	十腰内Ⅰ式 〃　〃Ⅱ式 /
〜 2000	晩　期	大洞式（亀ヶ岡式） B　式 B・C〃 C_1〃 C_2〃 $(C_2$-A) A〃 A´〃	大洞式 C_1式 C_2式 $(C_2$-A)式 A　式	大洞式 B・C式 C_1式 C_2式 $(C_2$-A)式 A　式	大洞式 B・C式 C_1式 C_2式 $(C_2$-A)式 A　式	大洞式 B・C式 C_1式 C_2式 $(C_2$-A)式 A　式
B・C 300 〜 AD 300	弥生時代	/	/	/	/	/
〜 800	歴史時代	○土師器 •第一型式 •第二型式 ○須恵器	○土師器 •第二型式 •須恵器	○土師器 •第二型式 ○須恵器 ○珠洲器	○土師器 •第二型式 ○須恵器	○土師器 •第二型式 ○須恵器 ○鉄　器
備　考	☆……前期・中期の(+)は、型式名不明、後期→第五・六次(+)は、本文参照のこと。また、晩期(C_2-A)は、C_2式、A式の中間的施文要素をもつ土器群の仮称型式である。					

観音林第五次 第1期 S61．本調査	観音林第六次 第1期 S62．本調査	観音林第七次 第1期 S63．本調査	観音林第八次 第2期 H元本調査	群　別	観音林 第九次	観音林 第十次
/	/	/	/	/		
円筒下層式 a　式 d　式	円筒下層式 (+)	円筒下層式 a　式 (+)	円筒下層式 a　式 (+) (型式不明)	第一群		
(+) /	円筒上層式 /	円筒上層式 (+)	円筒上層式 (+) (型式不明)	第二群		
十腰内Ⅰ式 (+) 〃　〃Ⅱ式 /	十腰内Ⅰ式 (+) 〃　〃Ⅱ式 /	十腰内Ⅰ式 (+) 〃　〃Ⅱ式 (+) /	十腰内Ⅰ式 中間型式 十腰内Ⅱ式 (十腰内Ⅴ式)	第三群 第四群 第五群 (Ⅹ群)		
大洞式 B・C式 C_1式 C_2式 (C_2-A)式 A　式	大洞式 B・C式 C_1式 C_2式 (C_2-A)式 A　式	大洞式 C_1式 C_2式 (C_2-A)式 A　式	大洞式 B・C式 C_1式 C_2式 (C_2-A)式 A　式	第六群 第七群 第八群 第九群 第十群		
/	/	/	/	/		
○土師器 ・第二型式 ○須恵器 ○陶　器	○土師器 ・第二型式 ○須恵器 ○鉄　器	○土師器 ○須恵器	○土師器 ・第二型式 ○須恵器	第十一群 第十二群		

観音林遺跡（第８次）　各地区出土、土器一覧表（表２）

出土層／グリット	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	出土層／グリット	Ⅰ
A 地区 （H１）		•（高子小僧？）			T・P１	•晩期（C１壺） 〃（A鉢） •土師器（坏・甕） •須恵器（壺）
A 地区 （H２）		•土偶脚部（十腰内Ⅰ式）			T・P２	•前期（型式不明） •十腰内Ⅰ式（壺） •晩期（C１鉢） 〃 （条痕文土器）
A 地区 （H３）				•土偶脚部（十腰内Ⅰ式） •異形土器（十腰内Ⅰ式） •ミニチュア （十腰内Ⅰ式） •きのこ型土製品 （十腰内Ⅰ式）	T・P４	•前期（型式不明） •晩期（C２鉢） •土師器（坏）
（AN２区） M13 M14 （１号住居址）	•十腰内Ⅰ式 •晩期（条痕文土器） •土師器（坏）	•晩期（C２甕） •土師器（甕） •晩期（条痕文土器）			AN２区 R15	•前期（型式不明） •十腰内Ⅰ・Ⅱ式 （甕・鉢） •晩期（A式鉢） •土師器（坏） •円盤状石器
AC～F区 （２号・３号住居址）			•土師器（坏） 〃（甕）	•土師器（坏） •晩期（C１鉢） 〃（条痕文土器） ☆２号土壙内 •土師器（坏・甕） •晩期・前期	AN２区 L６	•前期（型式不明） •十腰内Ⅰ式（壺） •晩期（C１・C２・A式→鉢・壺・皿） •土器器（甕）
AC～F区 （４号住居址）	•須恵器（壺）				AN２区 L13	•前期（型式不明） •十腰内Ⅰ式（壺） •晩期（C１・C２式）鉢
AC～F区 （５号住居址）	•土師器（坏） ☆pit３ •土師器（坏） •晩期（C２鉢）	•土師器（坏・甕） •晩期（A式鉢）			AC～F区 ⑦	•土師器（甕） •晩期（C１鉢）

☆この「表２」は、A地区H１～H３以外の各区の、覆土中より出土した土器等を一覧表としてまとめたものである。特に柱穴状ｐｉｔ内の覆土より出土したものを一括したものである。

（表２）　1990・03・31・

出土層／グリット	V	出土層／グリット	I	出土層／グリット	II	出土層／グリット	I	出土層／グリット	I
AN２区 N14	・土師器(坏) ・晩期(C２甕)	AC～F区 ②	・土師器(坏) ・晩期(A式甕)	AC～F区 ⑧	・十腰内Ⅰ式(鉢) ・土師器(坏) ・晩期（C１・C２A式）→（鉢・壺・甕）	pit 5	・晩期(C１壺) ・円盤状石器	pit 50	・十腰内Ⅰ式(鉢・甕)
AN２区 M14	・十腰内Ⅰ式(甕) ・晩期(C２壺)	AC～F区 ① ⑤	・十腰内Ⅰ式(鉢) ・晩期（C１・C２・A式）→鉢 ・土師器(坏)	AN４区 ⑳	・十腰内Ⅰ式(甕) ・晩期(C１鉢) ・須恵器(甕)	pit 6	・晩期(C２鉢)		
		ASC区 ⑬	・十腰内Ⅰ式(甕) ・晩期(C２鉢) ・中期(型式不明) ・須恵器(壺)	AN４区 D８	・前期(型式不明) ・中期(　〃　) ・十腰内Ⅰ式(甕) ・土師器(坏・甕)	pit 16	・十腰内Ⅰ式(鉢)		
		AC～F区 ⑥	・珠洲(甕)			pit 18	・十腰内Ⅰ式(壺)		
		AC～F区 ④	・十腰内Ⅰ式(甕)			pit 20	・十腰内Ⅰ式(鉢)		
		ASC区 ⑨	・土師器(甕) ・晩期（C１・A―→鉢・皿） ・十腰内Ⅰ式(鉢)			pit 30	・晩期(C２？)		
		AC～F区 ①	・晩期（C１・C２）→（鉢・台付鉢）			pit 31	・晩期(C２) (鉢)		

〔Ⅳ〕　出土遺物（A・P・L1～59，B・P・L1～78，S・P・L1～12，b・P・L1）

出土した遺物は、大別して、ⓐ土器（土製品）ⓑ石器（石製品）および、ⓒ骨類・（その他）に分類されるが、以下、ⓐ～ⓒの順に述べることにする。

ⓐ出土した土器（A・P・L1～59，B・P・L1～78）

第8次発掘調査で出土した土器類は、総量で約60箱（60cm×28cm×15cm）の多量である。

このうち、縄文式土器が約50箱、土師器約3箱、須恵器約3箱、石器類約3箱、自然石～炭化材等1箱の計約60箱である。

• このうち、縄文時代後期の土器が約40%、同晩期の土器が45%を占めている。また、土師器・須恵器が10%程度で、検出した遺構、すなわち、住居址等から考えると、土師器の出土が少ない。

• 発掘区では、縄文式土器が集中して多量に出土したのは、A地区H1，H2，H3の各グリットで、縄文時代後期～晩期の土器が多く、他の、AC～F区，ASC区，AN4区，AN2区では、土器・石器等の出土量は少なく、散在する程度であった。以下、出土した土器、石器等について述べる。

〔土器〕 ―（表1，A・P・L1～59，B・P・L1～78）

出土した土器を群別に分類すると、つぎのように分けられる。

☆出土，土器の群別（型式別）→（表1）

第1群土器　円筒下層式土器……前期

第2群土器　円筒上層式土器……中期

第3群土器　十腰内Ⅰ式土器……後期

第4群土器　十腰内Ⅰ・Ⅱ式の中間型式の土器……後期

第5群土器　十腰内Ⅱ式土器……後期

第6群土器　大洞B・C式土器……晩期

第７群土器　　大洞Ｃ１式土器……晩期

第８群土器　　大洞Ｃ２式土器……　〃

第９群土器　　Ｃ２～Ａ式土器（仮称）……晩期

第10群土器　　大洞Ａ式土器……晩期

第11群土器　　土師器（第２型式）

第12群土器　　須恵器

以上の12群に分類することができる。

☆これらの群別（型式別）土器のうち、第１・２群とした円筒下層式、円筒上層式土器は、各グリットに散在する程度で、当遺跡の性格を決定できる資料ではない。

• また、（表１）に示すⅩ群とした「十腰内Ⅴ式」と思われる土器は、わずか２片の出土である。さらに、晩期の第６群とした「大洞Ｂ・Ｃ式」土器は、その出土量が少ない。

その他、第９群とした「大洞Ｃ２－Ａ式」→（仮称）仮称とした土器群も、破片の中に散見する程度で第７次に比して本年度の発掘では出土量はきわめて少ない。

☆第４群土器について

第４群とした「十腰内Ⅰ・Ⅱ式」の中間型式とした土器群は、第８次の発掘においても多量に出土した。この土器群は、ある程度資料が多くなったので考察の項で再度述べることにしたいと思う。

なお、個々の土器については、Ａ・Ｐ・Ｌ１～59に述べてあるので省略したい。

〔土製品〕→このものは、全部で14個の出土である。

①土偶→土偶は、全部で７個体出土した。また、土偶脚部２、異形土器２、スタンプ状土器２、きのこ型土器１が出土したが、異形土器、スタンプ状土器、等については、機能、用途等は不明である。

☆土偶について、（口絵１、２、写２）

上記のとおり、土偶は、７個体と脚部が２個出土したが、そのうち、５個体は、Ａ地区

H 2 Ⅲから５個体まとまってミニチュア壺形土器とともに出土した。これらの５個体の土偶は、「大洞C 2 式」期のものであろう。

他の２個体の土偶は、A地区H 1 Ⅲ層出土のものであるが、１個は「大洞C 2 式」１個も「大洞 C 2 式」と考えられるが断定は控えたい。

（なお、出土区、層位、計測値、型式等は、写 真 で参照されたい。）。

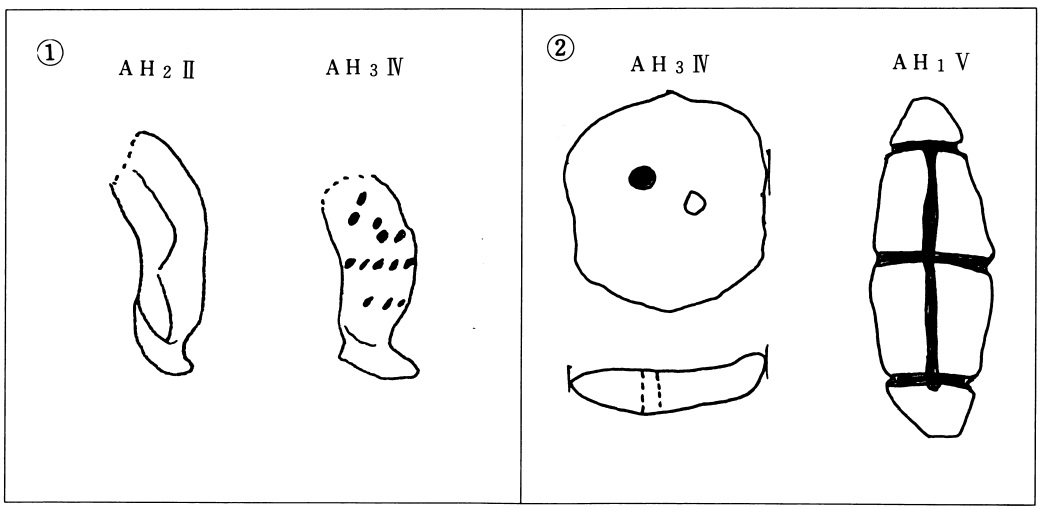
また、土偶脚部２個は、A地区H 3 Ⅳおよび、A地区H 2 Ⅱで出土した。前者には、円形刺突文があり、縄文後期「十腰内Ⅰ式」期、後者の脚部は無文であるが、同時期のものであろう。

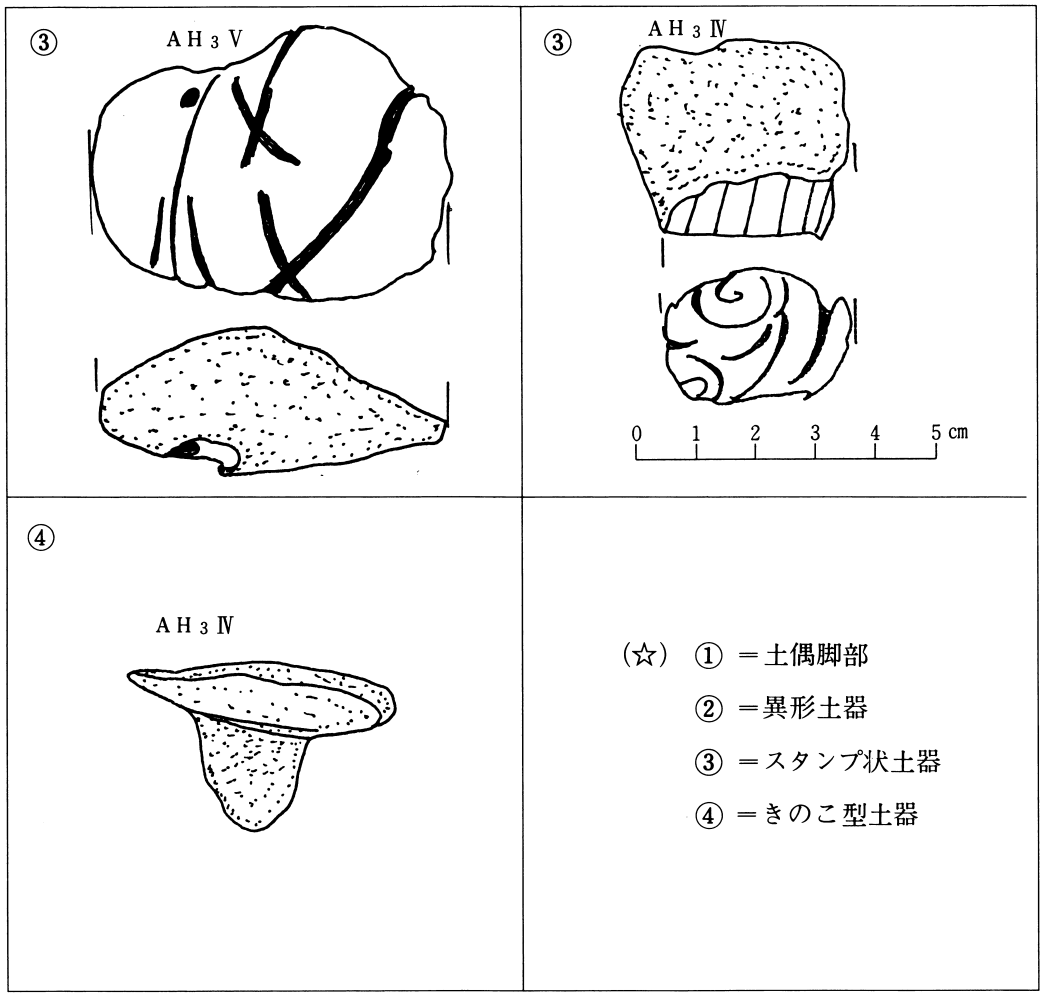
②異形土器→２のうち、１個はA地区H 3 Ⅳ出土、１個は、A地区H 1 Ⅴ出土である。

前者は、ミニチュア皿形土器の形態であるが穿孔が底部にあるもので、手ずくねによってつくられている。後者は、A地区H 1 Ⅴ出土で、その形態は、土錘状である が、上･中･下に沈線文がめぐり、さらに沈線文が縦位に施文されるもので、「中通し孔」はない。この異形土器は、両者とも「十腰内Ⅰ式」期のものと思われる。

③スタンプ状土器→２個の出土であるが、１個は、A地区H 3 Ⅴ、１個は、A地区H 3 Ⅳ出土である。前者は、陣笠状をしており、沈線文がX状に施文されている。もう１個は、欠損品で、C字文が一部に認められるものである。前者は「後期」後者は「晩期」のものらしいが断定できない。

④きのこ型土器→このものはA地区H 3 Ⅳより１個の出土である。無文のもので風化が烈しくボロボロした胎土である。




③
AH3Ⅴ
③
AH3Ⅳ
0 1 2 3 4 5 cm
④
AH3Ⅳ
(☆) ① ＝土偶脚部
② ＝異形土器
③ ＝スタンプ状土器
④ ＝きのこ型土器

観音林遺跡出土、石器・石製品等一覧表（第８次調査）　（表３）

種別	類別	P.L,No	整理No 通しNo	整理No 器種	(長径×最大巾×器厚)cm	重量(g)	石質	出土区・層位
①石鏃		1	1	1	2.4×1.7×0.3	1	珪質頁岩	H_3 W129 N81.5 Ⅱ上
			2	2	2.5×1.4×0.3	1	〃	H_1 Ⅰ
			3	3	2.25×1.15×0.4	0.5	〃 pitch	H_2 E170 N114 Ⅳ
			4	4	2.8×1.3×0.5	2	〃	H_1 W100 N52 Ⅴ
			5	5	2.2×1.6×0.35	1	〃 pitch	H_1 E72 S66 Ⅱ
			6	6	2.3×1.3×0.3	1	〃 pitch	H_1 Ⅴ
			7	7	3×1.3×0.6	2	〃 pitch	H_3 N82 E172 Ⅰ中
			8	8	2.5×1.25×0.35	1	〃	H_1 N27 W183 Ⅳ
			9	9	2.9×1.3×0.4	1	〃	H_1 N27 W183 Ⅳ
			10	10	3.3×1.25×0.6	2	〃 pitch	H_1 N27 W183 Ⅳ
			11	11	3.5×1.4×0.4	2	〃	/
			12	12	4.5×1.6×0.6	2	〃 pitch	H_1 W129 S18 Ⅴ
			13	13	3.4×1.35×0.35	1	〃 pitch	H_1 W136 N22 Ⅴ
			14	14	3.1×1.25×0.4	0.5	〃 pitch	H_1 H_2 の Ⅳ
			15	15	4.1×1.8×0.75	3	〃 pitch	H_2 W200 N33 Ⅱ中
			16	16	4.25×1.3×0.5	3	〃	H_3 N109.5 E113 Ⅰ下
			17	17	3.8×1.8×0.65	3	〃	H_2 E86 W96 Ⅲ上
			18	18	3.45×1.2×0.6	2	〃	/
			19	19	2.6×1.25×0.5	1	〃 pitch	/
			20	20	3.2×1.6×0.4	2	〃	掘８底面
			21	21	3.95×1.9×1.0	6	〃	H_3 E114 N12 Ⅰ
			22	22	3.1×1.1×0.5	1	〃	H_3 E98 S37 Ⅱ
			23	23	2.9×1.35×0.6	2	玉髄	H_3 E100 N143
			24	24	3.35×1.1×0.9	3	珪質頁岩	H_2 E87 N40 Ⅰ
			25	25	3.1×0.8×1.0	0.5	〃	H_1 E24 N26 Ⅱ下
			26	26	4.75×2.95×0.7	5	〃	H_1 S169 壁 Ⅳ
			27	27	5.05×2.1×0.75	6	〃 pitch	H_3 W90.5 S120 Ⅱ
			28	28	3.0×1.1×0.6	1	〃 pitch	H_2 Ⅲ
			29	29	3.8×1.8×0 8	4	〃	H_2 Ⅲ

			30	30	3.5×1.5×1.15	4	珪質頁岩		/
			31	31	3.85×1.0×0.7	25	〃		/
			32	32	4.1×1.8×0.5	2	〃		H_1 Ⅰ下
			33	33	3.3×1.45×0.5	2	〃	pitch	H_2G Ⅱ上
② 削器 (有柄)	(横形)	1	34	1	4.75×5.07×0.91	17	〃		H_1 E120 S147.5 Ⅳ
			35	2	5.03×6.18×0.99	26	〃		H_1 W39 S74 間層
			36	3	4.46×5.32×1.10	18	〃		
			37	4	6.12×6.98×1.0	37	〃		H_1H_2 W64 Ⅴ
			38	5	6.14×6.95×1.37	44	〃	pitch	H_1H_2 W136 さかいSD Ⅱ
			39	6	5.70×4.91×1.24	20	〃	pitch	H_1 E84 N31 Ⅳ
			40	7	3.85×2.62×0.57	6	〃		H_1 W35 S31 Ⅴ
			41	8	3.81×4.59×1.08	16	〃		H_2 W167 N186 Ⅱ
			42	9	4.58×6.06×1.06	16	〃	pitch	H_3 W65 S131 Ⅱ
			43	10	3.62×2.75×0.91	6	〃	使用後	H_2 W202 N151 Ⅳ
			44	11	2.88×3.67×0.72	6	〃		H_3 E103.5 S181.5 Ⅱ上
			45	12	4.33×4.38×1.02	14	〃	pitch	H_1 Ⅴ
			46	13	3.28×5.23×1.01	18	〃	再生	H_2 E20 N130 Ⅴ
			47	14	6.72×7.79×1.88	70	〃	pitch	H_1 E103 N10 Ⅱ下
	縦形		48	15	8.62×4.53×1.0	38	〃		H_2 S205 E126 Ⅲ
			49	16	6.32×2.98×0.55	11.5	〃		ASC 9 N91 E58.5 Ⅰ
			50	17	4.75×2.02×0.63	6	〃		H_2 E170 N114 Ⅳ
			51	18	6.90×4.12×0.88	30	〃		H_2 E150 N92 Ⅳ
			52	19	5.22×4.46×1.76	40	〃	end ?	H_3 Ⅱ
			53	20	5.02×4.90×1.22	24	〃	下半数	/
		2	54	21	9.60×4.47×1.78	48	〃		H_2 Ⅱ
			55	22	3.42×6.2×0.89	14	〃	pitch	H_1 Ⅳ
			56	23	3.89×5.72×1.42	28	〃	pitch 右半欠	H_3 S113 W102.5 Ⅰ
(Flake)	小形		57	24	2.55×1.60×0.72	3	〃		H_1 Ⅳ
			58	25	2.86×1.83×0.55	3	〃		③ Ⅰ
			59	26	2.72×2.58×0.63	42	〃		/
	不定形		60	27	6.52×3.02×1.0	23.8	〃	pitch	⑨ Ⅰ
			61	29	5.97×7.7 ×1.57	76	〃	end ?	⑨ Ⅰ
	縦形		62	29	5.14×2.75×0.68	8	〃	pitch 下半欠	/

	不定形		63	30	4.96×7.08×1.40	41	珪質頁岩	/
			64	31	7.99×4.28×1.58	60	〃	/
			65	32	5.74×3.50×0.81	17.2	〃	/
			66	33	5.59×6.92×1.30	50	〃	H_2 Ⅴ
			67	34	4.50×2.36×0.66	8	〃	H_1 Ⅲ
			68	35	9.25×5.46×1.31	47.5	〃 Chip	/
有　柄	定形		69	36	7.70×4.64×1.31	50	〃	/
			70	37	6.86×4.46×1.02	24.2	〃 pitch	/
(FLake)	不定形		71	38	6.82×4.57×1.61	43	〃	/
			72	39	2.62×5.76×1.0	15	〃	/
			73	40	7.52×6.14×0.88	38	〃	/
③ 掻 器		2	74	1	5.85×2.7×1.35	20	〃	H_2 E108 S197 Ⅱ
			75	2	4.15×2.50×1.10	9	〃	H_2 N183 E176 Ⅲ
			76	3	5.65×2.60×1.45	22.5	〃	H_2 E22 N36 Ⅳ
			77	4	7.70×3.95×1.75	59	〃	H_2 E90 S158 Ⅳ
			78	5	5.85×4.00×1.50	37	〃	H_3 Ⅳ
			79	6	3.05×2.90×0.9	6	〃	H_3 Ⅴ
			80	7	4.15×1.80×0.8	7	〃	H_1 Ⅴ
			81	8	6.30×3.65×1.50	31	〃	H_1 Ⅰ
			82	9	6.15×4.30×1.35	37	〃	⑬ W30 N72 Ⅰ
			83	10	7.70×6.60×2.05	85	〃	⑬ W30 N72 Ⅱ
			84	11	3.40×3.20×1.10	9	〃	/
			85	12	4.40×2.65×1.10	12	〃	/
			86	13	8.40×4.60×2.50	93	〃	/
			87	14	4.20×4.15×0.85	20	〃	/
			88	15	9.30×5.40×2.5	118	〃	/
			89	16	3.65×2.20×0.85	5	〃	/
④ 石 槍			90	1	4.35×1.90×0.75	6	〃	H_2 E70 S26 Ⅱ上
			91	2	5.00×1.90×1.15	10	〃	H_3 E167 S63 Ⅱ
			92	3	7.10×2.30×1.40	18	〃	H_3 W67 S150 Ⅱ
			93	4	4415×1.35×0.96	6	〃	H_1 W29 S90 Ⅳ
			94	5	6.75×3.10×2.20	35	〃	/
			95	6	10 65×3.30×1.90	64	〃	/

			96	7	3.85×2.40×0.90	10	/	/	
⑤ 石斧		3	97	1	9.45×5.10×2.60	228	(半欠) 角閃片岩	H2	Ⅱ・Ⅲ
			98	2	9.25×3.90×2.40	140	ホルンフェルス	8 N54 S31	Ⅰ
			99	3	6.60×3.80×2.50	68	(半欠) 石英安山岩	H2	Ⅱ・Ⅲ
			100	4	7.10×4.30×2.45	112	海縁石砂岩	H2 E94 N76	Ⅱ上
			101	5	6.90×3.85×2.20	106	ホルンフェルス	H2 E117 S108	Ⅱ
			102	6	6.65×2.30×1.10	25	ホルンフェルス	H2 W91 N229	Ⅲ
			103	7	8.25×2.90×1.95	54	(一部欠) 緑泥片岩	H2 W60 N90	Ⅱ上
			104	8	7.55×4.20×2.50	124	(半欠) 花崗閃緑岩	13 E110 N160	Ⅰ下
			105	9	6.45×3.25×2.35	102	(半欠) 花崗閃緑岩	N223 W178	Ⅰ
			106	10	9.10×5.60×1.75	80	珪質頁岩	H2	Ⅱ
			107	11	5.80×5.60×2.40	57	(一部欠) 珪質頁岩	/	
	多頭		108	12	7.80×5.60×1.30	48	泥岩	N83 S73.5	Ⅱ上
			109	13A	4.90×4.35×1.70	46	(半欠) ホルンフェルス	/	
			110	13B	6.57×3.80×2.12	75	千枚岩	⑬	Ⅰ
⑥ 軽石製品		4	111	1	10.80×8.45×3.55	89	(一部欠) 浮石質凝灰岩	H2 W180 N86	Ⅴ上
			112	2	4.00×6.40×1.80	12	(半欠) 浮石質凝灰岩	H2	Ⅴ
			113	3	8.45×4.60×2.20	18	(一部欠) 浮石質凝灰岩	H1	Ⅲ
			114	4	4.90×4.40×2.20	18	(一部分) 浮石質凝灰岩	H2	Ⅴ
			115	5	9.80×6.00×2.60	38	浮石質凝灰岩	/	
			116	6	7.10×9.35×2.90	50	(半欠) 浮石質凝灰岩	H3	Ⅵ
			117	7	7.80×6.60×3.25	39	浮石質凝灰岩	H2	Ⅵ
			118	8	8.65×4.30×2.90	29	(一部分) 浮石質凝灰岩	H2	Ⅵ
⑦ 扶入石器			119	1	6.90×3.30×0.80	10	珪質頁岩	/	
⑧ 石錐			120	1	6.2×5.10×2.70	50	〃	H3 E156.5 S111.0	Ⅰ
			121	2	4.75×1.95×0.82	6	〃	H1 N27 W183	Ⅳ
			122	3	3.20×0.75×0.50	0.6	〃	H1	Ⅲ
			123	4	4.65×1.45×0.85	8	〃	H3	Ⅱ
			124	5	3.70×1.50×1.00	4	〃	/	
⑨石刀			125	1	14.7×4.15×0.90	83	(半欠) 粘板岩	H1 E187 S231	Ⅱ上
⑩ 穿孔小玉	5	5	126	1	0.72×0.92×0.95	0.5	ホルンフェルス	H2 W75 S20	Ⅴ
			127	2	0.70×0.95×0.95	0.6	〃	H1 E50 S148	Ⅵ
			128	3	0.90×2.00×1.50	2	〃	H2 W134 N36	Ⅴ

			129	4	1.50×1.02×0.45	0.2	ホルンフェルス	H1 Ⅲ
⑪装身具			130	1	2.25×0.55×0.55	0.2	緑色凝灰岩	H1 E113.5 N18 Ⅱ中
⑫ 自然石	緑色原石		131	1	2.90×1.65×1.30	5	〃	H1 Ⅴ
			132	2	1.60×1.00×0.70	2	〃	H3 Ⅱ
			133	3	1.40×0.80×0.55	0.2	〃	H1 W170 S251 Ⅲ
			134	4	1.10×0.50×0.60	0.1	〃	H1 Ⅳ
			135	5	2.25×1.70×0.90	4.3	〃	H2 Ⅳ
			136	6	1.65×1.35×1.10	3	〃	H2 Ⅳ
			137	7	1.45×1.40×0.95	3	〃	H2 Ⅳ
			138	8	3.55×2.50×1.90	16	〃	H2 Ⅳ
			139	9	2.15×1.80×0.95	2	〃	H1 Ⅴ
		5	140	10	1.40×1.10×0.45	1	〃	/
⑬ クボミ石			141	1	6.90×6.10×4.20	273	(朱塗)石英安山岩	TP1 Ⅱ
			142	2	10.90×8.40×4.05	386	凝灰岩	2号住居趾
			143	3	12.70×6.90×5.10	550以上	黒雲母花崗岩	TP1 Ⅱ
			144	4	12.70×7.05×4.80	450	細粒凝灰岩	⑥ Ⅰ
			145	5	6.7×6.50×3.90	158	(1/1部分)凝灰岩	TP1 Ⅱ
			146	6	11.4×6.80×3.85	302	緑色pitch灰岩	H3 Ⅱ
			147	7	13.5×8.35×5.15	550以上	緑色灰岩	H3 Ⅱ
			148	8	10.15×8.80×4.10	236	泥pitch岩	H3 N103.5 E165.5 Ⅰ下
			149	9	13.2×6.70×2.90	333	流紋pitch岩	H2 Ⅳ
			150	10	10.2×6.00×4.00	392	凝灰岩	/
			151	11	9.50×5.90×3.60	217	凝灰pitch岩	/
			152	12	10.55×10.90×5.85	550以上	緑色凝灰岩	/
			153	13	14.85×6.75×4.50	487	〃	/
			154	14	16.7×5.55×4.35	246	泥pitch岩	H3 Ⅱ
			155	15	12.95×10.50×5.95	450	泥pitch岩	H1 Ⅴ
			156	16	15.45×10.60×7.00	550以上	凝灰岩	2号住居趾
		6	157	17	14.40×6.20×4.20	332	(半欠)流紋岩	N460 W74 Ⅰ
⑭ タタキ石			158	1	8.40×8.00×8.15	550以上	流紋岩	H1 W148 N176 Ⅴ
			159	2	11.70×9.50×6.95	550以上	(朱塗)石英pitch安山岩	H1 W78 N82 Ⅴ
			160	3	11.05×8.30×5.20	550以上	(朱塗)黒雲母pitch花崗岩	H3 E152.5 S191.5 Ⅱ上
			161	4	10.35×9.70×3.80	550以上	花崗閃緑岩	④ Ⅱ

⑭ タタキ石			162	5	11.30×7.60×3.75	489	黒雲母花崗岩	H_1 V
			163	6	9.20×7.20×3.60	361	〃	H_1 V
		7	164	7	9.60×6.80×3.65	385	頁岩	TP_1南 I
			165	8	11.10×7.40×3.60	442	〃	H_2 V
			166	9	12.30×7.35×3.00	415	黒雲母花崗岩	⑨ I
			167	10	8.45×7.10×2.80	272	〃	H_2 V
			168	11	8.10×7.20×3.75	399	流紋岩	2号住居趾
			169	12	9.70×6.45×2.80	261	黒雲母花崗岩	⑨ I下
			171	13	6.30×5.20×3.20	170	(朱塗) 流紋pitch岩	H_2 E151 N178 III
⑮ 打痕擦痕のある扁平石器			171	1	5.35×4.35×1.10	42	頁岩	2号住居趾
			172	2	6.45×2.40×0.8	22	〃	〃
			173	3	6.55×3.20×1.30	46	〃	〃
			174	4	5.60×3.50×0.95	32	流紋pitch岩	H_2 〃 II
			175	5	8.60×5.20×1.80	120	安山pitch岩	H_2 II
			176	6	6.50×4.15×1.00	45	泥pitch岩	H_2 II
			177	7	5.80×3.10×1.15	37	頁岩	L_6 I
			178	8	6.95×3.40×1.20	45	流紋岩	/
			179	9	7.60×3.35×1.20	50	頁岩	/
			180	10	6.80×4.30×1.10	53	流紋岩	/
			181	11	8.30×5.30×2.00	140	頁岩	L_6 I
			182	12	8.45×5.70×1.70	124	流紋岩	L_6 I
			183	13	10.20×5.80×1.80	168	流紋pitch岩	H_1 V
			184	14	10.80×4.15×1.65	124	細粒凝灰岩	
			185	15	8.10×6.60×1.80	154	(半欠) 安山岩	H_2 W52 S20 II
			186	16	6.85×5.00×2.00	120	凝灰質砂岩	W45 S47 I
			187	17	8.90×6.15×1.85	162	石英安山岩	/
			188	18	8.60×5.65×1.80	148	〃	/
			189	19	5.15×3.00×0.75	16	珪質頁岩	TP_4
⑯ 円盤状扁平石器	8		190	1	5.20×4.70×1.40	44	流紋岩	TP_4 I
			191	2	4.90×5.00×2.40	80	〃	TP_4 I
			192	3	5.65×5.65×2.30	74	〃	TP_4 I
			193	4	5.30×5.40×1.95	82	〃	H_2 II
			194	5	5.25×5.10×1.95	51	〃	H_1 V

⑯ 円盤状 扁平石器		8	195	6	6.60×5.40×2.45	120	流紋岩	H_1	Ⅴ
			196	7	5.95×5.85×1.50	68	〃	/	
			197	8	5.95×5.85×1.70	90	〃	/	
			198	9	5.80×5.55×1.65	69	流紋pitch岩	H_3	Ⅱ
			199	10	6.10×5.75×1.20	60	流紋岩	2号住居趾 W45 N145	
			200	11	4.95×5.15×1.25	42	〃	/	
			201	12	4.00×4.00×1.05	22	〃	H_1	Ⅴ
			202	13	6.50×5.85×2.60	126	珪質頁岩	L_6	Ⅰ
			203	14	4.50×3.90×1.25	26	流紋岩	TP_1	
			204	15	9.60×7.90×3.40	373	〃	TP_1	
			205	16	12.50×11.75 ×4.20	550以上	〃	H	Ⅴ
			206	17	4.40×4.20×0.55	16	安山岩	AH_2	Ⅴ
			207	18	4.65×4.00×1.10	22	(部分)流紋岩		
			208	19	4.35×2.70×1.20	19	めのう	AH_3	Ⅲ
⑰ 線刻石		9	209	1	9.25×8.20×3.80	284	凝灰岩	ASC_{13}	Ⅰ
⑱ 石皿		10	210	1	31.50×13.00×3.50	以上 1 K50	(半欠)褐灰色流紋岩	12の壁面 S500 W139	Ⅰ
			211	2	19.00×14.25×2.95	以上 1 K	(部分)安山岩	H_2	Ⅲ
			212	3	23.80×18.30×3.70	以上 2 K	(朱塗)安山岩	H_1 W165 S166	Ⅳ
			213	4	8.85×7.25×2.60	178	(部分)砂岩	9	Ⅰ下
⑲ 石棒		11	214	1	24.00×8.60×7.35	以上 1 K40	石英安山岩	H_1	Ⅴ
			215	2	28.40×10.70×8.80	以上 3 K50	〃	H_2	Ⅴ
⑳ 石錘			216	1	9.85×7.15×2.85	118	泥岩	TP_1	Ⅰ
㉑ 砥石			217	1	8.15×5.50×1.40	58	(部分)流紋岩	9	Ⅰ下
㉒ 半円形扁平石器			218	1	11.30×7.75×1.60	210	泥岩	H_2	Ⅴ
㉓ 三角形石器			219	1	6.31×6.23×1.15	42	流紋岩	D_8	Ⅴ
			220	2	7.05×5.59×1.94	100	泥岩〃? ×	/	
㉔ 穿孔のある自然石			221	1	10.60×6.48×4.05	218	泥岩? ×	H_1 E67 N202	Ⅲ
			222	2	6.58×5 88×5.08	236	めのう ×	H_1	Ⅱ
㉕ 石弾			223	1	4.39×3.50×3.32	47	泥岩	H_1	Ⅱ
			224	2	4.53×4.48×4.50	46	〃	H_1	Ⅱ
			225	3	4.96×4.18×4.10	124	めのう	H_1	Ⅱ
			226	4	4.01×3.85×3.52	60	シルト石	H_3	Ⅲ
			227	5	7.52×7.00×5.28	272	緑色凝灰岩	H_3	Ⅲ

㉖ 自然石	黒曜石	12	228	1			黒曜石	一括
			229	2			〃	〃
			230	3			〃	〃
			231	4			〃	〃
			232	5			〃	〃
			233	6	(2ケ)		〃	〃
	緑色原石		234	1			緑色厚石	〃
			235	2			〃	〃
			236	3			〃	〃
			237	4			〃	〃
	鉄石英		238	1			鉄石	〃
			239	2			〃	〃
㉗ 鉄製品				1	6.51×5.68×3.35	95		2号住居趾
				2	4.68×2.02×2.50	20		〃
				3	5.06×2.12×1.86	18		〃
				4	3.59×3.55×3.00	58.5		C~F5 pit 内
				5	4.08×2.14×1.67	14.5		5号住居趾
				6	5.08×1.56×1.42	8		〃
				7	2.00×1.63×1.00	3		〃
自然石	pitch			1				

{(☆) /線は、記録の不備による}

(第8次)　観音林遺跡出土石器総括表（総計 215）　（表4）

①	石鏃	33	15.35%	⑬	タタキ石	13	6.05%
②	削器	40	18.60	⑭	打痕、擦痕のある扁平石器	19	8.84
③	掻器	16	7.44				
④	石槍	7	3.26	⑮	円盤状扁平石器	19	8.84
⑤	石斧	14	6.51	⑯	線刻石	1	0.47
⑥	軽石	8	3.72	⑰	石皿	4	1.86
⑦	扶入石器	1	0.47	⑱	石棒	2	0.93
⑧	石錐	5	6.98	⑲	石錘	1	0.47
⑨	石刀	1	0.47	⑳	砥石	1	0.47
⑩	穿孔小玉	4	1.86	㉑	半円形扁平石器	1	0.47
⑪	装身具	1	0.47	㉒	三角形石器	2	0.93
⑫	クボミ石	17	7.91	㉓	石弾	5	6.98

(第8次)　観音林遺跡出土岩質総括表

①	珪質頁岩	106	49.30%	⑭	凝灰岩	5	6.98%
②	玉髄	1	0.47	⑮	黒雲母花崗岩	7	3.26
③	角閃片岩	1	0.47	⑯	細粒凝灰岩	2	0.93
④	ホルンフェルス	8	3.72	⑰	緑色灰岩	3	1.40
⑤	石英安山岩	7	3.26	⑱	流紋岩	29	13.49
⑥	海緑石砂岩	1	0.47	⑲	頁岩	8	3.72
⑦	緑泥片岩	1	0.47	⑳	安山岩	5	6.98
⑧	花崗閃緑岩	3	1.40	㉑	凝灰質砂岩	1	0.47
⑨	泥岩	9	4.19	㉒	めのう	2	0.93
⑩	千枚岩	1	0.47	㉓	褐灰色流紋岩	1	0.47
⑪	浮石質凝灰岩	8	3.72	㉔	砂岩	1	0.47
⑫	粘枚岩	1	0.47	㉕	シルト岩	1	0.47
⑬	緑色凝灰岩	3	1.40				

ⓑ石器について　（S・P・L 1～12）

出土した石器類については、（表3）において、示したとおり、22器種にわたって、215点の出土である。

この出土した石器類については、（表3・表4）に、出土地区・層位・岩質・計測値等について示してあるが、出土した層位によって分類することが不可能であったため、出土した土器との伴出関係を明らかにすることができなかったのが残念である。

すなわち、縄文時代後期・晩期のものが含まれるものと考えたい。

• また、当遺跡の発掘調査においては、一貫して、石器に使用されている「岩質」の比率を記載してきたのであるが、第8次発掘調査においても（表4下段）において示したとおりである。

石器の器種については、22器種、岩質別については、25岩質に分けられる。

• 石器の出土数215点に占める器種の比率が大きいものを述べると次のとおりである。

〔石鏃－15%〕〔削器－18%〕が最も大きく、〔円盤状扁平石器－8.8%〕〔打痕・磨痕のある扁平石器－8.8%〕がつづく。

• また、岩質では、〔珪質頁岩－49.30%〕、〔流紋岩－13.49%〕と最も大きく、〔凝灰岩－6.98%〕〔安山岩－6.98%〕となっている。

• これらの器種別・岩質別の比率については、いま少し、継続した後、なんらかの結論を導き出したいと考えるところである。

調査者　金子　浩昌

1987・07・17～08　観音林遺跡（第８次）出土、骨類調査表　（表５）

	資料No.	出土区・層	記　　録	出土状況等
観音林遺跡	1	H_1 Ⅲ	鳥　類：カモ類、烏口骨(L)、遠位部分の小片、中型カモのものである。 獣　類：大型獣類の破片、手根・足根の一部、指趾骨骨端らしい破片を含む。	H_1 グリットⅢ層に散布
	2	H_2 Ⅲ	獣骨片：海獣骨らしい破片が主。 中型獣もしくは鳥骨片を含む。	H_2 グリットⅢ層に散布
	3	H_2 Ⅲ	ニホンジカの中手もしくは中足骨の遠位骨端部、骨端は脱れて滑車部分が残っている。	〃
	4	T・P_1 Ⅱ	海獣もしくはヒトの骨の形態をもつ小片、この両者を区別するのは難しかった。	T・P_1 グリットⅡ層上面に散布
	5	H_2 Ⅲ	鳥　類：中足骨遠位端滑車部の一つがみられた。カモ位の大きさ。別に大腿骨片があり、さらに小さい種類と思われる。不完全な標本のため、それ以上は判明しない。 獣骨片中に擦痕らしい加工痕のある小骨片があったが、あまりに小さく確認が困難であった。	H_2 グリットⅢ層上に散布
	6	H_2 Ⅲ	陸獣が主であるが、海獣類の骨片も混在するらしい。 焼けた獣骨片少量。	〃
	7	H_1 Ⅲ	鳥もしくは中型獣の断片。	H_1 グリットⅢ層に点在

ⓒ骨類　（表５・ｂ・Ｐ・Ｌ１）

第８次発掘調査においても、Ａ地区Ｈ１・Ｈ２グリット、および、Ｔ・Ｐ２において、骨片が出土した。

これらの骨類については、早稲田大学　金子浩昌氏に調査を依頼し、その結果をいただいた。それが（表５）である。（原文のまま）

調査結果について、まとめてみると、次のようになっている。

①鳥類（カモ類）　②獣骨片（海獣？）

③獣類（大型獣類）　④鳥骨片

⑤ニホンジカ中足骨　⑥海獣、もしくは、ヒトの骨の形態をもつ小片（この両者を区別するのは困難）

⑦鳥類（カモ位の大きさ）、および、小形種

⑧獣骨片（擦痕らしい加工痕のあるもの）および、焼けた獣骨片（少量）

要約すると以上のようになるが、陸獣が主であるが、海獣類の骨片も混在するようである。

しかし、資料が、小片のため確認が困難であったものと推察される。

ⓓ土師器・須恵器（A・P・L，B・P・L）

第11群土器としたものは、土師器を一括したものである。また、第12群土器としたものは、須恵器を一括したものであるが、両者とも〔Ⅲ〕で述べたとおり、2～4号とした住居址に伴うものが多く、これらの住居址と年代的には等しい時期のものと思われる。

〔土師器〕　（A・P・L　　，B・P・L　　）

出土した土師器は、（60cm×28cm×15cm）の箱で約3箱の出土である。

これらの土師器の出土層位は、Ⅰ・Ⅱ層で多く出土し、他の縄文土器と混在して出土した。したがって、層位的な把握は、不可能であったのが残念である。

出土した土師器類は、器形別に分類すると、①坏形・②甕形に分けられるが、型式学的に見て、「東北北部の土師器型式」第二型式のものと思われる。

〔須恵器〕　（B・P・L77・78，写4）

出土した須恵器類は、（60cm×28cm×15cm）の箱で約3箱分の総量である。

これらの須恵器類は、既述のとおり、土師器・縄文土器と混在して出土した。主包含層は、Ⅰ・Ⅱ層である。

但し、既述したとおり（Ⅲ）、2号住居址の床面上（Ⅴ層）では、須恵器が集中して出土したことは述べてあるが、当遺跡では、多量の須恵器が床面上に密着して出土した例がなく、第8次発掘調査で検出したのが最初である。他の発掘区では、Ⅰ～Ⅱ層に散在して出土した。

出土した須恵器は、器形別に分けると、①長頸（細口）壺・②甕（大形）の2種に分けられるが、個体別に数量を知ることができなかったが長頸（細口）壺が多いように認められる。

☆2号住居址出土の須恵器について（写4）

まだ復元作業は中途であるが、長頸（細口）壺が、6個体以上、大形の甕が2個体以上となっている。

2号住居址（焼失家屋）の一括資料としては、器形別に見ると単純なように考えられるが、坏形のものは出土していない。そのため一括資料を検討すると、土師器の坏形が、約

6～7個体分小片として入っていることがわかった。

すなわち、小形のものは、土師器を併用していたものと思われる。

• これらの須恵器は、前田野目・持子沢窯址群で生産されたものと、その特徴が類似するものである。このことから、10～11世紀頃の年代を与えることが可能であろう。

☆2号住居址以外の各区から出土した須恵器

土師器を含めて総合的に出土した。土師器や須恵器の時期を考えてみると、「土師器」はは、第二型式の新しいものと考えられるし、須恵器を含めて、平安時代後葉のものと考えるのが妥当と思われる。

〔V〕 考　　察

(1)観音林遺跡の層序については、第1～7次発掘調査において、述べてきたのであるが、第4図上段に示すとおり、この遺跡は、堀をめぐらせた「館址」である。

このことを念頭におかないと、層序が理解できないように思われる。

すなわち、「舘址」造営の過程において、台地の中央部は削平され、原黒土層（Ⅲ層)は、遺跡の東・西・南・北に移動されたもののようである。

遺跡の中央部には、原黒土層は存在せず、遺跡を囲む堀の周辺には、Ⅱ層（黒色土）があり、その下にⅢ層が存在するのである。

(2)出土した土器群をみると、「前期」「中期」「後期」「晩期」「土師器」「須恵器」等の出土があるが、主体は、「後期」→十腰内Ⅰ・Ⅱ式、および、その中間型式の土器群、および「晩期」→大洞B・C式～大洞A式までの土器群は出土するが、大洞B式土器は出土しない点に注意したいと思う。

(3)遺構についてみると、土師器使用時代のカマドを備えた住居址が台地上の平地で検出されるが、土師器・須恵器の出土量は少量である。

(4)土器群の出土状況をみると、後期の土器が多く出土する地区（AN1～AN1b地区)、晩期の土器が多量に出土し、後期の土器も伴出する地区（A地区)、および、各型式の縄文式土器と、土師器・須恵器が混在する地区（AN2区・AC～F区、ASC区・AN4区）に分けられるが、この地区は、平担部である。（但し巨視的にみた傾向である。)

(5)A地区H1～H3グリットの出土状況をみると、後期の土器が上層に晩期の土器が下層に出土する。しかも主包含層は、黒土層（Ⅱ層）との混合層であって、「舘址」造営のために削平され、低地または、斜面に移動した地層であることが理解される。そのことは出土、土器からもわかることである。

(6)土器について再度述べると、第8次発掘調査では、「大洞C1式」土器の出土量が多く、第1～7次と比較して最も多く出土している。

• また、「大洞C2式」と「大洞A式」の文様要素をもつ「大洞C2－A式」土器（聖山式）の出土が少なく、残念であった。

• 後期の土器では、「十腰内Ⅰ・Ⅱ式」の中間型式とされる土器群の出土があって、資料が蓄積されてきた。機会があれば発表したいと考えている。

(7)石器について述べると、毎年多く出土するのであるが、（石鏃）については、ピッチが柄部に付着するものが多く、「削器」「掻器」などの出土が多い。

また、岩質別に分類すると珪質頁岩製の石器が多く、全石器の49.3%を占めている。

残念乍ら、土器・石器を含めて、層位的に分類することができないので、各期（主として、後期・晩期）のものが含まれていることを了承されたい。

(8)遺構について述べると、縄文時代の住居址、土師器使用時代の住居址。および土壙に分けられるが、方形プランで「カマド」をもつ住居址の「カマド」の位置に特徴があるように思う。すなわち、2・3号住居址、および、4号住居址の「カマド」は、長辺・短辺の交る角に設定されていた。このことについては、類例を待って検討したいと考える。

(9)堀について、観音林遺跡は、堀に囲まれた舌状台地上に所在する。

この堀について第1次以来、その造営年代を把握したいと努めて現在に至っているが、未だに、そのきめ手となる資料をつかんでいない状態である。この後第10次発掘調査までに努力を続けたいと思うところである。

(10)土偶について、第8次発掘調査で、出土した土偶は、7点と脚部2点である。

脚部の2点は、縄文時代後期のものであるが、他の7点は、晩期の土偶である。

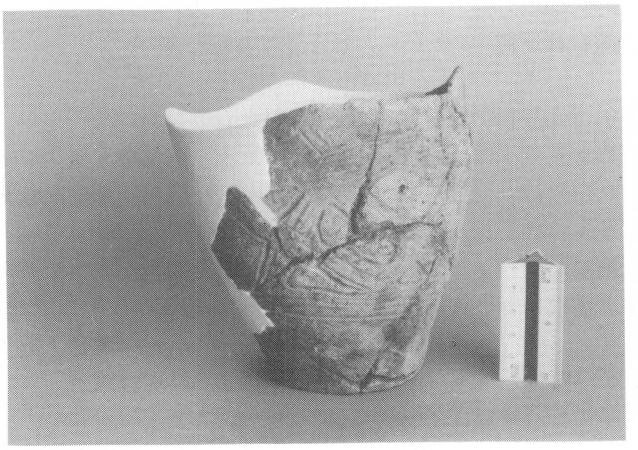
いずれもA地区H2出土のものであるが、このうち、5点は、1か所にまとまって出土したものである。（ミニチュア壺形土器も伴出した。）、土偶が5個体まとまって出土した例は、きわめて珍しいものと考えられるが、既述したとおり、二次堆積した黒土層（Ⅲ層下）出土であるため、原位置がどのようであったのか不明である。ここでは、土偶5個体とミニチュア壺形土器が、まとまって出土したと報告する程度にしたいと考える。

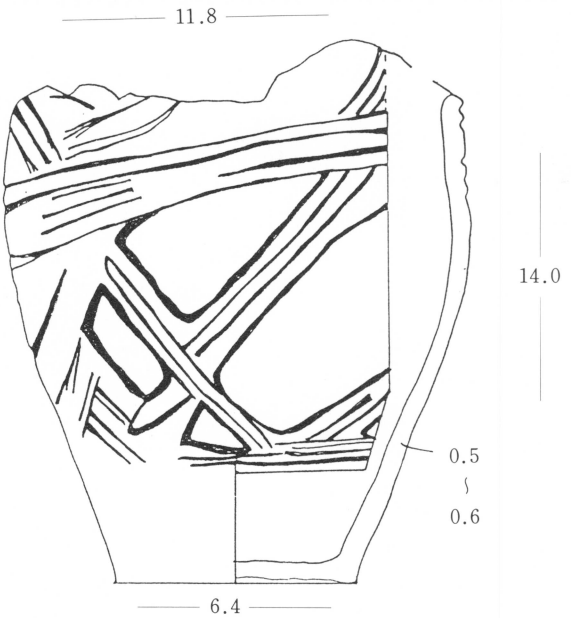
☆　参考文献

① 観音林遺跡　第１～７次発掘調査報告書
五所川原市教育委員会
② 五月女萢遺跡　(1983)　市浦村教育委員会
③ 亀ケ岡式土器　(1984)　村越　　潔　ニューサイエンス社
④ 「白　坂」　(1983)　山岸　英夫　北海道松前町教育委員会
⑤ 北奥古代文化　(1975)　平山　久夫編　学生社
⑥ 撚糸文　(1986)　青森山田高等学校　考古学研究部
⑦ 北海道における縄文時代後期中葉の土器編年について
(1977)　鷹野　光行　考古学雑誌　第63巻　第４号
⑧ 石器時代の日本(1960)　芹沢　長介　築地書館
⑨ 津軽・前田野目窯址
(1968)　坂詰　秀一　五所川原市教育委員会
⑩ 撚糸文　第16号(1988)　十腰内工式土器文化の研究(3)　青森山田高等学校考古学研究部

〔深鉢形土器〕

1　　AH2Ⅳ



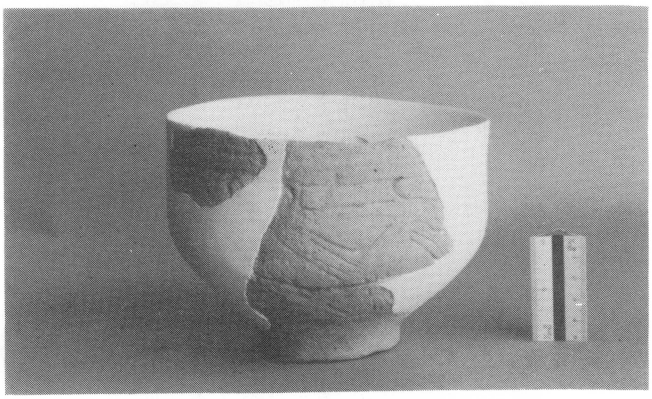


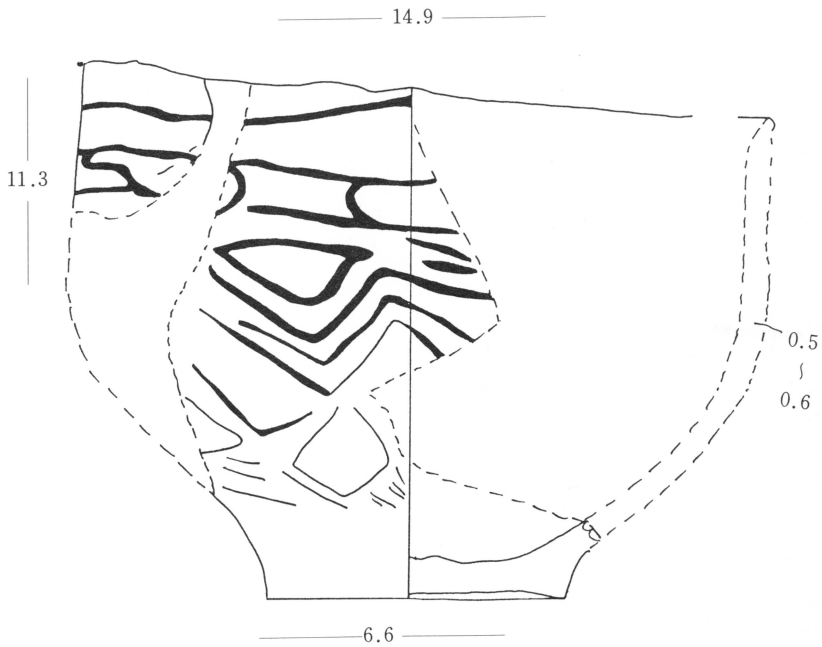
〔深鉢形土器〕－1

☆　（1）は、H2Ⅳ出土の第3群土器（十腰内Ⅰ式）である。

- このものの器形は、口縁には山形突起があって波状口縁をなし、口径部は、ゆるく外反するもので、肩部はゆるくふくらむ器形で、その底部は平底をなすものである。
- 施文は、3本を一組とする沈線が斜行して交差し、頚部には、やや斜めに横走する沈線が3本施文されるものである。
- 色調は、明黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。

2　　AH2Ⅰ





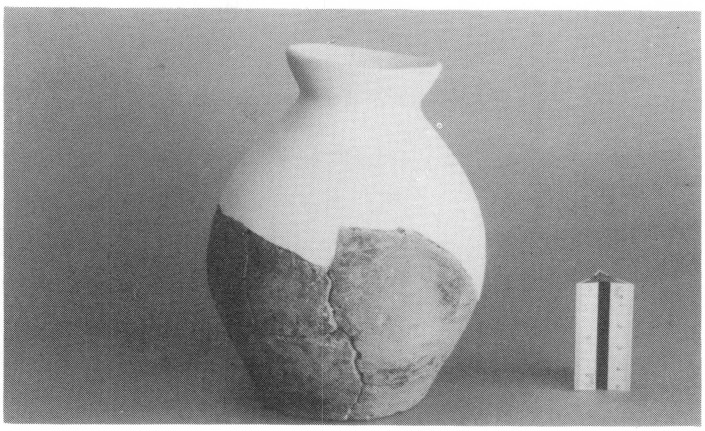
〔鉢形土器〕－2

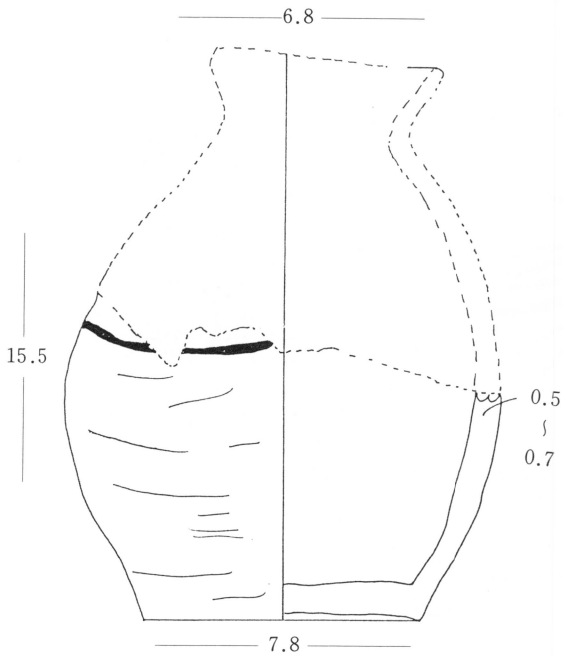
☆　（2）は、A地区H 2 グリットⅠ層出土（以後H 2 Ⅰと略述する）の第3群土器（十腰内Ⅰ式）である。

- 器形は、高台状の底部をもち、最大幅が胴下位にある器形で、底径に比して、口縁径が大きい。
- 施文は、口頸部には、「十腰内Ⅰ式」の沈線と沈線を弧状につなぐ文様を上段に施文し、下段には、「重山型文」の祖形とも思われる施文が認められる。
- 色調は、明黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良く堅緻である。

〔壺形土器〕

3　　AH3Ⅰ





〔壺形土器〕－3

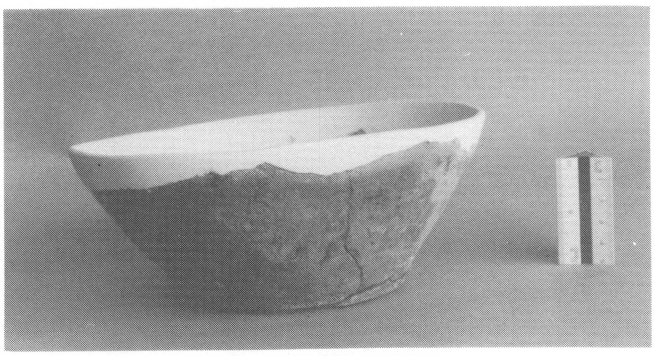
☆　（3）としたものは、A地区H3グリットⅠ層出土の第3～4群土器（十腰内Ⅰ式～中間型式）であろう。

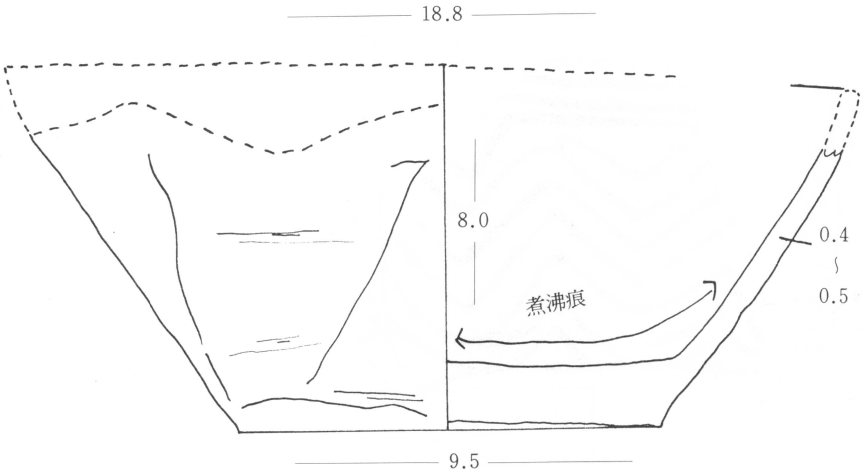
- 器形は、口頸部が「くの字」に外反するものらしく、肩部が張らず、最大幅は、胴下部にあると思われる器形である。
- 施文は、沈線文がわずかに認められることから、恐らく頸部下～沈線文のある胴中央下の間には、文様帯があったのであろうか？
- 色調は、明赤褐色、胎土・焼成とも良い。

〔鉢形土器〕

A.P.L 4

4　　AH3V



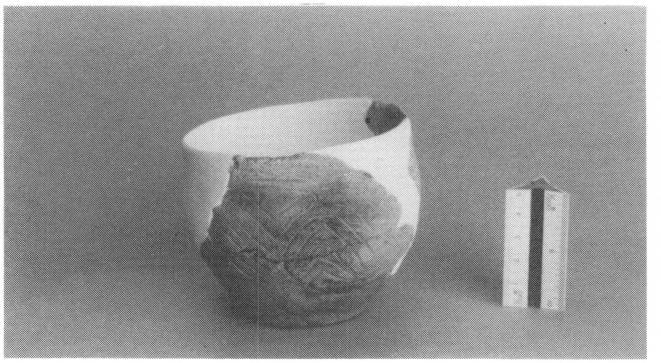


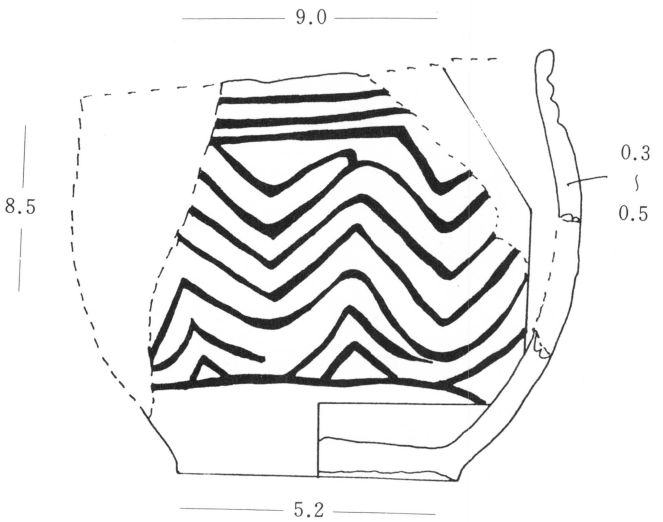
〔鉢形土器〕－4

☆　（4）は、A地区H3グリットV層出土の第3群土器「十腰内Ⅰ式」であろう。但し、口縁部が欠失しているため、断定は控えるが、器形から考えると、第4群土器（十腰内Ⅰ・Ⅱ式の中間型式）の可能性もある。

- 器形は、口頸部がやや内傾するらしいが不明としておく、底面は、わずかに「上げ底」で口縁に向って斜行する器形で「十腰内Ⅰ式」の器形としては考えにくい点もある。
- 施文はなく、無文土器であるが、胎土・焼成とも良好である。

5 H 2 V





〔鉢形土器〕－5

☆ （5）としたものは、H 2 グリットⅤ層出土の第4群土器（十腰内Ⅰ・Ⅱ式の中間型式）である。

- 器形は、胴部がふくらみ、口頸部がゆるく外反するもので底部直上がややしまる形状をなすものである。
- 施文は、「重山形文」が沈線によって施文されるものである。この中間型式には、「重山形文」「重波状文」が施文されるものも存在する。
- 色調は、明黄褐色、胎土・焼成とも良い。

9

〔大型把手付土器〕

A.P.L 6

6　　R15 I

〔大型把手付土器〕－6

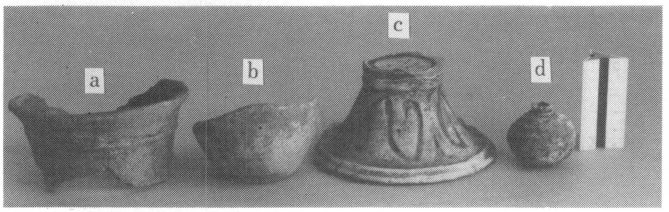
☆　（6）としたものは、R15グリットⅠ層出土の第5群土器（十腰内Ⅱ式）である。

- この「十腰内Ⅱ式」土器は、当津軽地方（主として西北郡）では、出土数が少なく、観音林遺跡においても、数片の出土がある程度であって、まとまって出土があるのは、標式遺跡である「十腰内遺跡」であるが、他は散見する程度で、この形式のものは、永く続いていないようである。
- 施文は、「沈線文と刺突文」が特徴である。
- 色調は、灰黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良好なものである。

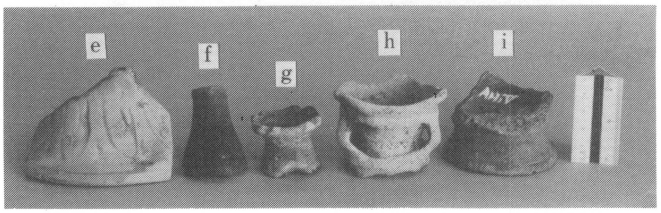
〔台付土器の台部一括〕

AH2Ⅲ　AH1Ⅴ　AH2Ⅲ　AH1Ⅴ

（a）壺形土器口頸部→型式不明
（b）壺形土器胴下部→　〃
（c）台部（施文あり）→大洞C2式
（d）ミニチュア壺形 →　〃



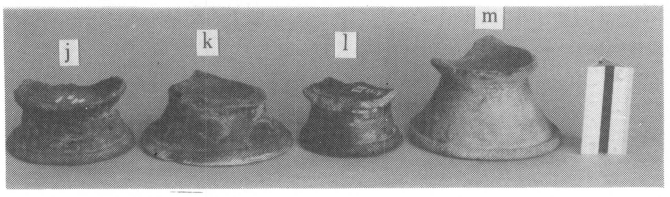
AH2Ⅴ　AH3Ⅴ　AH1Ⅲ　AH1Ⅴ　AH1Ⅴ



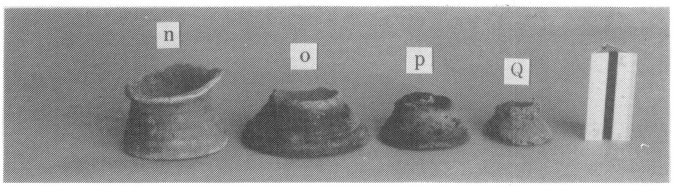
（e）台部（施文あり）→大洞C2式
（f）注口土器　→後期
（g）壺形土器　→大洞C2式
（h）壺形土器　→十腰内Ⅰ式
（i）台部（施文有）　→大洞C2式

AH3Ⅰ　AH3Ⅱ　AH1Ⅲ　AH1Ⅴ

（j）台部（施文有）→大洞C1式？
（k）台部（施文有）→　〃
（l）台部（施文有）→大洞C2式
（m）台部（施文有）→　〃



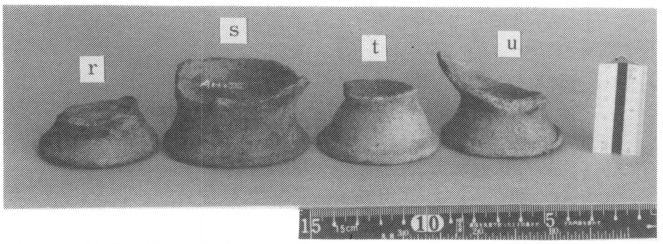
AH1Ⅱ　AH1Ⅴ　AH1Ⅲ　AH3Ⅱ



（n）台部（施文有）　→大洞A式
（o）台部（施文有）　→大洞C2式
（p）台部（スカシ有）→大洞C2式
（q）台部（無文）　→型式不明

AH1Ⅴ　AH1Ⅲ　AH2Ⅴ　AH2Ⅱ

（r）台部→大洞C2式
（s）台部→　〃
（t）台部→　〃
（u）台部→　〃



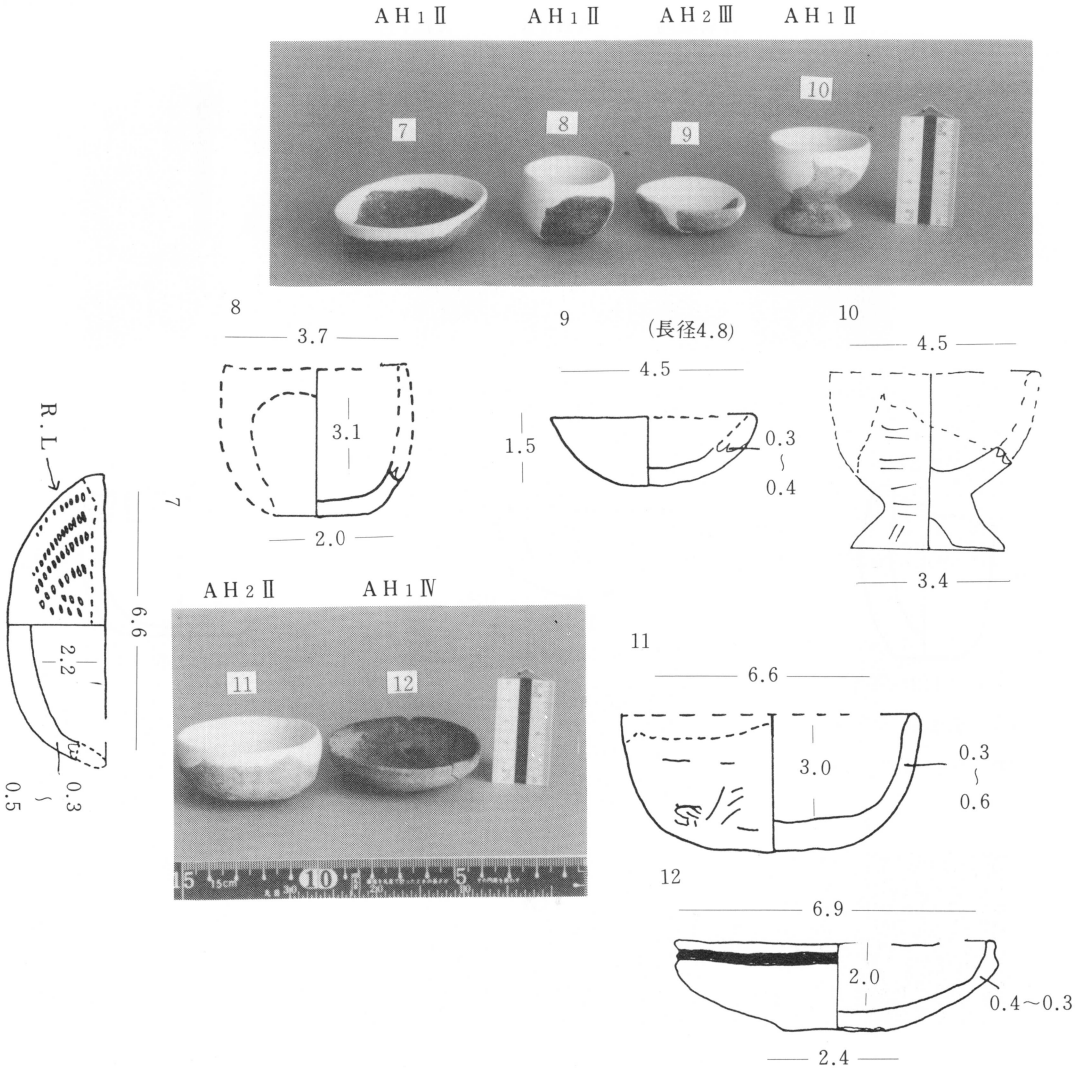
☆　（a・b・d）は、壺形土器、およびミニチュア壺形。

（f・g・h）は、それぞれ（注口）、（壺形）、（橋状把手のある壺形）で、他は、すべて台付土器の台部である。

• 色調は、（a）は、明燈色、他は、（f・k・l）は、黒褐色、他のものは、黄褐色～赤褐色で、いずれも胎土・焼成とも良好である。

〔袖珍土器〕

A.P.L 8



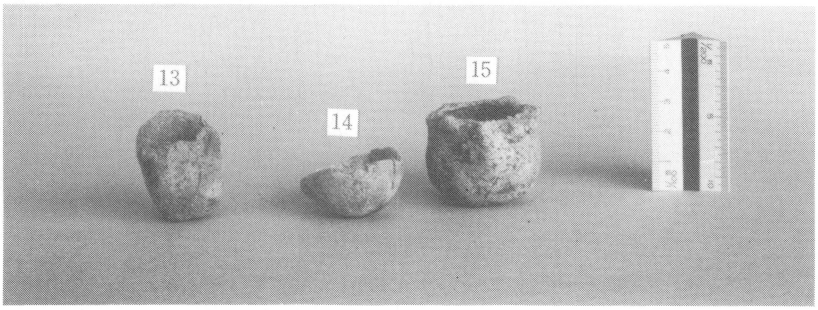
〔袖珍土器〕－7・8・9・10　(粗製)

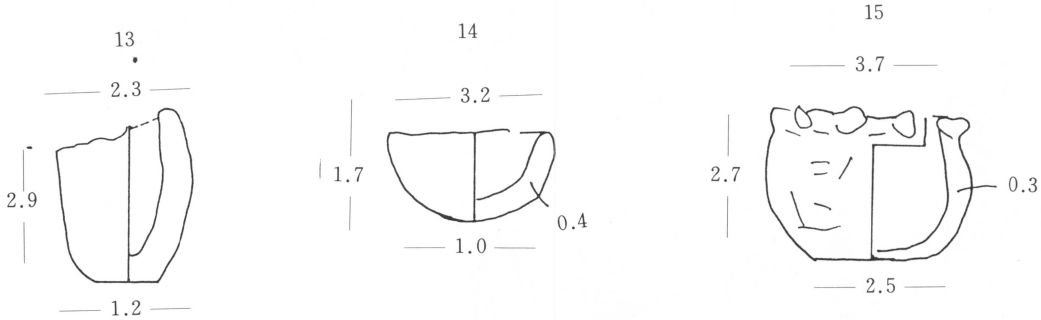
☆　(7・8・9・10) は、それぞれ、H1・H2出土の「袖珍土器」である。(7・8・9・12) は、第8群土器「大洞C2式」と思われる。また、(10・11)は、製法が手ずくねで、その胎土から第3群とした「十腰内Ⅰ式」と思うが断定は控えたい。

- (7～11) は、いずれも無文で、(12)は、修理孔があり、口縁下に沈線文が1条めぐっている。
- 色調は、(7)は明燈色、(8)は黒色、(9)は灰黒色、(10)は灰褐色、(11)は灰褐色、(12) は、外面明赤褐色、内面黄褐色を呈し、胎土・焼成は、良好である。

〔袖珍土器〕

2号住居址内　　AH1Ⅳ　　AH1Ⅲ





〔袖珍土器〕－13・14・15　（粗製）

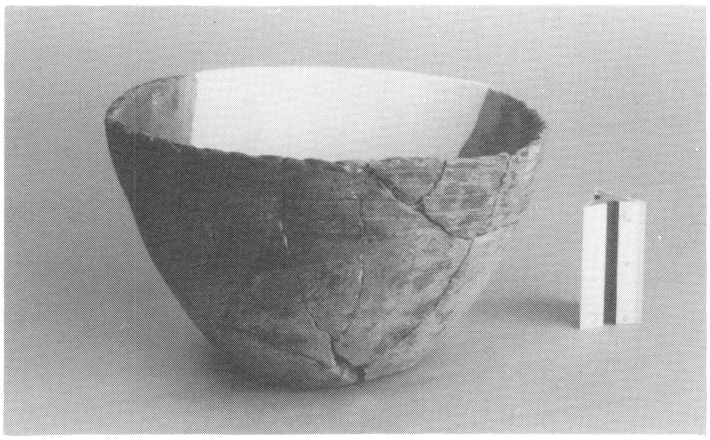
☆　(13・14・15) は、それぞれ「2号住居址・H1グリットⅢ層・H1グリットⅢ層より出土した「袖珍土器」である。これらのものは、縄文土器であることは間違いないがどの型式に伴うものかは不明である。

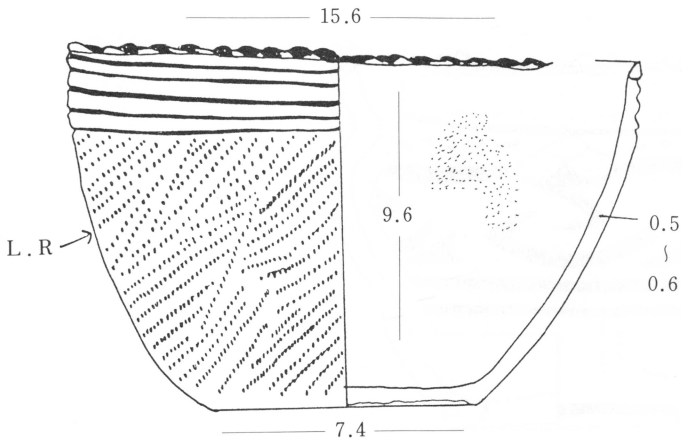
- 施文は、(13・14・15)とも無文のもので、「手ずくね」によって造られたものらしい。(13) は器形不明、(14) は碗形、(15) は鉢形土器で口縁下に瘤が付けられている。
- 色調は、(内外) とも明燈色、胎土・焼成は良好である。

〔鉢形土器〕

A.P.L10

16　　AH3Ⅳ





〔鉢形土器〕－16　（粗製）

（註）この(16)は、「大洞B・C式」の可能性もあるが、一応大洞C１式とした。

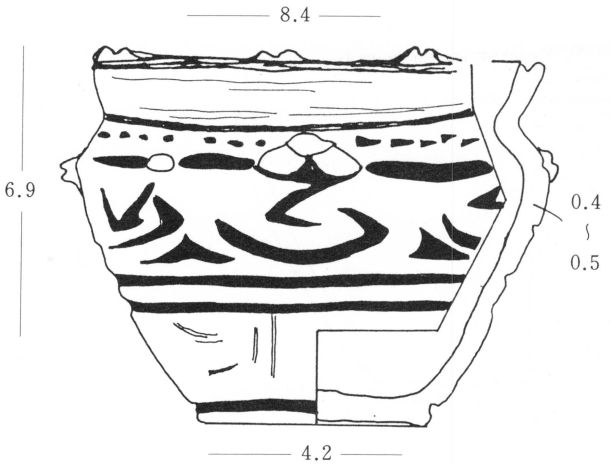
☆　(16) としたものは、H３グリットⅣ層出土の第７群土器「大洞C１式」鉢形土器である。

- 器形は、口径が大きく、胴部がややふくらむもので、底面は、中高のものである。
- 施文は、口唇部に、左より右下へ刻目があって、「大洞B・C式」の名残りが認められる。また、口縁下には、５条程の沈線がめぐっているが、土器を回転させながら施文したように観察される。胴部には、撚りのゆるい、R｛$^{1}_{1}$の撚り糸を回転させて、L・Rの縄文（撚糸文）が施文されている。
- 色調は、外面、上部暗褐色、下半灰赤褐色、内面は明黄褐色で、一部に煮沸痕がある。胎土・焼成とも良い。

〔鉢形土器〕

A.P.L11

17　　AH2Ⅲ



〔鉢形土器〕－17　（粗製）

☆　(17) としたものは、H2グリットⅢ層より出土した第8群土器「大洞C2式」である。

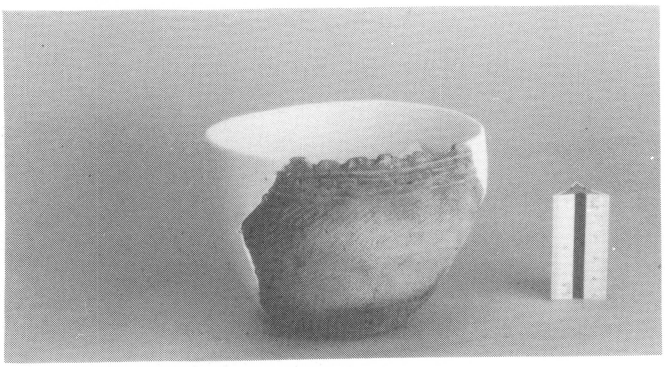
- この (17) の器形は、肩部が強く張り、口縁が「くの字」状に外反するもので、口縁には、小突起を付すものである。また、肩部には、「山型突起」と「二叉山型究起」が交互に付くものである。
- 施文は、肩部に「刺究文」がめぐり、肩部の究起間は短沈線によって連結されており、胴部中央下には、2条の沈線文がめぐり、文様帯を区画している。

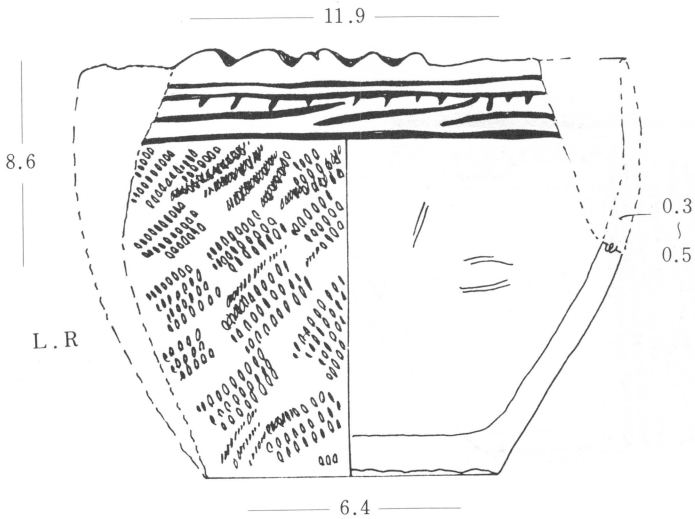
　文様帯には、「曲線文」が施文されるが、文様要素を見ると、「大洞C1式」の要素と「大洞C2式」の要素等も認められ、「大洞C2－A式」の萠芽も認められるものである。

- 色調は、外面黒褐色、内面灰黒色、胎土・焼成ともやや悪い。

〔鉢形土器〕 A.P.L12

18 H1V





〔鉢形土器〕－18 （粗製）

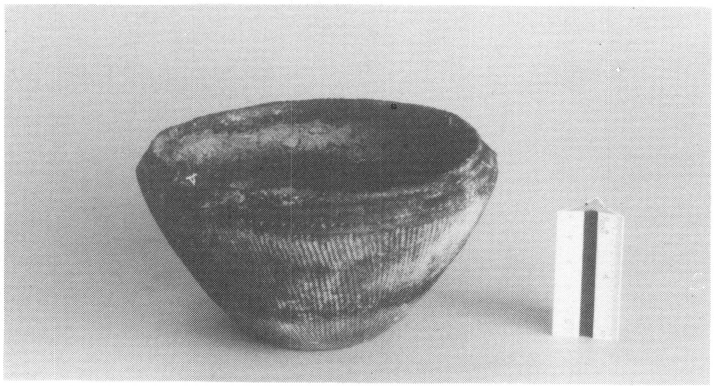
☆ この鉢形土器は、H1グリットV層出土の第7群土器「大洞C1式」である。

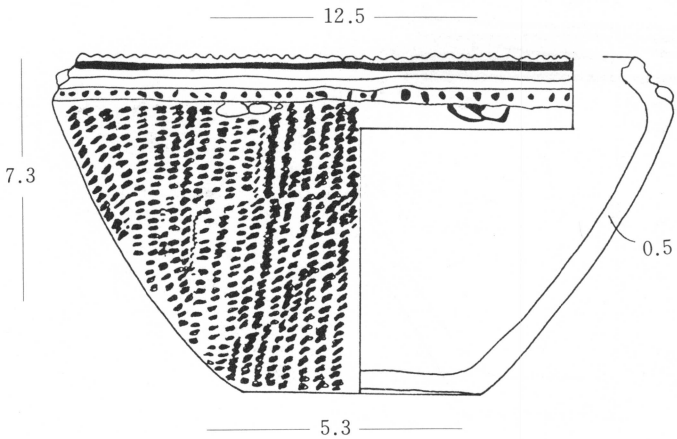
- このものの器形は、小波状の口縁を有し、肩部がふくらむ器形で、底面は、やや上げ底を呈するものである。
- 施文は、口頸部に3条の平行沈線があり、それによって文様帯を区画し、この文様帯には、「刺突文」が施文され、胴部には、二段単節L・R縄文が斜行する。
- 色調は、外面灰赤褐色、内面黄褐色を呈する。胎土・焼成とも良好である。

〔鉢形土器〕

A.P.L13

19　AH2V





〔鉢形土器〕－19　（粗製）

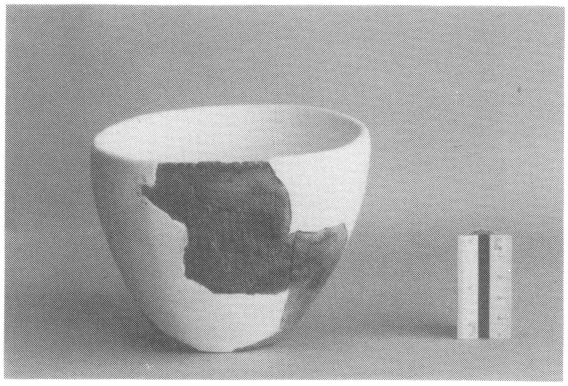
☆　(19) は、AH2V出土の第7群鉢形土器（大洞C1式）である。

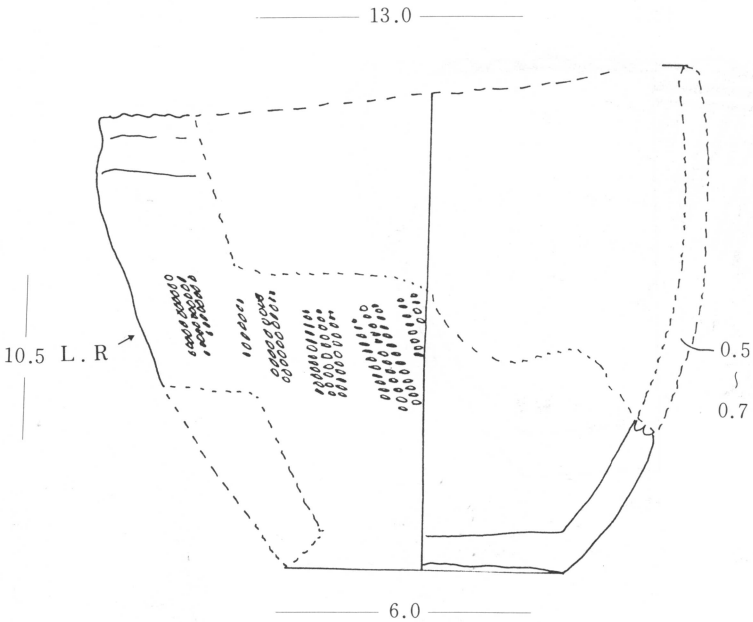
- このものの器形は、口頸部が内傾し、肩部が強く張る器形で、底面は、上げ底気味のものである。
- 施文は、肩部直上に「刺突文」があり、胴部には、R・lの単軸撚糸文が密に施文されるものである。
- 色調は、黄褐色を呈するが、二次的に火を浴びているため部分的に黒色を呈する。胎土・焼成とも最良で堅緻である。

〔鉢形土器〕

A.P.L14

20　　AH2Ⅰ



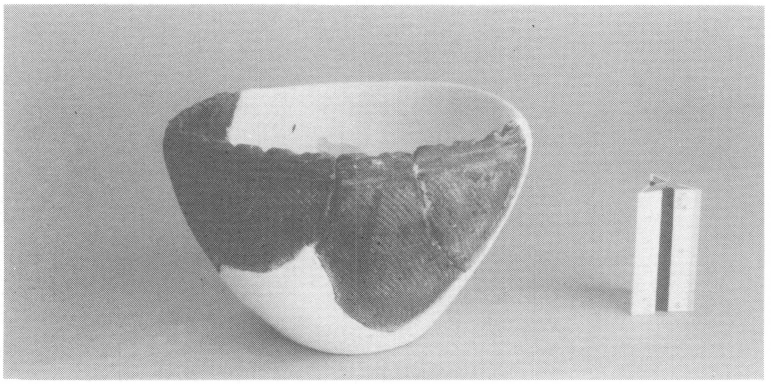


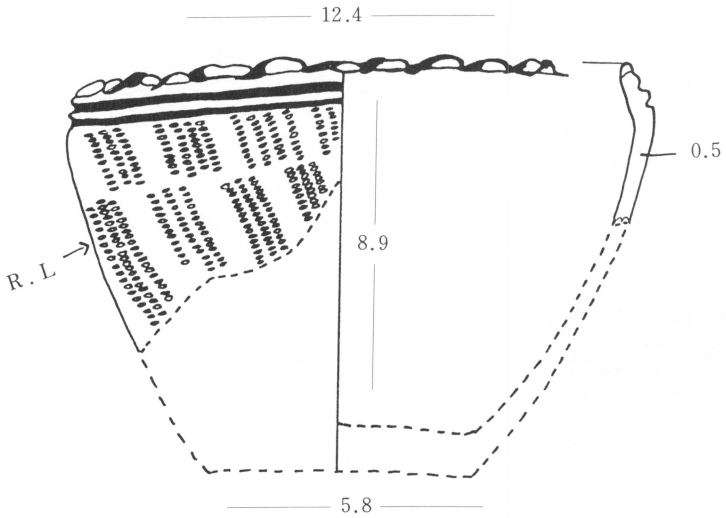
〔鉢形土器〕－20　（粗製）

☆　(20) は、AH2Ⅰ出土の第7群鉢形土器（大洞C1式）である。

- この (20) の器形は、「くの字」状にゆるく外反し、肩部がゆるくふくらむもののようである。また、底面は、やや「上げ底」を呈する。
- 口頸部〜肩部・胴部には、L・R縄文が右下りに施文されるものである。
- 色調は、灰赤褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

21 AH1V





〔鉢形土器〕－21　（粗製）

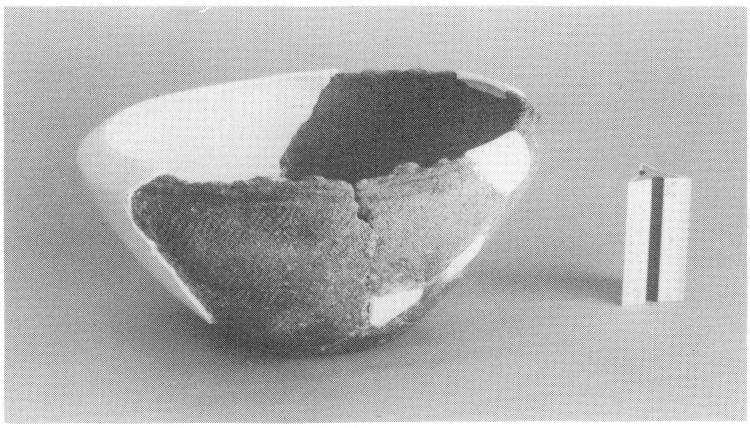
☆　(21) としたものは、AH1V出土の第7群土器（大洞C1式）である。

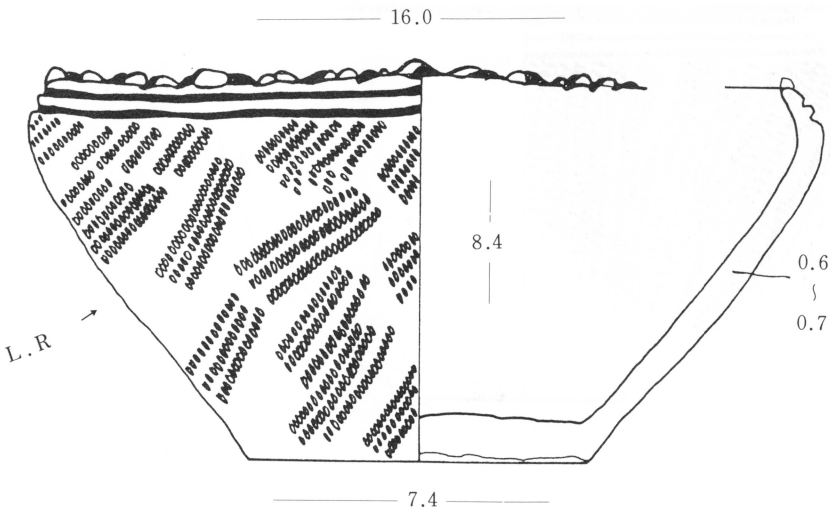
- このものの器形は、「小突起」が付せられ、小波状の口縁をなし、口頸部が内傾し、肩部が張る器形である。
- 施文は、頸部に2本の平行沈線があり、胴部には、0段多条のR・L縄文が施文されている。
- 色調は、灰褐色一部黒色を呈し、内面は煮沸痕のため黒色を呈する。胎土・焼成とも良く堅緻である。

〔鉢形土器〕

A.P.L16

22　　AH3Ⅱ





〔鉢形土器〕－22　（粗製）

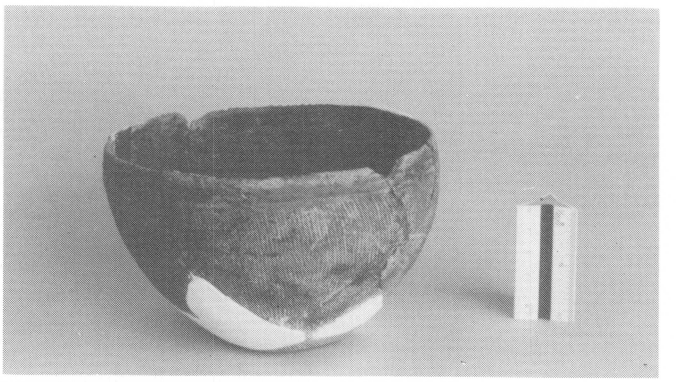
☆　(22) としたものは、AH3Ⅱ出土の第7群土器（大洞C1式）である。

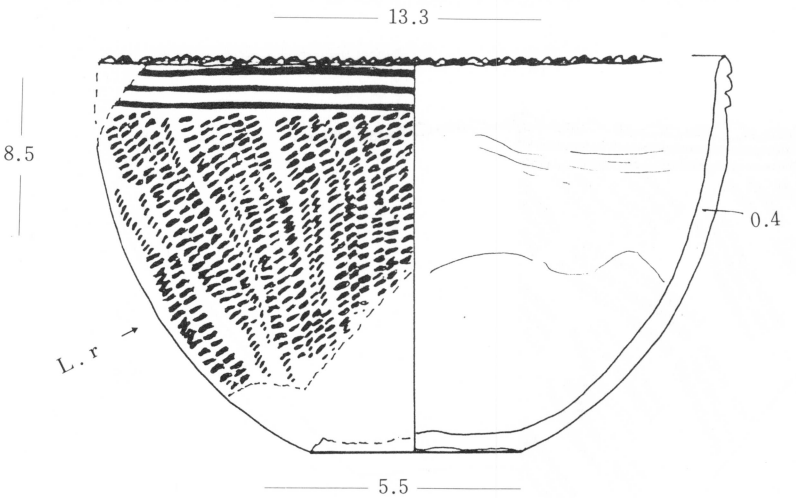
- 器形は、口縁が平縁であるが「小突起」が付けられるもので、そのため小波状を呈し、口頸部は、強く内傾し、肩部が張る器形で、底面は、やや「上げ底」を呈するものである。
- 施文は、頸部に2本の平行沈線文が施文され、肩部下には、0段多条のL・R縄文が斜行するものである。
- 色調は、灰褐色を呈し、二次的に火を浴びた部分は黒色を呈する。胎土・焼成ともやや良好である。

〔鉢形土器〕

A.P.L17

23　　AH2





〔鉢形土器〕－23　（粗製）

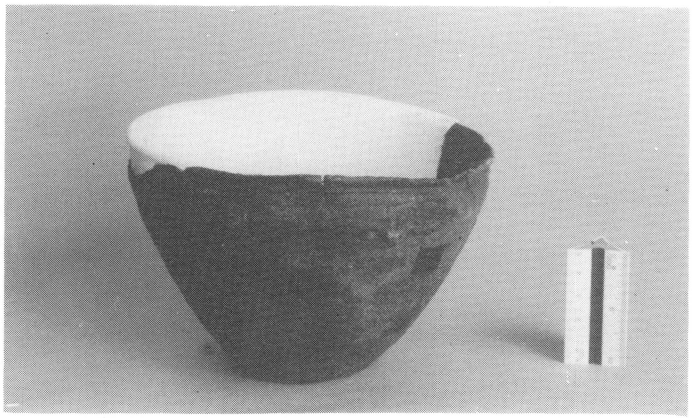
☆　(23) は、AH2Ⅰ出土の第7群鉢形土器（大洞C1式）である。

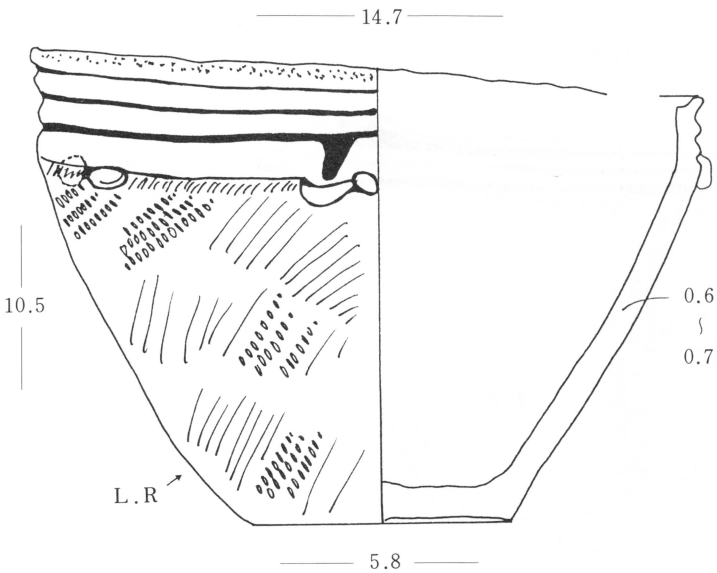
- この鉢形土器は、口縁には、刻目が付せられ小波状を呈する。口頸部は、ゆるく外反し、肩部がやや張るもので、胴部もまるく、ふくらむ器形で、底面は平底を呈する。
- 施文は、口頸部に3条の沈線がめぐり、肩部下には、単軸撚糸文が縦位に施文されるものである。
- 色調は、外面黒褐色、内面黒色を呈する。胎土・焼成とも良く堅緻なものである。

〔鉢形土器〕

A.P.L18

24　　AH1Ⅱ



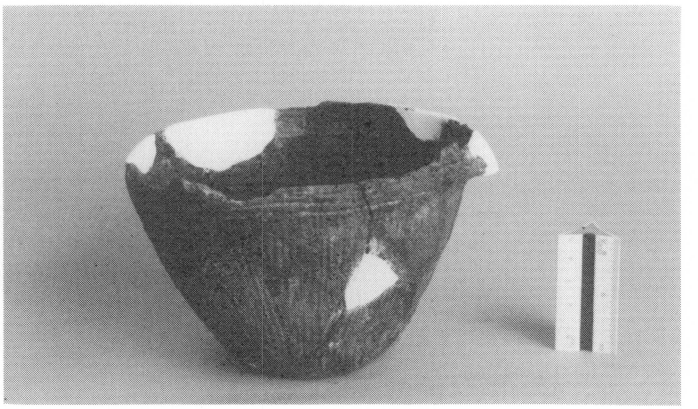


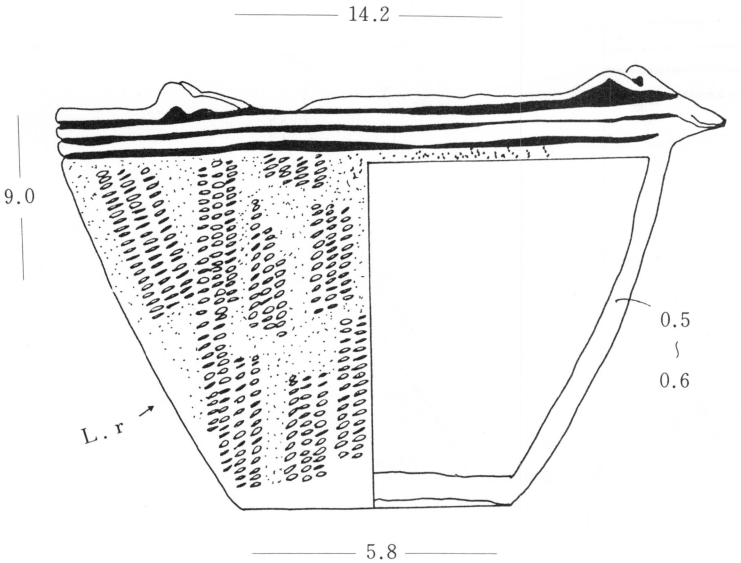
〔鉢形土器〕－24　（粗製）

☆　(24) は、AH1Ⅱ出土の第10群鉢形土器（大洞A式）である。

- この土器の器形は、口頸部がゆるく張る器形で、底面がわずかに「上げ底」である。
- 施文は、頸部に平行沈線文が3条めぐり、3条目の沈線から短沈線が垂下している施文で、肩部下には、横に突き出る「小突起」を付すものである。また、胴部には、L・R縄文が斜行する。
- 色調は、内外とも黒色を呈する。胎土・焼成とも良好である。

25 AH1Ⅳ





〔片口付鉢形土器〕－25　（粗製）

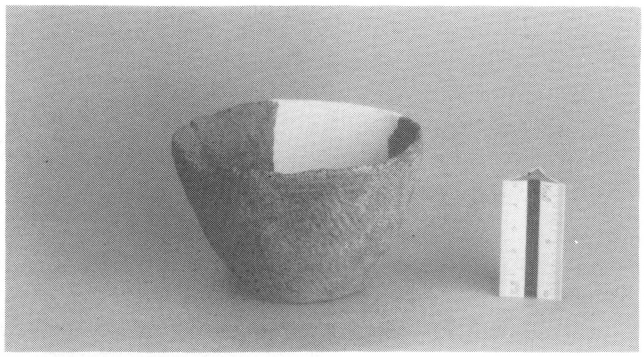
☆　(25) は、AH1Ⅳ出土の第8群土器（大洞C2式）である。

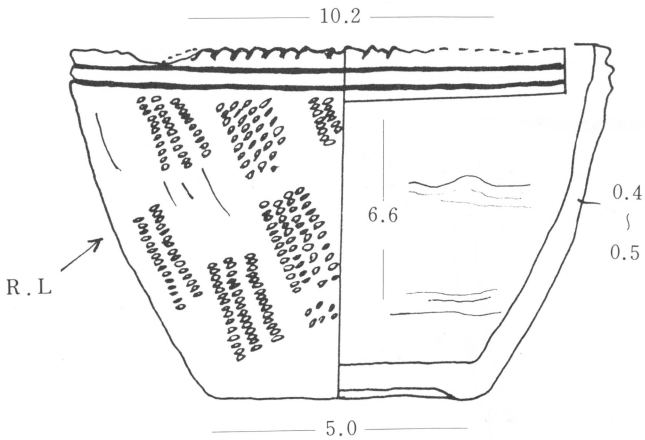
- このものの器形は、口頸部がやや内傾するもので、口縁には、「小突起」を有し、肩部がわずかに張るもので、片口を付している。また底面は、「上げ底」を呈する。
- 施文は、頸部に3条の平行沈線文がめぐり、胴部には、単軸撚糸文が縦位に施文されている。
- 色調は、内外面とも黒色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

〔鉢形土器〕

A.P.L20

26　　H2Ⅳ





〔鉢形土器〕－26　（粗製）

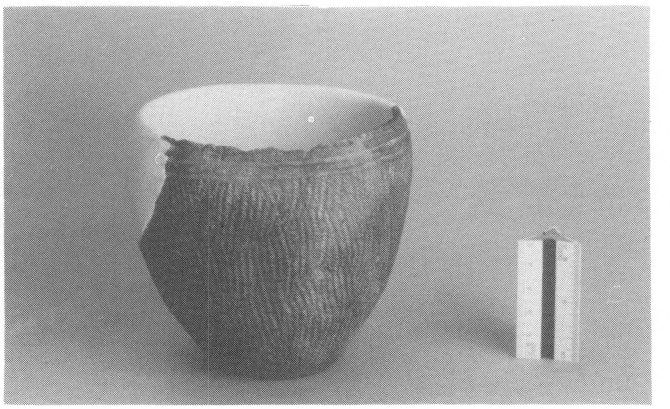
☆　(26) は、AH2Ⅳ出土の第8群鉢形土出（大洞C2式）である。

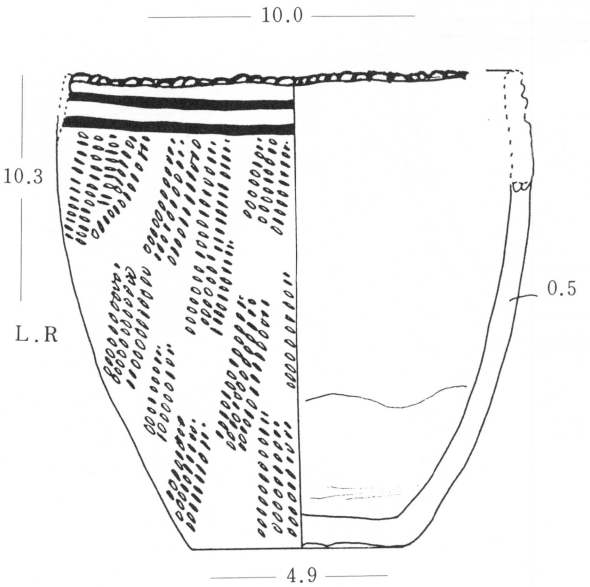
- この (26) の器形は、口頸部が外反し、肩部がやや張るもので、底面はわずかに「上げ底」のものである。
- 施文は、頸部に無文帯をもち、肩部に沈線文が2条めぐるもので、胴部には、L・R縄文が施文されるものである。
- 色調は、黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

〔鉢形土器〕

A.P.L21

27　　H2Ⅲ





〔鉢形土器〕－27　（粗製）

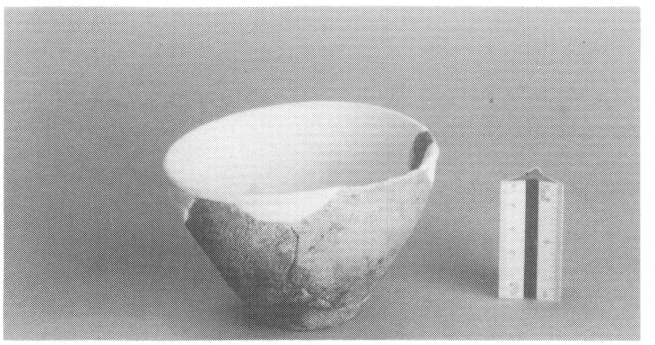
☆　(27) は、AH2Ⅲ出土の第7群鉢形土器（大洞C1式）である。

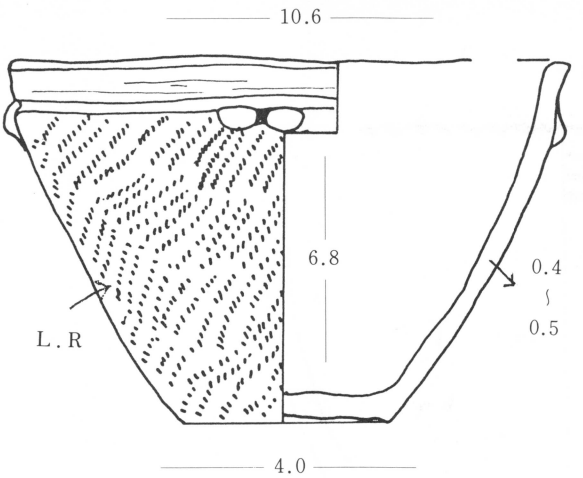
- この鉢形土器は、口縁には刻目をもち、口頸部はわずかに外反するもので、底面は「上げ底」を呈するものである。
- 施文は、頸部に2条の沈線文がめぐり、胴部には、L・R縄文が施文される。
- 色調は、明赤褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。

〔鉢形土器〕

A.P.L22

28　　H2V



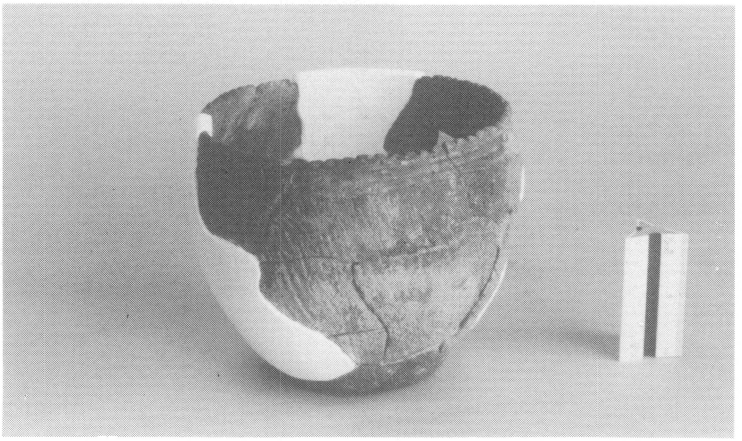


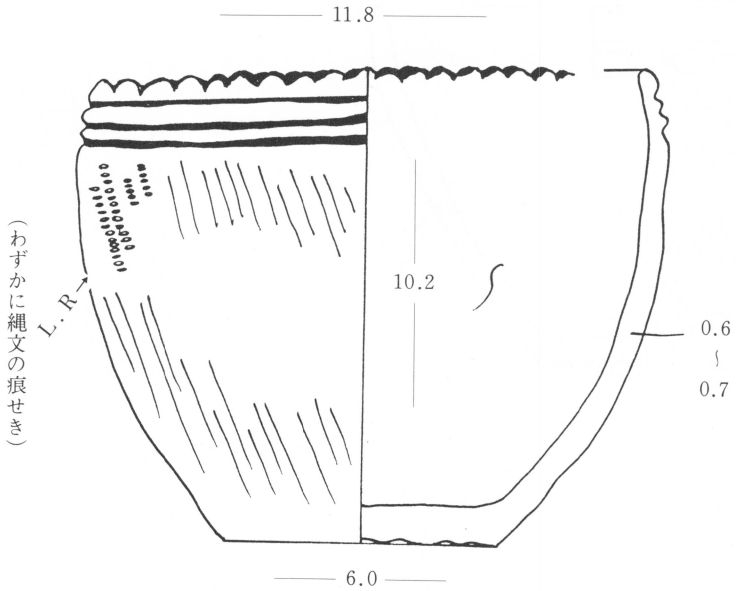
〔鉢形土器〕－28　（粗製）

☆　(28) としたものは、AH2V出土の第7群鉢形土器（大洞C2式）である。

- この鉢形土器は、口頸部がやや外反するもので、肩部は丸味をもつ器形で底面は、わずかに「上げ底」である。なお、口縁は、ゆるい波状を呈する。
- 施文は、頸部は無文帯となっており、胴部には斜縄文が施文される。
- 色調は、外面灰黒色、内面灰褐色を呈する。胎土・焼成は良好で堅緻なものである。

29 AH2Ⅱ



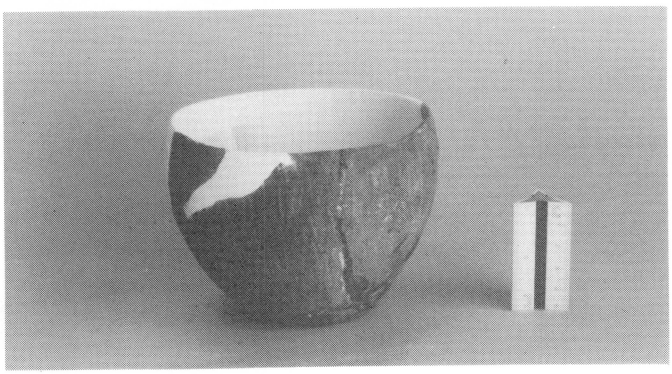


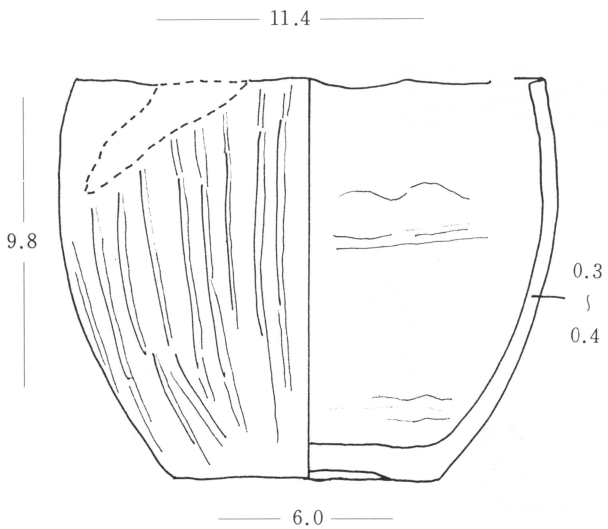
〔鉢形土器〕－29　（粗製）

☆　(29) としたものは、AH2Ⅱ出土の第7群鉢形土器（大洞C式）である。

- この鉢形土器の器形は、口縁部が小波状を呈し、口頸部が内傾し肩部が丸味をもつもので、底面は、やや中高のものである。
- 施文は、頸部に平行沈線がめぐり、肩部下には、L・R縄文が施文されるものらしいが、磨滅のため条痕文のように見える。
- 色調は、外面赤褐色、内面黒色、胎土・焼成はやや不良である。

30 H2Ⅲ





〔鉢形土器〕－30　（粗製）

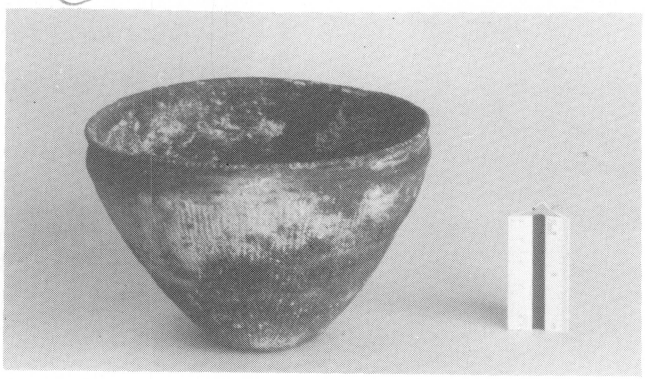
☆　(30) は、AH2Ⅲ出土の第8群鉢形土器（大洞C2式）である。

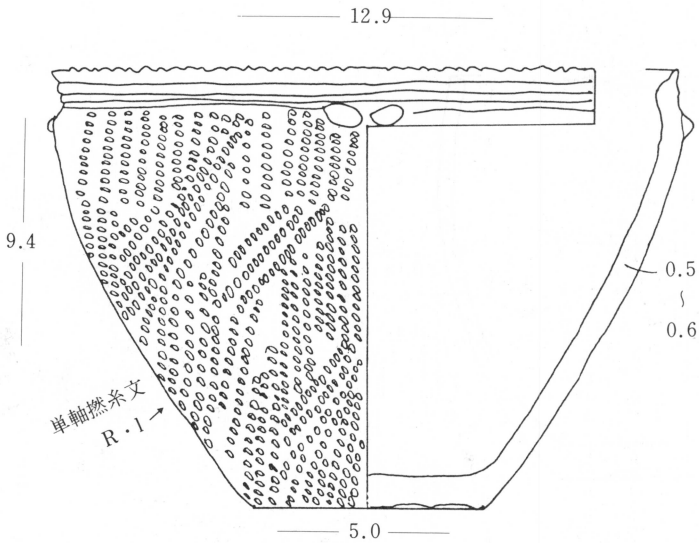
- この土器の器形は、平縁で、口頸部が内傾し、胴部がふくらむ器形で、底面は「上げ底」をなすものである。
- 施文は、口縁直下より条痕文が施文されるものであるが、条痕文の施文は、やや不整である。
- 色調は、外面暗赤褐色、内面上半黒褐色、下半赤褐色を呈する。胎土・焼成は良く堅緻である。

※（註）→鉢形土器で「条痕文」が施文されたものの出土は少ない。

31

AH2Ⅲ





〔鉢形土器〕－31　（粗製）

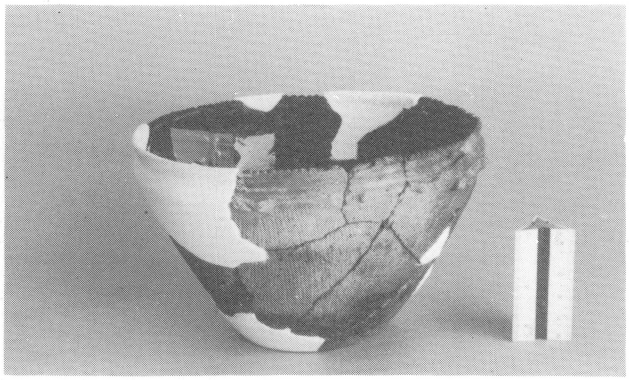
☆　(31) は、AH2Ⅲ出土の第7群鉢形土器（大洞C1式）である。

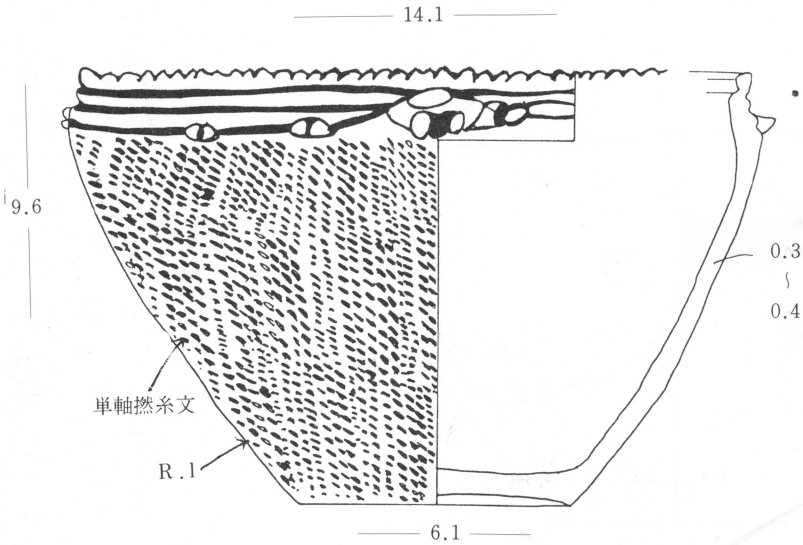
- 器形を見ると、「大洞C1式」よりも（大洞C2式）に近いものと思われるが一応（大洞C1式）とした。口縁は、平縁であるが、「刻目」を有するもので、口頸部が外反し、肩部が張る器形で底部の径は、口径に比して小さい。また底面はわずかに中高である。
- 施文は、頸部～肩部へ3条の平行沈線文がめぐり、肩部下には、2こ1対の粘土粒が4対付くもので、胴部には、単軸撚糸文が縦位に施文されている。
- 色調は、外面赤褐色一部二次的に火を浴びているため黒色、内面下半黄褐色、上半一部黒色を呈し、中央部は、煮沸痕が付着している。胎土・焼成は良いがややもろい。

〔鉢形土器〕

A.P.L26

32　　H2Ⅱ





〔鉢形土器〕－32　（粗製）

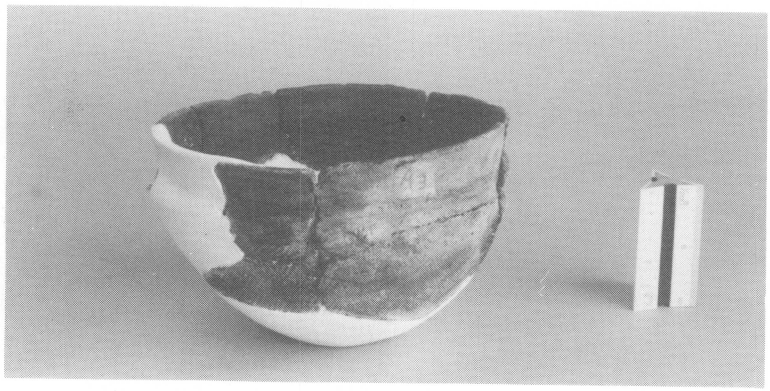
☆　(32) は、AH2Ⅱ出土の第10群土器（大洞A式）である。（註）→大洞C2式末～大洞A式初頭。

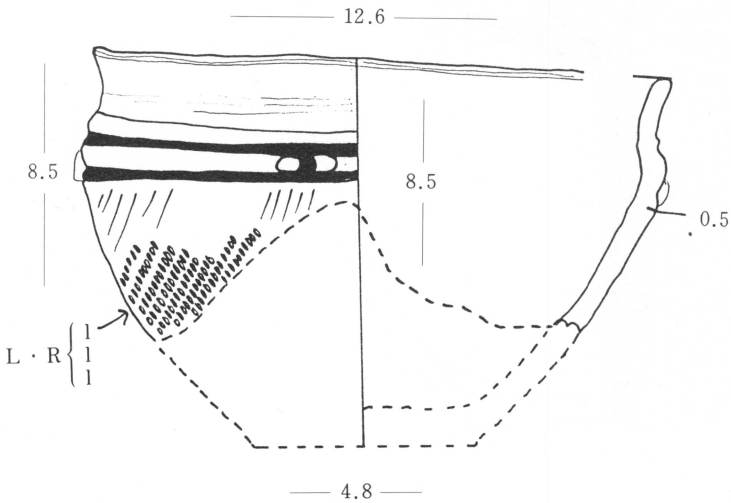
- この鉢形土器の器形は、口頸部が外反し、肩部が張る器形で、底面が「上げ底」のものである。なお、このものは、口径に対して底径が小さい。(肩部下には、山型突起と、2こ1対の粘土粒がある。)
- 施文は、平縁の口縁に「刻目」を有し、頸部～肩部には、2条の平行沈線文がめぐり、他に、横方向に突出する「小突起」間をつなぐ沈線が施文される。また、内面にも1条の沈線がめぐっている。胴部には、単軸撚糸文R・1が施行される。
- 色調は、外面赤褐色一部黒色（スス付着）、内面上半灰黒色、下半黄褐色を呈する。胎土・焼成とも良好である。

〔鉢形土器〕

A.P.L27

33　　AH2Ⅳ





〔鉢形土器〕－33　（粗製）

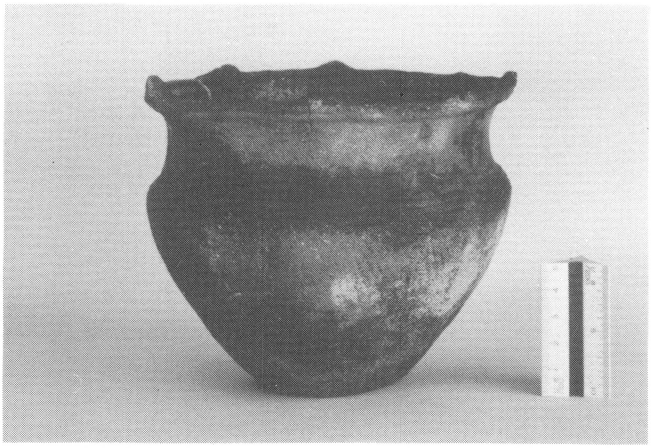
☆　(33) は、AH2Ⅳ出土の第8群鉢形土器（大洞C2式）である。

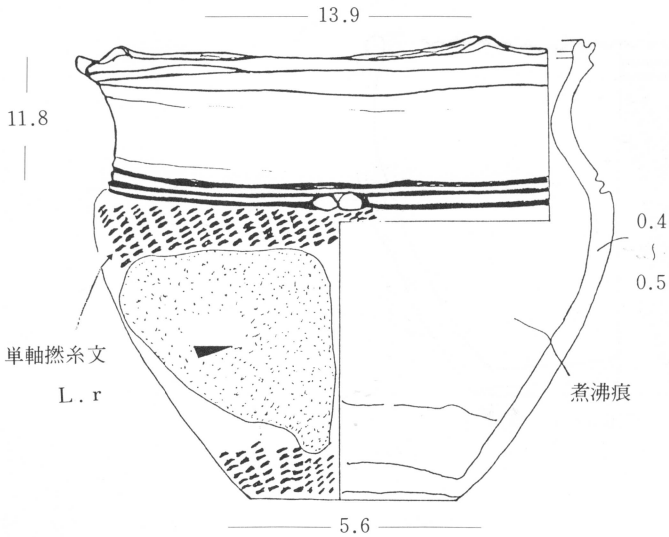
- このものの器形は、口縁が平縁で、口頸部が弧状に外反し、肩部から胴部へかけて、ふくらむ器形である。(底面は不明)
- 施文は、口唇部に沈線があり、頸部は無文帯をなし、沈線文は肩部まで下っている。2条の沈線のうち、下位の1条は、2こ1対の「粘土粒」4対の間をつないでおり、肩部下には、0段多条の2段単節L・R縄文が施文されているものである。
- 色調は、外面暗灰褐色、内面灰黒色を呈し、胎土・焼成はやや不良である。

〔鉢形土器〕

A.P.L28

34　　AH1V





〔鉢形土器〕－28　（粗製）

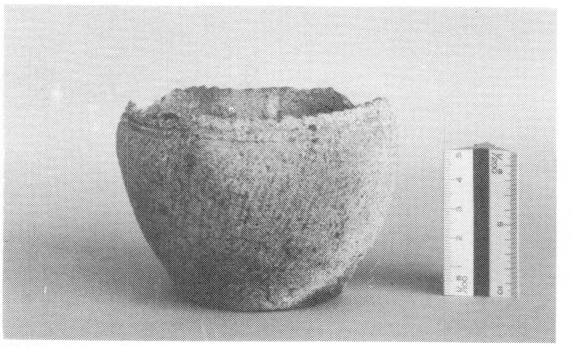
☆　(24) は、AH1V出土の第8群土器（大洞C2式）である。

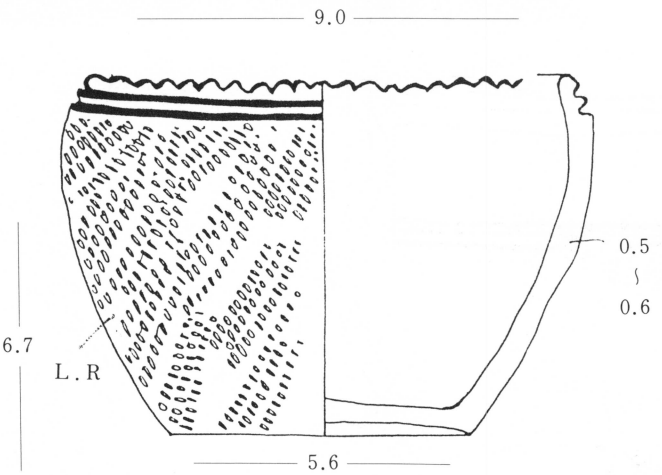
- この鉢形土器の器形は、口縁が波状口縁で、2こ1対の「山型突起」と、2ケ1対の「二叉山型突起」が、それぞれ4対交互に付くものらしい。頚部の幅が広く、口頚部がまるく外反するもので肩部が張る器形である。なお底面は「上げ底」である。
- 施文は、口唇部に沈線が1条、器内面にも1条の沈線文があり、肩部〜肩部下には、3条の沈線文があって、3条目の沈線は、粘土粒間を連結している。胴部には、L・r単軸撚糸文が施文されている。
- 色調は、外面赤褐色、一部黒色、内面下半黄褐色、上半黒色を呈する。胎土・焼成はやや不良である。

〔鉢形土器〕

A.P.L29

35　　AH1Ⅳ





〔鉢形土器〕－35　（粗製）

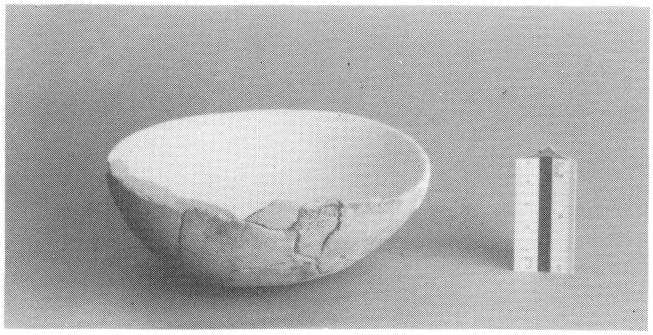
☆　(35) は、AH1Ⅳ出土の第7群鉢形土器（大洞C1式）である。

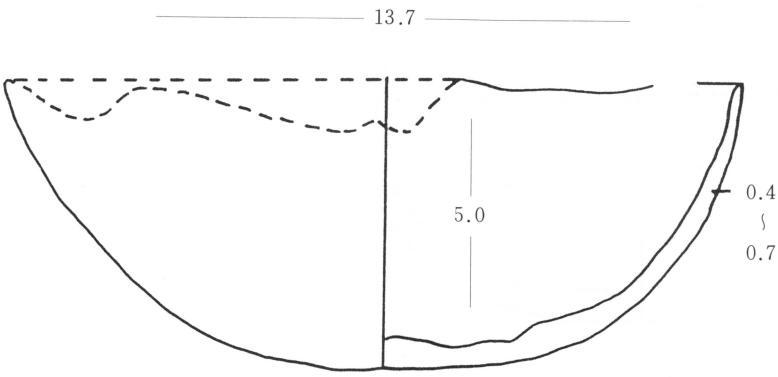
- このものの器形は、口頸部が内傾し、口縁には「刻目」をもっている。胴部は、まるくふくらむ器形で、底面は「上げ底」を呈するものである。
- 施文は、頸部に2条の沈線文がめぐり、肩部下には、二段単節L・R縄文が斜行するものである。
- 色調は、明黄褐色である。胎土に砂粒を含みザラザラしているが、焼成は良く堅緻である。

〔浅鉢形土器〕

A.P.L30

36　　DⅡ





〔浅鉢形土器〕－36

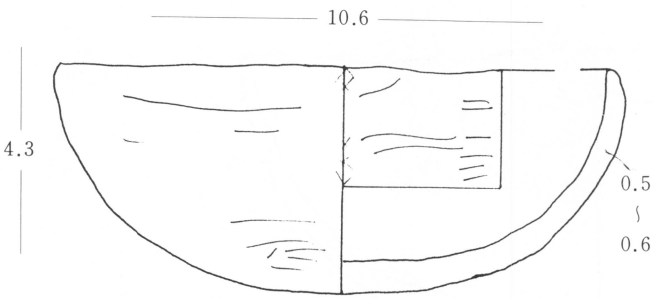
☆　(36) は、AC～F区Dグリット（2グリット）Ⅱ層出土の第8群浅鉢形土器である。

- このものの器形は、不整な平縁をなすものらしく、浅鉢というよりも碗形に近い器形のもので底面は、丸底をなすものである。
- 施文はなく、色調は、内外とも明黄褐色を呈する。胎土・焼成とも良好なものである。

〔碗形土器〕

A.P.L31

37　　AH3Ⅳ



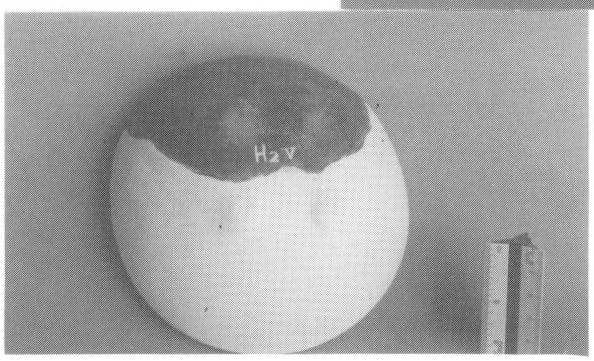
〔碗形土器〕－37　（精製）

☆　(37) としたものは、AH3Ⅳ出土の第10群碗形土器（大洞A式）である。

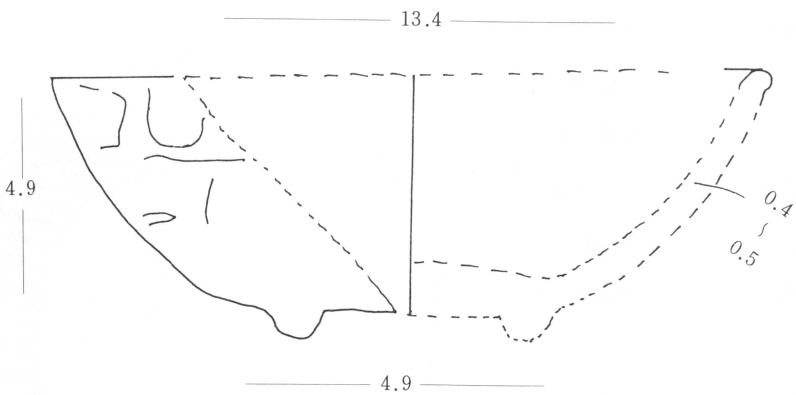
- このものの器形は、口縁が不整な平縁で、口頸部が内傾し、肩部は、まるみを持って弧状に湾曲する器形で、底面は丸底を呈する。
- 施文はなく、無文土器であるが研磨されて、器表面は平滑面をなしている。
- 色調は、暗赤褐色を呈し、一部二次的に火を浴びて黒色を呈する。胎土は精選されたもので、焼成もきわめて良い。

〔脚付碗形土器〕

38 a　　AH 2 V



38 b



〔脚付碗形土器〕－38　（精製）

☆　(38) は、AH 2 V出土の第10群土器とした脚付碗形土器（大洞A式）である。

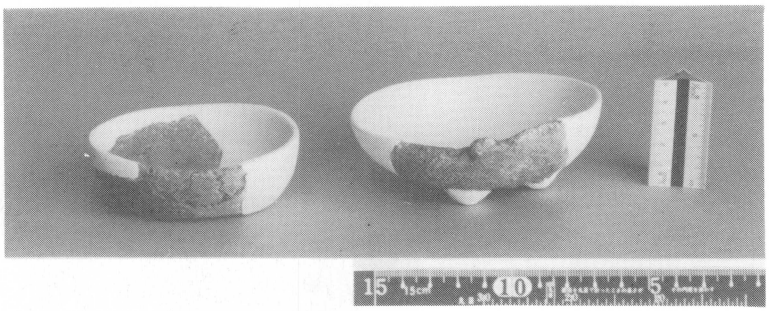
- (38) の器形は、平縁で胴下部にふくらみがあるもので、底面には、4この脚が付くもののようである。
- 施文はなく、無文土器であるが、胎土は精選されたもので、焼成も良く、色調は、暗赤褐色である。

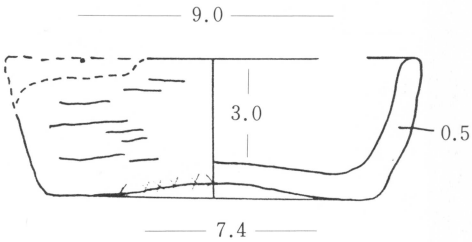
※　この (38) のように脚の付けられた土器は、その出土が少なく、当遺跡においては、2～3例がある程度で珍らしい。

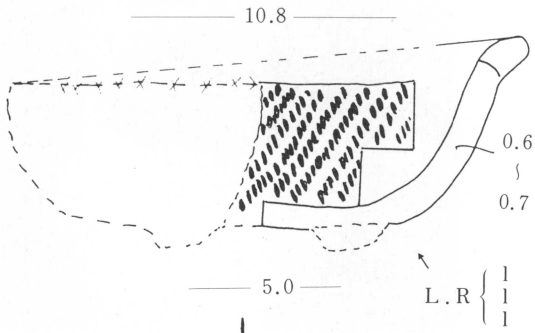
〔皿形・四脚付浅鉢形土器〕

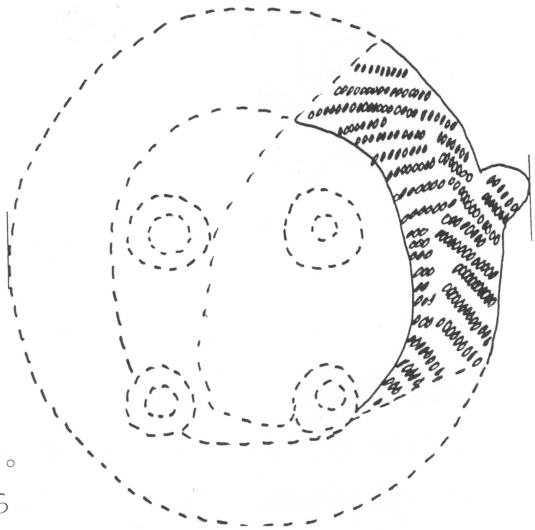
A.P.L33

39　AH2Ⅳ　　40　AH1Ⅲ









〔皿形・四脚付浅鉢形土器〕－39・40

（粗製）

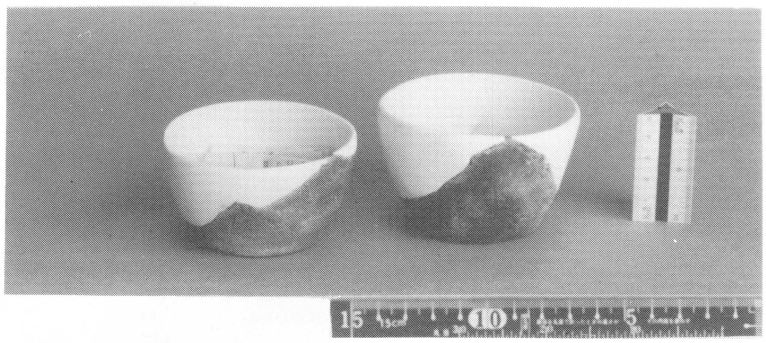
☆　(39・40) は、それぞれ、AH2Ⅳ、AH1Ⅲ出土の第8群皿形土器（大洞C2式)、および第4群とした四脚付浅鉢形土器（十腰内Ⅰ・Ⅱ式の中間型式）である。

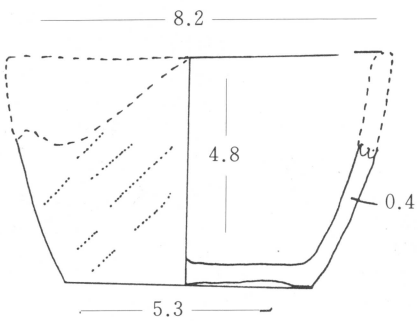
- 器形は、(39)としたものは、底面径と口径の差が小さいもので、胴部がわずかにふくらむ器形で底面は「上げ底」である。
- (40) は、口頸部が外反し、胴下部がふくらむ器形で、底面には、四脚がつくものである。
- 施文は、(39) は無文のものであるが、(40) は、2こ1対の「小突起」とL・R縄文が施文されるものである。また、口唇部にも縄文が施文されるものである。
- 色調は、(39) は、明赤褐色、(40) は、暗赤褐色を呈する。胎土・焼成はやや良好である。

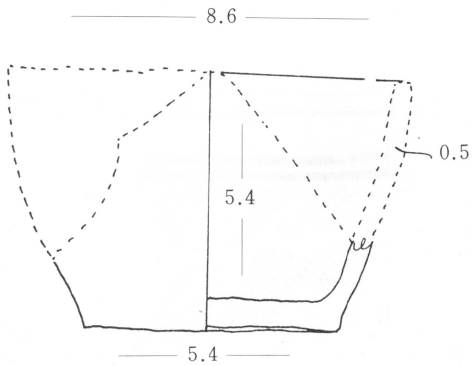
〔小形鉢形土器〕

A.P.L34

41　AH1Ⅱ　　42　AH2Ⅰ







〔小形鉢形土器〕－41・42　（粗製）

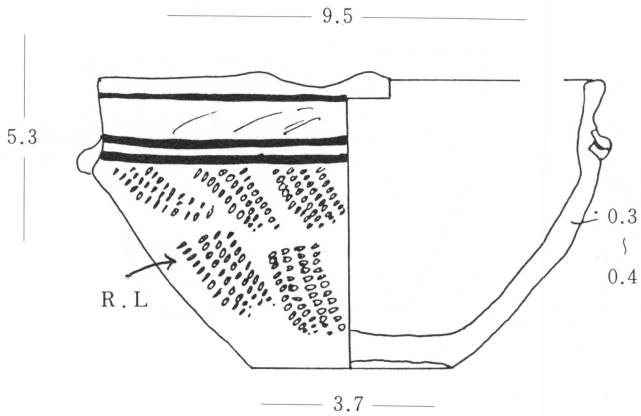
☆　(41・42) は、それぞれ、AH1Ⅱ・AH2Ⅰ出土の第8群とした鉢形土器（大洞C2式）である。

- (41・42) の器形は、口縁部が欠失しているため、正確な器形は不明であるが、写真、または、実測図のようになると推定される。
- (41・42) とも無文土器と思われる。色調は、(41) は、暗褐色、(42) は、灰褐色である。また、これらのものは、胎土・焼成ともに良好である。底面は、(41)は「上げ底」、(42) は、やや「上げ底」を呈する。

〔鉢形土器〕

A.P.L35

43　　AH2Ⅱ



〔鉢形土器〕－43　（粗製）

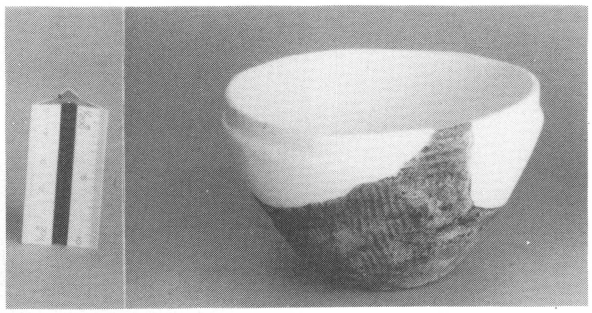
☆　(43) は、AHⅡ出土の第８群とした小形土器（大洞C２式）である。

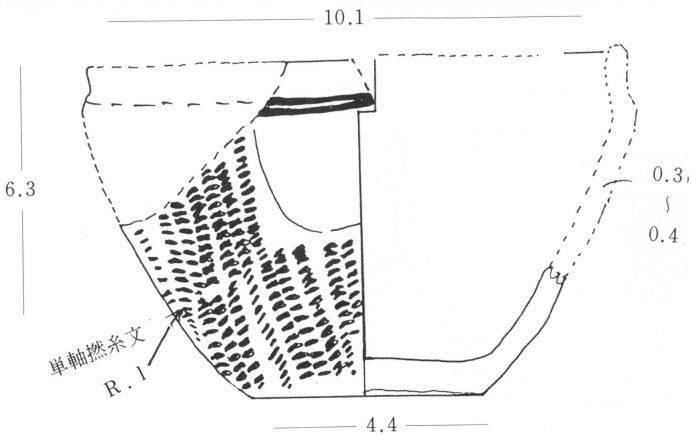
- このものの器形は、平縁で、一部に「刻目」があり、低い「小突起」が付けられるもので、口頸部が外反し、肩部が張る器形である。また、底面は「上げ底」を呈する。
- 施文は、口唇部に部分的に沈線文があり、頸部には無文帯を有し、肩部には、２条の沈線文がめぐるもので、肩部には、二叉山形状の粘土粒が付くものである。肩部下には右下りの斜縄文が施文される。
- 色調は、灰褐色、一部暗黒色で、内面もまた黄褐色一部灰黒色である。胎土・焼成ともやや不良である。

〔鉢形土器〕

A.P.L36

44　　AHⅢ





〔鉢形土器〕－44　（粗製）

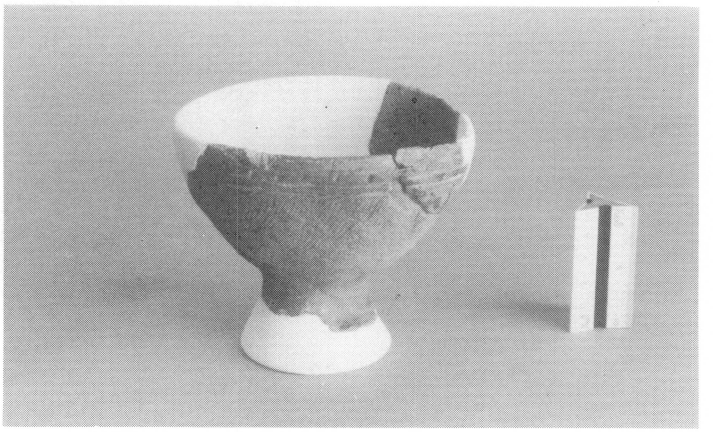
☆　(44) としたものは、AH2Ⅲ出土の第8群土器（大洞C2式）小形鉢形土器である。

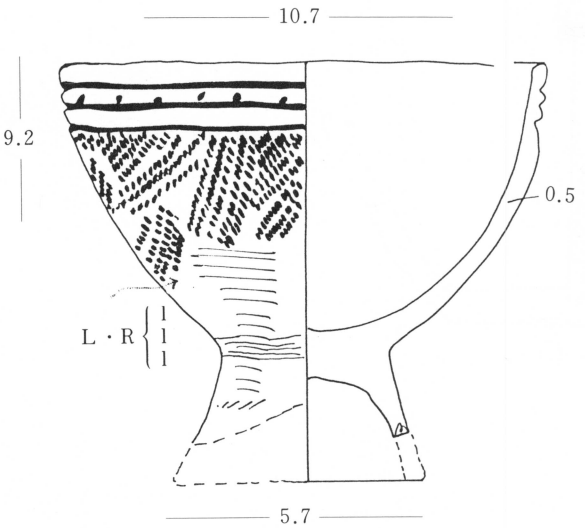
- この土器の器形は、口頸部が、わずかに外反し、肩部が張る器形で、底面がやや「上げ底」のものである。
- 施文は、口頸部に平行沈線文が3条めぐり、肩部～底部までは、単軸撚糸文R・1が密に施文されるものである。
- 色調は、外面灰黒色、内面上半黒色、下半灰褐色を呈する。胎土・焼成は良好である。

〔台付鉢形土器〕

A.P.L37

45　　H1Ⅱ





〔台付鉢形土器〕－45　（粗製）

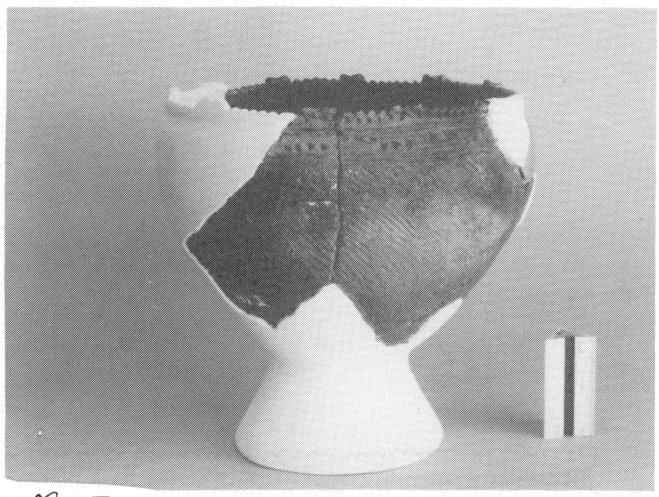
☆　(45) は、AH1Ⅱ出土の第7群とした台付鉢形土器（大洞C1式）である。

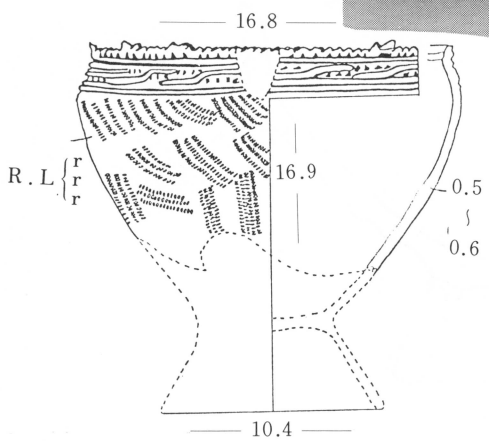
- このものの器形は、平縁で、口頸部がわずかに内傾し、胴部がふくらむ器形で、台部の下部が欠失しているため不明であるが、外側に広がるものらしい。
- 施文は、口頸部に3条の沈線文がめぐり、1～2条沈線文の間に「刺突文」が施文される。胴部下には、0段多条のL・R縄文が左下りに施文される。
- 色調は、外面暗褐色、内面明黄褐色を呈する。胎土・焼成とも良く堅緻である。

〔台付鉢形土器〕

A.P.L38

46　　AH2Ⅲ





〔台付鉢形土器〕－46　（粗製）

☆　(46) は、AH2Ⅲ出土の第7群とした台付鉢形土器（大洞C1式）である。

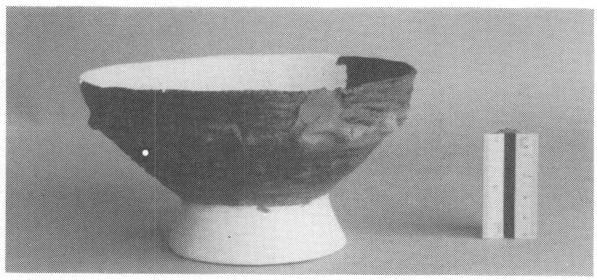
- この (44) とした台付土器の器形は、口頸部がやや外反し、肩部がまるみをもち、胴部も軽くふくらむ器形である。台部は、欠失しているため、その器形は不明であるが、多分外側に開くものと思われる。
- 施文は、口縁に「小突起」をもち、その突起間には、「刻目」をもつもので、頸部の上端と肩部には、2～3条の沈線文があって施文帯を区画している。施文帯には、「刺突文」が上段、下段に交互に施文されている。肩部下には、0段多条のR・L縄文が台部上まで施文されているものである。
- 色調は、外面灰褐色、内面黒色を呈するが、内外面とも一部は、赤褐色を呈する。胎土・焼成とも良く堅緻である。

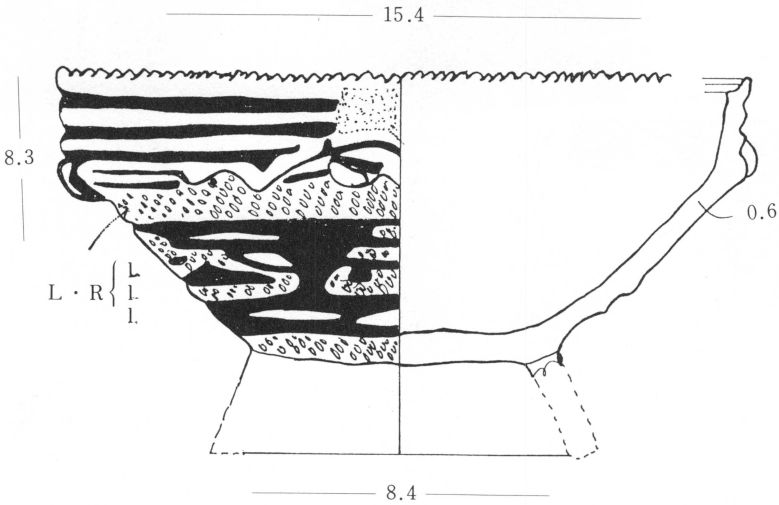
(☆) この土器は、大洞B・C～C1式へ移行期のものであろう。B・C式の名残りをもっている。

〔台付鉢形土器〕

A.P.L39

47　　AH2I





〔台付鉢形土器〕－47　（粗製）

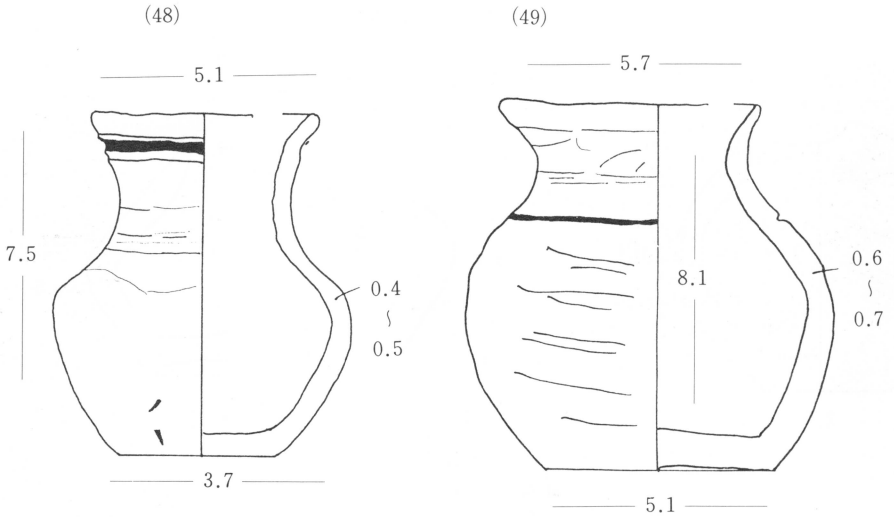
☆　(47) は、AH2出土の第10群土器－台付鉢形土器（大洞A式）である。

- この土器の器形は、口縁部に「刻目」をもち、口頸部はやや外反し、張る器形で、台部が欠失したものである。
- 施文は、頸部に3条の沈線文がめぐり、肩部には、横に突出する「山型突起」と「二叉山型突起」とが付けられるもので、「山型突起」には沈線から垂下する短沈線が施文されている。胴部の下位には、2条の沈線文がめぐり、施文帯を区画し、この施文帯には、「入り組み工字文」の未完成な文様が施文されるものである。
- 色調は、外面灰黒色、内面上半黒色（スス付着）、下半黄褐色を呈する。胎土・焼成は良い。

〔壺形土器〕

A.P.L40

48　AH1Ⅳ　　49　AH2Ⅳ



〔壺形土器〕－48・49

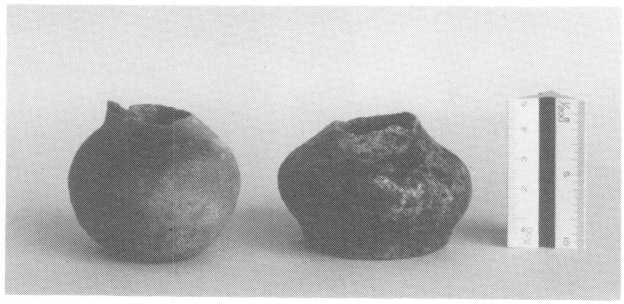
☆　(48・49) は、それぞれAH1Ⅳ・AH2Ⅳ出土の第8群とした壺形土器（大洞C2式）である。

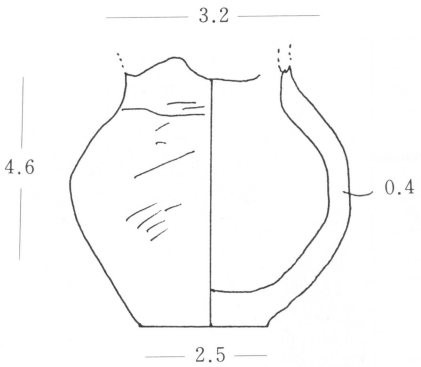
- (48) の器形は、平縁で頚部幅が広く、やや末広がり状である。肩部は強く張り、底面は「平底」を呈する。(49)は、口縁が平縁で、口頚部が弧状に外反するもので、肩部から胴部は、まるみをもっている。最大幅は器高の上部にある。
- 施文は、(48)は、頚部に1条の沈線文がめぐるのみで他は無文である。(49)は、肩部の上端に1条の沈線文がめぐる他は、無文土器である。
- 色調は、(48)は、外面赤褐色、内面灰褐色、(49)は、外面暗黄褐色、内面も同様である。胎土・焼成はやや悪くザラザラするが堅緻である。

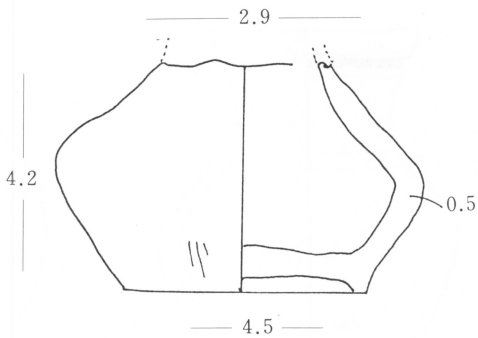
〔壺形土器〕

A.P.L41

50　2号住居址　　51　2号住居址内







〔壺形土器〕－50・51　（粗製）

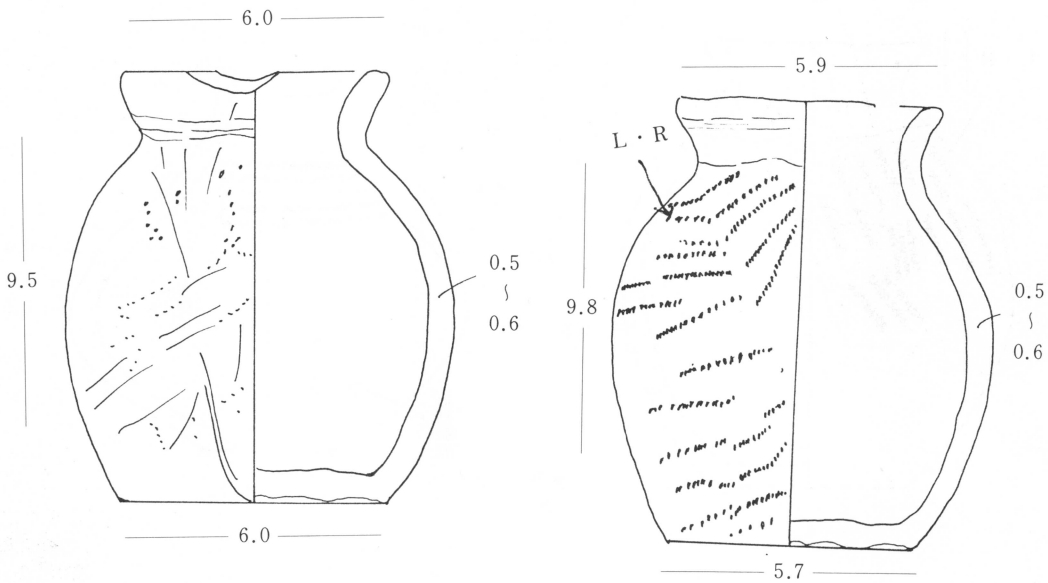
☆　(50・51) は、A地区C～F区の「2号住居址」の覆上（Ⅱ層）より出土した、第8群の小形壺形土器（大洞C 2式）である。(2号住居址は、須恵器・土師器年代の住居址である。)

- (50) の器形は、口頸部が欠失しているが、胴部は、球形のものである。(51)は、これも口頸部が欠失したものであるが、胴部は下ぶくれした器形で、底面は「上げ底」を呈する。
- (50・51) は、両者とも無文で施文はない。
- 色調は、両者とも暗褐色で、胎土・焼成とも良好なものである。

〔壺形土器〕

A.P.L42

52　AH1V　　53　AH1V



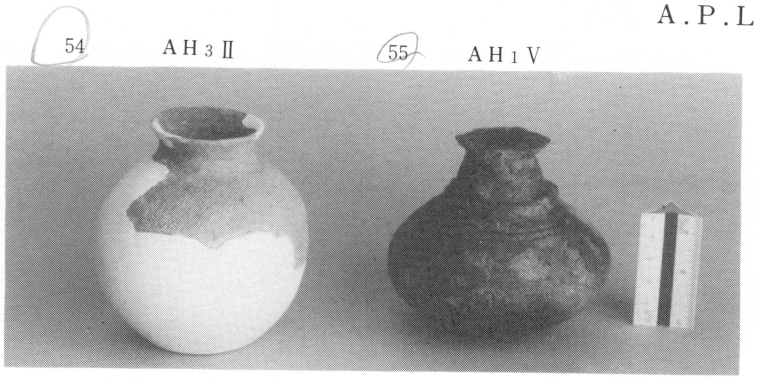
〔壺形土器〕—52・53　（粗製）

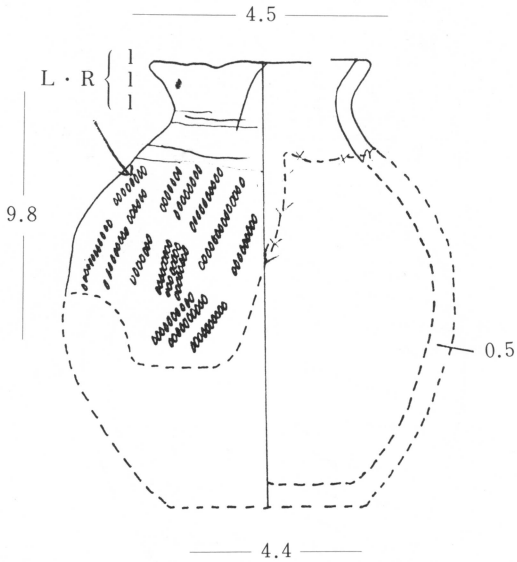
☆　(52・53) は、AH1V、AH1V出土の第8群土器（大洞C2式）である。

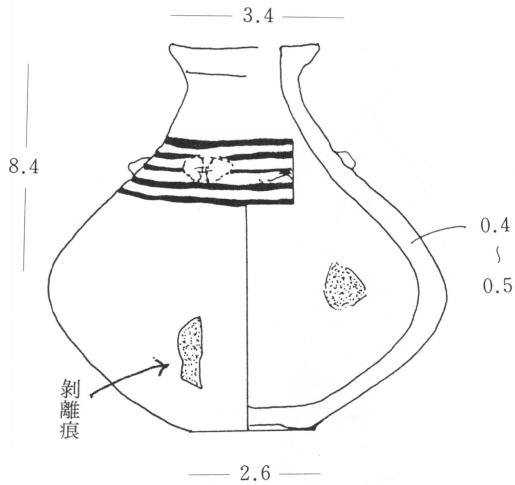
- 両者とも小形の壺形土器で、(52)は、口頸部が「くの字」状に強く外反するもので、胴部は、ふくらみが強く、球形の胴部のものである。底面は、やや「上げ底」ぎみを呈している。(53)は、前者と異なり口頸は、弧状に外反するもので肩部が張らず、最大幅は、胴部中央下にある。また、底面は、部分的に「上げ底」を呈する。
- (52) は、無文土器、(53)は、肩部下までは、左下り、胴部には横走するL・R縄文が施文される。
- 色調は、(52・53)とも、明赤褐色を呈する。また、内面は両者とも灰褐色で、胎土は両者とも微粒砂を含むが、焼成は良い。

〔壺形土器〕

A.P.L43







〔壺形土器〕—54・55　(粗製・精製)

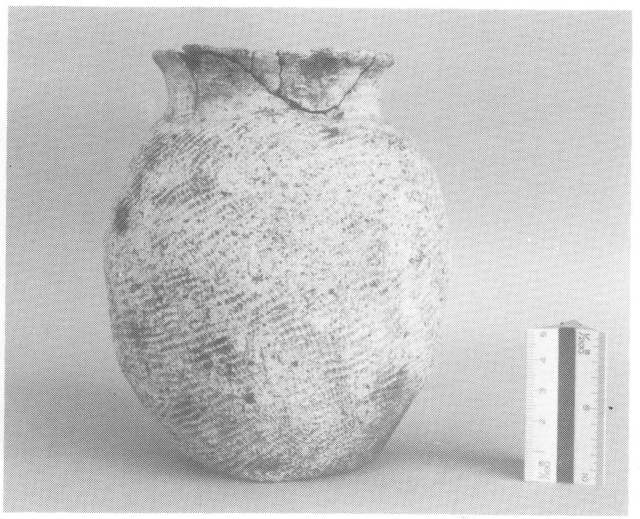
☆　(54・55) は、AH3Ⅱ、AH1Ⅴ出土の第8群土器（大洞C2式）である。

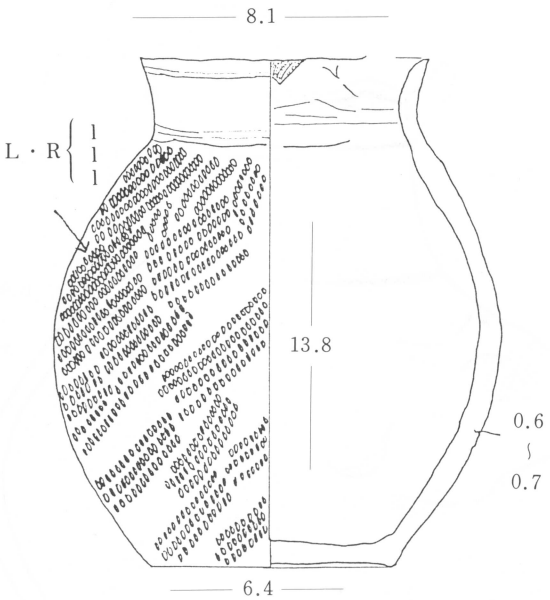
- (54) は、口頸部が弧状に外反し、胴部がふくらみ、球形に近い形態で、底面は欠失している。(54)は、口縁部は欠失しているが、末広がりの頸部をなし、胴部中央下に最大幅があって、いわゆる洋梨状の形態をしたものである。また、底面は「上げ底」である。
- 施文は、(54) は、口頸部が無文、肩部下には、0段多条のL・R縄文が不整に施文されている。(55)は、肩部に隆帯と沈線文があり、胴上部にも3条の沈線文がめぐるもので、肩部の隆帯には、2こ1対の粘土粒が付くものである。
- 色調は、(55) は、朱ぬり土器で、黒色の部分もある。胎土・焼成ともに (54・55) 良いが (54) は堅緻で、(55)は、軟質である。

〔壺形土器〕

A.P.L44

56　　AH1V





〔壺形土器〕－56　（粗製）

☆　(56) は、AH1V出土の第8群土器（大洞C2式）である。

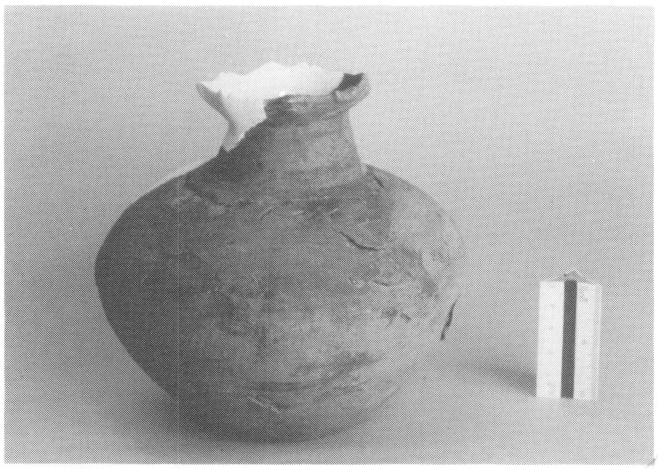
- この壺形土器の器形は、口頸部は外反し、肩部はわずかに張るもので、胴部は、やゝ長胴のタイプである。また、底面は、「上げ底」を呈する。
- 施文は、口頸部が無文で肩部下には、0段多条のL・R縄文が左下がりに施文される。
- 色調は、外面明黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良く、堅緻である。

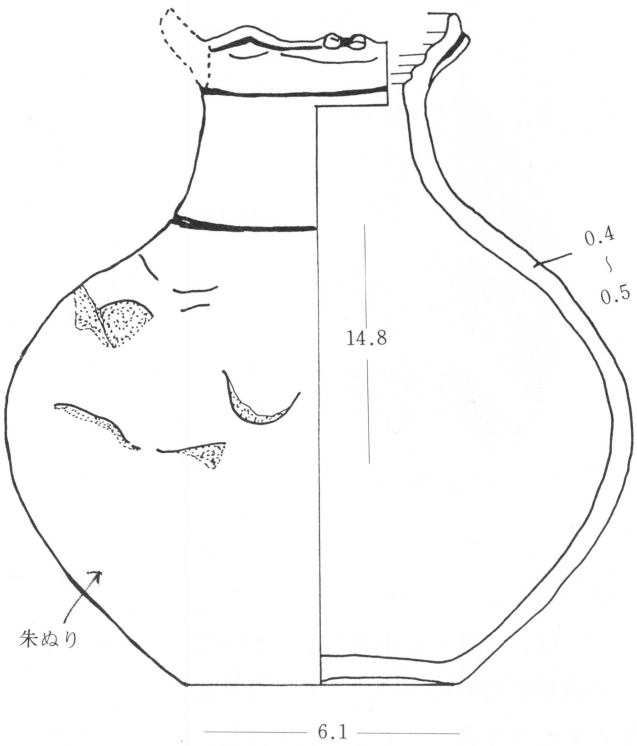
※　なお、この長胴タイプは、口頸部に無文帯をもつことから「大洞C2式」の後半に出現するものと思われる。

〔壺形土器〕

A.P.L45

57　N6Ⅰ中





〔壺形土器〕－57　（精製）

☆　(57) は、AN2地区N6区出土の第8群土器（大洞C2式）である。

- このものの器形は、口縁は、波状口縁で、「山型突起」と「二叉山型突起」を交互に付けるもので、頚部は末広がりとなっており、肩部が張らず、最大幅は、中央下にある器形で底面は「上げ底」を呈するものである。
- 施文は、口縁下に沈線文が1条めぐり、肩部に1条の沈線文、器内面に3条の沈線が施文される。他は無文で朱ぬり痕を認める。
- 色調は、灰黒色。胎土・焼成は良いが軟質に焼かれている。